

---

# 西国の巫女

あすかK

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

西国の巫女

### 【Nコード】

N9892X

### 【作者名】

あすかK

### 【あらすじ】

北の国が、西の国の「巫女」を誘拐した。??西国の最高権威「巫女」になるべく『力』の修行を続けて来た少女。少女のことを命にかえても護ると誓った獣人。北国の次期皇帝でありながら、軍の人形と化した強大な『力』を持つ皇太子。??『力』に翻弄されるのは、軍か、国か、あるいは彼ら自身か……

## 序、獣人の子

少年は、鬱蒼と草木の生い茂る森の中を、がむしゃらに走っていた。少年は靴も履いておらず衣服さえも纏っていない。一糸まとわぬ全裸の状態だが、そんなことを気にしている場合ではなかった。とにかく、走らなくてはならない。ひたすら逃げなくてはならない。背後から追っ手の声がある。大の大人が幾人も、十にも満たぬ少年のことを追いかけて迫ってくる。大人たちは斧や刀など武器を抱えて少年のことを追っていた。捕まったら最後だ。もう、命はない。

少年は、鮮やかな赤い血の滴り落ちる利き腕を押さえながら、死にもの狂いで走っていた。この傷はたった先刻、森の外、村の外れで村人の一人の投げた石槍にあたっただけのものだ。少年はその村人の名前を知らないが、顔を見たことはあった。その程度の知り合いだ。何故って、少年は生まれてから今までずっとその村に住んでいたのだ。当然住人の顔くらい知っている。名前はわからなくとも、それが自分の住んでいた村の人間なのだというくらい、わかっていた。

村人たちは、昨日までは、少年にも優しくかった。他の少年少女に接するのと同じように、村の子供として可愛がってくれた。しかし何故だろう。今日になって、突然、彼らの態度が豹変した。「あいつを、殺せ」と言う。「このまま放っておいたら村の災いになる」と。「あいつは化け物だ」と。

捕われて殺される寸前だった少年を、村から逃してくれたのは、他にもない少年の母親だった。母親は、村人たちの目を盗んで少年を拘束していた縄をほどくと、両目にたっぷり涙を溜めながら「ごめんね」と謝った。少年にはなにがなんだかわからない。どうして自分がこのような目に遭っているのか、どうして母親が泣いているのか。何も知らない少年は、当然母も一緒にこの村から逃げ出してくれるのだと思った。自分を連れて、二人で逃げてくれるのだと思

った。しかし、母は町外れの森までくると、少年の手を放した。

?? お前は、私の手にも負えない。傍にいてやれない母を許しておくれ。

母の言葉が、胸へと突き刺さる。

どういうことだ、と少年は目を丸くした。少年には父がいない。故に、ずっと母と二人暮らした。今までずっと、二人で傍にいたではないか。それなのにどうして突然、離れなくてはならないのか。

愕然とした少年が母の元を去ることができずに突っ立っていると、村の方から大人たちの「いたぞ!」という声が響いた。母ははっと息を呑んで、「はやくお逃げ!」と少年の背中を押した。少年は首を振る。いやだ。母と離れたくない。すると、母は少年を渾身の力で突き飛ばすと、叫んだのだ。?? お前は、人間の村にはもうおれぬ。早く逃げなさい。

どういうことなのだ、どうして自分が人間の村にはいられないのだ。混乱する頭を抱えて、少年は母を振り返る。その背後から、大勢の大人たちが血相を変えて走ってくるのが見えた。手には武器を握っている。化け物を殺せ! と大人たちが叫んだ。少年は目を見開く。何故、自分のことを彼らは化け物と呼ぶのだろう。

大人の一人の投げた武器が、少年の腕を掠った。巨大な石槍だった。右腕に激痛が走る。服が裂けて、その下から皮膚と傷が見える?? はずだった。しかし、少年は、自分の腕を見て、啞然とした。破れた衣服の下から覗いたのは、人の皮膚とおおよそ思えない、まるで熊のような黒いけむくじやらの毛皮だったのである。それは、紛いも無く獣の腕だった。否、化け物の腕だった。

早く逃げなさいと、母親が叫ぶ。どうしていいのかわからずに、少年は森へと向かって駆け出した。このままでは殺される。何故かはわからない。しかし、村人の言うように、自分はあたかも化け物のような腕を持っている。

そして、森の中へ逃げ出す寸前に、母親の懺悔するような嘆きを、

聞いた。

??ごめんね。本当にごめんね。獣人なんぞに産んでしまつて、本当に……！

獣人、という響きが、少年の耳に残った。初めて聞く言葉だ。それがなんであるかなんて皆目見当もつかない。しかし、その「獣人」とやらのせいで、自分は殺されんと追われているのだろうという予想はついた。村人らの言う「化け物」とは、「獣人」のことを示しているのだ。そしてそれは、少年のことである。つまり自分は今までずっと人間だと思っていたけれど??人間ではなかったのだ。

それから何時間も、少年は森の中を走り続けた。息が切れても、どんなに苦しくても、走り続けていた。足を止めれば大人たちに捕まってしまう。捕まれば、殺されてしまう。

森を走る間に、いつのまにか纏っていた服は裂けて、少年は全裸になっていた。走るだけで裂けるほど柔な服を着ていたつもりはない。しかし、まるで体が突然変化でもしたかのようにみるみるうちに膨張して、もとの少年の大きさからは考えられないほどに巨大化してしまったのだ。ゆえに、少年の服はもう、纏うことができなかった。かわりに少年の体は、熊のような黒くて堅く分厚い毛皮に覆われていた。

村の外れで斬られた腕の傷が痛む。大量に血が流れた。走っても走っても村人たちを巻くことができないのは、恐らく森の中に点々と血痕が残っているためだろう。傷のある右腕は痺れ始め、感覚がない。そろそろ自由には動かせないほどに傷が進行していた。たくさん血を流すと、やがてはそれが原因で死ぬのだという。そのためだろうか、先ほどから走っているはずなのに、走っているという感覚さえしない。まるで夢の中にいるみたいだ。頭がふわふわと浮いていて、そのまま気を失ってしまいそうなほど。

少年は、木々の間を抜けて、森の中に、湧き出る泉を見つけた。こんなところまで来たのは初めてだった。もう帰り道はわからない。

もちろん、わかったところであの村へ帰られるわけもないのだが。

ちよろちよろと水の流れる音がして、自ずと足がそちらへと引かれた。血を流しながらも走り続けたせいで、体が水分を欲している。水が飲みたい。本能的にそう思った。

少年は泉の縁に腰を下ろすと、無我夢中で水の中に顔を突っ込んで喉を潤した。本当に獣みたいだ。だが仕方が無い。手を使って水をすくおうにも、両腕は化け物のそのように変化しており、もはやこれが人間の手と同じ役割を果たせるのかもわからないからだ。

少年はひとしきり水を飲むと、息継ぎのためによく顔をあげた。ぼたぼたと髪の毛を伝って水滴が水面に落ちた。波紋が広がっていく。その波紋の中に、少年は化け物の顔を見た。

一瞬、わけがわからなかった。

昨日まで、自分は母によく似た東国風の顔立ちをしていたはずだった。綺麗な黒髪を持つ、素朴な少年の顔をしていたはずだった。

しかしながら、その泉の水面に映る姿は、どこからどう見ても人間のそれではない。白い、白骨化した頭蓋骨のような顔に、黄ばんだ白の長い髪の毛が生えている。ぼたぼたと雫が、この白い毛から滴り落ちて泉に波紋を作った。目は、頭蓋骨のそのように暗くぼんでいて、どこにも瞳など見えなかった。そして、白い毛の間からは、二本の雄牛のような角が生えている。化け物だ。これがもし自分の姿ならば？？自分は化け物だ。

少年は、己の姿に恐れおののいて、ふらふらと立ち上がろうとした。しかし、足に力が入らず、その場に転倒した。ずしん、と重みのある音がその場に響き渡る。小さな少年の倒れた音ではない。野獣の倒れたような重低音だ。腕から流れ出した血が、泉の澄んだ水をどす黒く染めていく。少年はそれを虚ろな視界の中で見つめていた。

嗚呼、力が入らない。立ち上がって逃げることも、できない。逃げたところで、こんな姿ではどこにも行けない。人間は化け物に救

いの手を差し伸べてくれないだろう。かといって森の中で一人で生きていく自信もない。八方ふさがりだ。

森の奥の方から、大人たちの怒号が聞こえた。彼らは少年を殺しにくるのだ。このまま生かしておいては村の災いになる。それはそうだ。だって少年はもう、人間ではないのだ。

このまま自分は死ぬのだろうと、遠のいていく意識の中で少年は思った。血を流して真っ赤に泉を染めて、干涸びるように死ぬのかもしれない。あるいはそうなる前に、村人に見つかって、首を切られて死ぬのかもしれない。だが、もう???どちらでもよかった。なんでもいい。このまま化け物として生きるくらいなら、死んだ方がいい。人間は恐ろしい化け物の命を絶えず狙うだろう。人に怯えて生きて行くことなど、まだ十にも満たぬ少年には、できなかった。

少年は全てを諦めて、全身の力を抜いた。すると少し気が楽になった。逃げろと言ってくれた母には申し訳ないが、もう逃げる必要はないのだと思うと、一気に疲労が体を支配した。天国はどんなところだろうかと虚ろな意識の中で考える。いや、化け物には天国など用意されていないかもしれない。では、向かう先は地獄だろうか。何も悪事を働いた覚えなどなかったけれども、獣として人々を脅かしてしまっただけには甘んじて地獄に向かうしかない。だとすれば、獣となった自分は、地獄に向かうために生まれてきたのだろうか。それはなんと虚しい生涯だろう。己を人間と信じて生きて、最後は獣となりさがり殺され地獄へ向かう。こんなことなら、生まれてこなかったって良かったろうに。悪戯な生涯を送ってしまった。

朦朧としながらもそんなことを考えていると、ふと、目の前に人の気配を感じた。さく、さく、と遠いどこからか、草木を踏み分ける音がする。大人たちがようやく少年の存在を見つけ出したのだろうか。そう思ったが、あの怒号が聞こえない。もしも村人ならば、「化け物!」と叫び、「殺せ!」と喚くことだろう。しかし、近付いてくる人間は、至極静かだ。??では一体、誰だ?

少年は、一度閉じた目を開いて、ゆっくりと頭を持ち上げた。こ

んな森の奥に、一体誰がいると言うのだろうか。ここは人間の住まうような場所ではない。だとすれば、少年と同じ化け物か？？あるいは、妖精の類いだ。

そう予想してから見上げたために、そこに立っていた者を見てまず少年が思ったのは、

？？天女だ。

その一言だった。

少年が今まで一度だって見たこともないような美しい着物を纏った少女だった。年の頃は、少年よりも若い。五つか、それくらいではないだろうか。しかしその容姿は、五歳かそこの齡でありながら、村一番の別嬪と言われていた娘よりも美しかった。絵に描いたような美少女だ。

そのような美少女が、こんな森の奥に現れるわけもない。だからやはり、人間ではないのだ。この少女は天女だ。そして、自分をあの世へ迎えに来たのだと、少年は思った。

「三の君……！」

天女の後ろから、別の女の声がした。慌てたように森の奥から現れたその女は、天女よりもずっと年上だった。少年の母よりは若く見えるが、恐らく成人しているだろう。天女の付き人だろうか。

「勝手に馬車を下りてはなりません……」

付き人はそう天女に告げてから、ようやくその場に汚らしく転がる少年の姿に気付いたようだった。はっと息を吞んで、汚物を見たかのように顔をしかめ、いかにも上物とわかる服の袖で口元を押さえた。

「獣人……！」

獣人？？。その名は、自らの母の口からも聞いた。獣人なんぞに産んでしまってごめんなさいと、母が言った。ゆえにそれは少年を差し示す言葉だ。付き人が「獣人」と呼んで汚物のように忌み嫌っ



ているのは、少年の存在そのものだ。天女の付き人にさえ忌み嫌われる自分は？？やはり地獄へ落ちるしかないようだ。

そう悟って苦笑を浮かべ、少年は再び目を閉じようとした。どうせ天女は天国へは連れていってくれない。ならばこうして彼女を見上げていても仕方が無い。しかし、そう思って瞑目した少年の方へ、さくさく草をかきわけながら近付いてくる足音がする。「三の君、近付いてはなりません！」と付き人の声がした。ということは、近付いてくるのは天女だろうか。うっすらと少年が目を開くと、予想した以上の至近距離に、天女の姿が見えた。間近でみるその美しいかんばせに、息が詰まりそうになった。

「このままでは、彼は、死んでしまうわ」

天女が初めて声を発した。鈴の鳴るような、愛くるしい声であった。五歳かそこらとは思えないほどはつきりとした物言い、天女は呟く。

「彼を、連れて帰る」

どういうことだ、と少年は天女の姿を穴の開くほど見つめた。彼女は自分を、天国へ連れていってくれるというのか。付き人さえ忌み嫌うこの化け物を、連れて帰るというのか。

付き人は信じられないとばかりに首を横に振って、「なりません」と叫んだ。

「そのような穢らわしい化け物を、仮にも聖女様ともあろう方の横に置くわけにはまいりませぬ！」

「穢らわしい化け物ではないわ。獣人よ。私には仗身がないもの。仗身にするわ。それならいいでしょう。聖女の仗身は獣人と決まっているのだから」

仗身、と少年が聞き慣れないその言葉を呟くと、聖女は微笑んだ。

「護衛のことよ。私のことを、守るの」

「いいえ、なりませんわ、三の君」

付き人が厳しい声をあげた。この「三の君」というのがどうやら

天女の呼称らしい。名前ではないだろう。天女の世界にはきつと複雑な決め事があるに違いない。

「仗身となる獣人は、生まれたその時から聖女様の仗身となるために訓練させられるもの。しかしその化け物は育ち過ぎております。すでに獣の姿に変化してしまっているのに、これから仗身に育てあげるとなると危険なこと、できませんわ」

「それは、私の力次第でしょう。彼なら大丈夫？？だってほら、こんなに優しい目をしてる」

天女はそう呟いて屈むと、少年の顔に触れた。少年は目を見開く。村の大人たちがこぞって「化け物」と呼んだこの顔を、少年自身泉に映った自分の顔を見て悲鳴をあげそうになった、この顔を、天女は少しも忌むことなく撫でた。そして、少しも怯むことなく、少年に問う。

「貴方、名前は？」

初対面の人間が質問するならば、あまりにも当然な問いかけだ。それなのに、何故か少年は泣きそうになった。泣きそうになるほど、嬉しかった。

「……ゆたや」

ぼそりと答えると、天女は目をぱちくりさせた。やがて、花の咲き綻ぶような笑みを見せる。

「ゆたや……そう、貴方、東の国の出身なのね。嬉しいわ……私もね、東の出身なの。かぐわって言うのよ」

「三の君！ 獣人に名前など……！」

付き人が悲鳴に近い苦言を吐いた。しかし、少年の耳には届かない。？？東の出身。ということは、彼女は天女ではないのか。人間なのか。こんなにも美しい人間がこの世にいるのか。まるで天女のような人間が、存在しているのか。

「ゆたや……貴方さえよければ、私の仗身になってくれないかしら？」

そう呟いた天女のような少女の頼みを、少年は一生涯忘れること

はないと思った。このような化け物の姿になってしまった自分を、少しも忌み嫌うことなく求めてくれるならば、自分とてどんな求めにも応じようと。この瞬間に、誓った。

それは他の何よりも堅い契約で、少年をがんじがらめにして離さない。しかしそれこそが彼の幸福となった。

彼は己の命を、この少女に捧ぐことを誓った。

## 1、聖女カグワ

世界は何故創始されたのか。理由なく世界が始まったのだとしたら、その存在に意義はあるのか。今尚存続するこの世界に生まれた命に、意味はあるのか。我々が何故この世に生を受けたのか、理由はあるのだろうか。もし理由なくして生まれてきたのだとしたら、我々は理由のない生の中で、何かを成すべきなのであるか。その中で、自分勝手な理由付けをして、生きながらえようとしてもいいのだろうか?。

長々と世界と世界に生きる命に関する疑問を陳列させた古文書が読まれなくなり、何百年という月日が過ぎた。かつては貴人の教養であった書物は今では非生産な虚言と呼ばれ、一部の哲学者が研究の対象とするのみとなった。

人心が、世界の起源を知りたいとは望まなくなり、数百年。絶対王政の布かれた西国エウリアは、繁栄を極めていた。しかし、第二十五代国王のトゥアイド・ギル四世の治世十二年の頃の秋、突如国王が逝去した。享年三十四歳、若すぎる死であった。不自然な急逝の知らせに、国中がざわめきだった。国政の重鎮のうちの誰かの謀策だったのではないかという様々な憶測も飛んだ。が、死人に口はなく、真相はわからず終いであった。

エウリア君主国では第二十五代国王の急逝に伴い、大々的な葬儀が執り行われ、他国からも賓客が招かれることとなった。そしてその絢爛な儀式が終わると、次に待ち構えているのは次期国王の就任式であった。次帝になる権利を持った皇太子は、たったの二歳になったばかりであり、国政の如何のわがらうはずもなかった。宮廷では連日国会という名の騒動が開かれていた。

また、国政とは直接関係こそないが、先帝の崩御によって混乱を生じている場所がもう一つあった。国の中央に置かれた王宮の西側、海に面した広大な土地に広がる俗世とは切り離された世界、「後宮」である。

エウリアにおいての「後宮」とは、国王の妻の住む宮を表しているのではない。この国には、政治の最高権威である「国王」とは別に、宗教の最高権威である「巫女」という権力者がいた。巫女は最も神に近い存在と言われ、神の言葉を国民に代弁する高貴な存在であった。巫女は、国王の代替わりと共に代替わりをし、その時の王の治世を神の代替人として見守った。そして、時の王が倒れると、次の王の治世のために新たな巫女が選ばれる。その候補となる女たちを、聖女と呼んだ。その聖女たちが俗世から切り離され、いずれ巫女となる日のために修行する場所が、「後宮」である。

聖女の中から選ばれた巫女が、最初に行う仕事は国王への宣下、そして次の代の巫女の候補となる聖女を国中から十人選ぶことであった。そして次の巫女は、その十人の中からただ一人選ばれる。その選定の儀は、国王でさえ見ることの適わない極秘裏の行事であった。

民衆にとっては雲の上にも等しい後宮においての騒動を知る者は、数えられるほどしかない。聖女たち自身、彼女たちに仕える従者たち、そして存在するともわからない神のみである。女たちは、自らが巫女に選ばれるために奔走しはじめていた。

高く透き通った蒼穹の中に、小さな雲がぽっかりと浮かんでいる。上空では風速もないのか、ゆっくりと流れて行く様はのどかだ。視界の端に映る黄色の木の葉が、風の吹き抜ける度に揺れた。一陣の大きな風が通ると、白いワンピースのような薄い着物の裾がめくれあがり、木の葉が数枚枝を離れて舞った。あちらへひらり、こちら

へひらり、と宙で迷った後、黄色のそれは少女の胸元に落ち着く。純白の衣装が汚れることも気にせずに、少女は木の葉を退けることもせずに、仰向けになって空を見上げていた。

外を歩いただけでも汗ばむような真夏を越えて、ようやく秋の色が見え始めていた。冬にはまだ遠く、心地良い風が吹いている。本当は少し考え事をしようと散歩に出たはずだったのに、あまりにも心地良くて眠ってしまいそうだ。少女はゆっくり瞬きを繰り返してから、目を閉じた。

外界から隔離された後宮の地は、ひよつとすると他とは違う時間の流れの中にあるのかもしれない。物心ついた頃からこの場所に住んでいる少女には、外と比較する術もないが、たまにそんなことを思う。

己の瞼で視界を遮ると、一瞬、何も見えなくなる。太陽の光の効果で橙色一色に包まれるが、やがてそれも薄れる。精神を統一し、意識を未来へ向けて眠りに落ちると、時折現在より先の出来事を見ることがある。先見の技と呼ばれるこの能力は、巫女の修行で覚えさせられる技の一つであり、彼女はこれがあまり得意ではなかった。

無言で目を閉じて、先見の技に力を注いでいるその時である。不意に彼女の第六感は何者かの気配を感じ取った。気感と呼ばれるこれも、巫女の技の一つである。目を閉じていても、ある程度の範囲で近くに誰かが来ると、それが誰であるかを言い当てることができる。少女は、これが得意であった。特に、この気配を間違えたことはない。

「……ゆたや？」

小声でその名を呼ぶと、「御意」と低い答えが返って来た。少女は目を開く。日光が瞳に突き刺さり、目眩を引き起こす。彼女は目を細めると、光から逃げるように寝返りを打った。ころころと二回転すると、端に当たる。此処？？四阿の屋根の上は彼女の昼寝専用の寢床であり、昔は寝ていて危うく落下しそうになったこともあつ

だが、今となつては例え夢の中にあつても、感覚のみを頼りに寸前で踏みとどまれるまでになった。少女はうつ伏せになるとそこから身を乗り出して、下を覗きこむ。すると、慚然とした面持ちの男と、目が合った。

「毎度毎度、口を酸っぱくしておりますけれど……突然いなくならないで下さいますか？」

眉間に深く皺が寄っている。何か挟むことが出来るんじゃないかしら、と少女は思った。

「殿堂が出る時は、私かローマーナに一言くださらないと困ります、かぐわの君」

少女？？カグワは、首を竦めた。

この広大な後宮の地に住まう十の聖女には、それぞれ一の君、二の君、と後宮入りした順番に番号が振られている。カグワというこの少女は、三番目に選定を受けたので、通例であれば三の君と呼ばれるはずであったが、本人がそれを厭うために、本名であるカグワと呼ばれることも少なくなかった。折角名前があるのだから、お互いにそれで呼び合った方が親しくなれるのではないかというのが彼女の主張である。しかしながら、最終的には巫女の座を競う相手にしかなり得ない聖女同士が親しくなる必要性などそもそもないというのが、他の聖女たちの解釈であった。

「でも、ゆたやは、いつも私を探し当ててるじゃない」

カグワは欠伸まじりに言う。ユタヤという青年は眉をひそめ、四阿の屋根を片手で掴んでよじ登った。片腕の力のみで軽々と屋根の上まで自分の体を持ち上げることの出来る彼は、超人のように見えるが、実のところ人間ではない。

「今日のところはこの四阿にいらっしゃったからすぐに探し当てられたものの……常々私が、貴女を探して後宮中を走り回っていることを知らぬわけではありませんまい」

青年は乱れた祖末な服の裾を直しながら、渋い顔をする。黄ばんだ白の布一枚で作られたその服は、装衣とも草衣とも呼ばれ、彼ら

仗身の平服であつた。

「それに、今日くらい大人しくしたらどうです？　国王陛下が亡くなったというのに……」

ユタヤの語尾が消えていく。国王トウアイド・ギル四世逝去。？今朝方、唐突に後宮を駆け抜けた知らせは、静かな波乱を起こしつつあつた。

国王の死は、すなわち巫女の死も意味している。前の巫女がいなくなれば、次の巫女が選ばれるというのもまた慣例だ。聖女たちは突然の知らせに心構えもままならず、それぞれ慄いていた。ただ一人、三の君を除いては。

「そうね……亡くなられたのね」

三の君、カグワはゆっくりと起きあがると長い黒髪をかきあげる。巨木の影から空を見上げて、彼女は目を細めた。葉の合間から見えるのは、空気が澄んでいると肉眼でもわかるほどの晴天だ。

「……でも、こんなにいる天気なのよ。ひなたぼっこの一つでもしたいじゃない」

「ひなたぼっこのならいつでも出来るでしょう……他の君々は、慌ただしくしておいでです」

「ま、何のために慌ただしくしてるの？」

「何って……選定の儀は、十日後に決定したそうですよ。それまでに巫力を高める修行の一つでもなさっているのでは？」

「巫力を高めるねえ……。私たち、後宮にきてから十二年、そのための修行ばかりやってきたわけじゃない？　それをこれからの十日に詰め込んだところでぐんと伸びるとは思えないけど？」

聖女たちが巫女の技を使いこなすために必要とする基礎能力のことを、巫力と呼ぶ。もともと彼女たちは、聖女に選ばれたからには人並み以上に巫力を持っていたということであり、これは修行によつてさらに高まると言われていた。そして、巫女を選ぶ際の基準も、これの高低が大いに関係していると言われている。とは言え、どれもこれも単なる流言でしかない。実際のところは誰も知らないのだ。



カグワは再び欠伸をこぼすと、眠い目を擦った。隣でユタヤはどこか不満気な顔をしている。

「それはそうでしょうけども、調整したりする必要はないのですか？」

「調整してどうにかなるようなものでもないでしょ。いくら練習したって、先見の夢なんかほとんど私、見たことないんだし」

「ですが、かぐわの君がたまに見る先見の夢は百発百中で当たります」

「まあ、そこそこね。出来るときは出来るし、出来ないときは出来ないものなのよ」

「だからこそ、調整が必要なのでは？」

「調整如何の問題じゃないと思うんだけど……だってほら、ネイディーンはきつと修行なんてしてないでしょう？」

「一の君は……そうですね、私がかぐわの君を探して走っていると、毎度大変ねと声をかけて下さいました」

後半の厭味は聞こえなかったふりをして、「やっぱりね」とカグワは頷いた。

一の君、ネイディーンは、国から聖女として選ばれた中でも随一の才能の持ち主であった。巫女の基本技の中に不得手な物などなく、佇まいも美しく、聡明で利発な女性である。

「ネイディーンは、調整とか、修行なんてしても無意味だってわかってるのよ」

「一の君の場合は、もうこれ以上高める必要がないというだけでは？」

「もしそうだとしたら、今更他の聖女が頑張ったって追いつけないじゃない」

「それでは選定の儀の意味がありません」

「最初から結果は見えてるってことだものね」

「そうですよ」

「でももし、巫力の高低で測るんだとしたら、ネイディーン以上の

聖女はいないし……巫力が関係ないんだとしたら、今更修行してもやっぱり意味がないわ」

「意味がないことはないでしょう」

「そんなことよりも、巫女になるにしろならないにしろ、あと十日で後宮を追い出されることになるんだもの。今のうちにひなたぼっこしておかなくっちゃ」

カグワは大きく伸びをすると、ころりと屋根の上に転がった。木漏れ日がきらきらと輝いて、まるで宝石のようだ。十二年慕ったこの光景にも、あと十日で別れを告げなくてはならないのだと思うと、切ない。王が死んだと言われるよりも、この慣れ親しんだ居心地の良い場所に二度と来られなくなるのだと思う方が、事は重大に思えた。

カグワの隣に屈んでいたユタヤはしばらく苦い顔をしていたが、カグワに動く気がないことを知ると、諦めたようにその場にあぐらをかいた。ちらりとその仏頂面を見上げれば、彼は無言で腰の刀を抜いた。研磨する気なのだろう

「いいですよ。かぐわの君がその気なら、私もお付き合い致します。こうやってこの四阿の上で刀研ぎなんぞするのもこれが最後やもしれませんから」

「かもね。貴方いつも此処にいる時、刀研いでるものね」

「かぐわ様が眠ってしまうので、他にやることはないんです」

「そうなの？ 暇だったら何処か他行ってもいいのに」

「いいえ。貴女の隣にいるのが私の役目ですから」

きっぱりと言い切って、ユタヤは背中に背負った太刀も屋根の上に下ろすと、刃を抜いて並べた。銀色の刃が二本、陽光を浴びてきらきらと輝いている。

ユタヤの役職は仗身と呼ばれ、カグワ直属の護衛であった。聖女たちにはそれぞれ一人につき一人の仗身が付いており、そして必ずそれは獣人であることが決まっている。彼らは、一見人間と変わらぬ姿形をしているが、自在に獣の姿に変化することができた。その

自由な変化を可能にしているのは、それぞれの聖女の巫力である。仗身である獣人は首から巨大な数珠玉を下げており、これに聖女の巫力が込められていた。これの力によって、彼らは獣の性を封印しているのである。

カグワは、彼の首からぶらさがった質素な数珠玉に、なんとなく手を伸ばした。立ち上がった状態で彼の腰の高さまであるそれは、あぐらをかくと太ももの上に乗ってしまう。カグワは仰向けになつたまま、鶏卵よりは小さいそれを手の中どころと転がして、もてあそんだ。ユタヤは全く気にもせず、黙々と研磨材でまずは腰の直刀から磨き始める。無言のまま、風に木の葉のこすれ合う音だけが響きわたる。

このようなカグワとユタヤの関係性は、他の聖女たちのそれと比べると、異様であった。仗身は、聖女の従者の中で最も位が低い。と言うのも、聖女の身に危険が生じた場合、仗身は命を張って主を守らなくてはならない。いざという時には命を落とす、捨て駒のような存在なのである。本来獣人は、成長とともに人の心無くして獣になってしまうので、幼いうちに処分されることが世間一般では慣例であった。そのため、捨て駒にするには最適な存在だったのだろう。また、いかに獣の心を封印出来るかは聖女の腕にかかっているということもあり、巫力の鍛錬にもなった。だが、その元が畜生類であるため、自分の仗身とはある程度の距離を取りたがる聖女がほとんどであった。毛嫌いこそしないものの、例えば同じ部屋には置かない、会話は最低限に済ませる、一緒に食事は取らないなどの制限をしている。ところが、カグワとユタヤの場合は、始終隣に寄り添っているばかりか、仗身の身分であるユタヤが主に苦言を呈する始末である。今のようにかグワが一方的にユタヤにちょっかいを出しても、ユタヤが反応を寄越さないような状況など、他の聖女と仗身には到底あり得なかった。

「……眠い」

「寝たら良いではないですか」

刀剣を研いでいる時のユタヤの返事は大抵素っ気ない。彼は、カグワの身を守るための剣なのだから丁寧に手入れするのが当然だと豪語するが、実際は細かい作業が好きなだけなのだろう。と、カグワは思っている。

「枕が欲しいな」

「寝殿に戻ればありますよ」

「面倒くさい」

「なら我慢して下さい」

「ゆたや、変化してよ」

「……今ですか？」

ユタヤの、研磨材を握る手が止まった。

獣人の獣の姿は各々によって異なるが、ユタヤの場合、胴体が巨大なほ乳類に似ているために、寝具に丁度良いのである。そのため、カグワは度々彼に封印を解くことをせがんだが、殿堂の奥にいる時以外は大概渋られた。

「今は、困ります」

「どうして？」

「どうしてって……此処は三の宮ではありませんよ。誰が通るともわからないのに」

「いいじゃない、誰が通ったって」

「……別に私は構いませんけどね。また東の君は、と貴女が言われるんです」

獣人が変化を解いた姿は、凡人には正視し難いほど野蛮で恐ろしいらしく、見るのも嫌がる者も少なくなかった。実際、過去に何度もカグワは、危機的状況でもないのにユタヤを獣の姿にさせていたことで不平を言われている。「東の君」というのは、彼女のことを粗野だと非難した呼び名であった。

「別にいいわよ。東の君って呼び名、私は嫌いじゃないし」

「かぐわ様がよろしくても、私が嫌です」

「私は構いませんけどね、って言いたくせに。嘘つき」

「ではもうそういうことでいいです。私の姿のことでかぐわの君の評判が落ちるのは、私個人の見解として、我慢ならないのです。これですごくいいか？」

「よろしいか、ってなんなのよ。押し付けがましい……」

そう言っただけでカグワは口を尖らせたものの、それ以上はせがまなかった。最初から、さほどの期待もしていなかった。ユタヤが小言を言うのは、何よりカグワのためを思っていることだとカグワ自身知っている。その彼が自らカグワの評判を落としたがらないのはいつものことであつた。？？だが、カグワは彼の献身さをあまり好ましく思つてはいなかった。もっと自分は彼と対等にいたいのに、と思う。これも聖女の中では異様であつた。

再び、二人の間に沈黙が落ちた。秋の日差しがぼかばかと体を暖めてくれる。眠気が再びカグワを襲い、全身から力が抜けて行く。瞼が重たくなり、ゆっくりと眠りの世界へと落ちようとしていると、不意に、近付いてくる誰かの気配に気付いた。敵意のあるものではない。よく知った気配だ。眠いので、無視することに決める。カグワが目を開けて寝たふりを決め込むのと、ユタヤがその気配の主に気が付くのはほぼ同時であつた。

ユタヤの刀を研磨する音が止む。彼はカグワの方を伺って、彼女が目を開けているのを見ると眠っていると見なしたのか、あるいは寝ているふりをしていると気付きながらも放っておいてやろうと思つたのか、静かに首を横に振つた。四阿の下に近付いて来たその人は、彼のことを見上げて首を傾げる。

「カグワ様、そこにいるの？」

「寝ている」

ユタヤは小声で返事をした。四阿の屋根の下から彼を見上げる女性性は、風になびく長い赤髪を手で押さえながら、戸惑うような表情を浮かべた。

「起こしてよ」

「今寝入ったところなんだ」

「どうせ私が来たから、面倒なことだと思って狸寝入りしてるんですよ。私、わかるんだから。カグワ様、起きて下さいな！ カグワ様！」

女性の、甲高い声が響く。脳の中まで共鳴しそうな大声に、カグワは顔をしかめた。このまま狸寝入りを続けていると、叩き起こされかねない。仕方が無いので、のそのそと亀のように這いつくばって移動して、屋根の下に顔を覗かせた。

「なによ、もう……」

「ほら、やっぱり起きてらした！」

腰に両手を当てて見上げた笑顔は、勝ち誇ったように明るい。ロマーナというカグワ付きの女官は、この後宮内でも一二を争うほど底抜けに明るく、そしてはつらつとしていた。そうでなければ、後宮一自由奔放な三の君の女官長など務まらないのかもしれない。

「ユタヤはカグワ様を甘やかし過ぎなのよ。狸寝入りだってわかってたくせに」

「本当に寝てたって、そんな声で叫ばれたら目が醒めるわよ」

主の辟易した様子にも、ロマーナは動じない。彼女は「そんなことよりも」と言って軽く手のひらを打った。

「さつき、全聖女様に対して招集がかけられましたわ。なんでも、十日後の選定の儀の前に一度全員で顔を合わせておこうということらしくて」

「なあに、それ。皆で顔合わせして何を話すって言うのよ」

「それは私にはわかりかねますけれど……とにかく、そんな軽装では他の聖女様方に示しがつきません。一度殿堂に戻ってお召し物を着替えましょう」

「いいわよ、別に……こんな時に全員で顔合わせしたって気まずいだけじゃない。発起人はどうせダイアンかアネットでしょう？ 周りがどう動いてるのか気になってしょうがないのよ」

カグワは自分の腕を枕にし、仰向けの体勢に戻った。

ダイアン、アネットはそれぞれ五の君、六の君の称号を持つ聖女

だ。気が合うのか、珍しく聖女同士で仲良くしているように見受けられるが、互いに互いのいないところで相手の陰口を叩いている姿も目撃されており、本当に親しいのかどうかは定かではない。

彼女たちの思惑は知らないが、一体誰がどのようなにして巫女に選ばれるのか、聖女たち自身にも先が見えず、疑心暗鬼を生じている現段階で、聖女全員が顔合わせをすることは却って混乱を招くと思われる。例えばカグワに先見の力がなくとも、面倒臭い座談会になることは目に見えている。わざわざ精神を削るため、そんな会合に参加する気はさらさら起きなかった。

カグワの思考を読み取ったのか、ローマーナは無理に連れて行くことはせず、だが当惑している。

「まあ、カグワ様の思案は尤もですけど……でも、この先どうなるのか、全くわかっておられないわけでしょう？ 皆様のご意向も伺っておいた方が、この先のためかと……」

「この先どうなるのかわかってないのは、みんな同じよ。勝手な憶測ばかりで会議したって仕方ないじゃない？」

「それはそうです」

「前に一度選定の儀を見たことがあるっていう人がいるなら、その人に聞けばいいけれど、そもそも後宮内にはそんな人、一人もいないじゃない」

後宮の中は、新しい巫女が決まる度に、総入れ替えされる決まりとなっている。下働きの女官から、聖女まで、誰一人同じ人間は残らない。そのため、今の後宮での常識がかつて常識であった確証はなく、それを比較することの出来る人物もいなかった。もちろん、選定の儀についてもそうである。

すると、それまで二人の会話を黙って聞いていただけのユタヤが口を開いた。

「一人……おられるのではないですか？」

彼は刀を研ぐ手を止め、研磨材を懷にしまい込む。そして、抜き身の刀を鞘に納めてカグワを一瞥した。

「最西端の変わり者……彼は四十年以上、後宮の最西端に居座り続けているというではないですか。自称、ですけれども」

「ああ、ケニーの爺やのことね」

なるほどカグワが顔の前で両手のひらを合わせると、ユタヤは静かに頷いた。

一から十までの聖女のそれぞれに宮殿が与えられている後宮の敷地は、とてつもなく広大である。端から端まで移動するためには馬車を使わなくてはならず、歩いて移動しようとするとい日あっても足らなかった。その敷地の外れ、最西端の場所に、一つの矮屋がある。同じ後宮内にある他のどの建物と比べてみても、尤も粗末な作りをしているその小屋の中には、一人の老爺が住んでいた。彼の名前をケニーと言うが、その名前を知っている者は少ない。どこことなく不気味な雰囲気を持つ彼の住居に、大抵の人は近付きたがらなかったし、「最西端の変わり者」という異名の方が有名であったためだ。

そして、この後宮内ではやはり変わり者であるカグワは、ケニーと親しくしていた。親しいとは言っても、気が向いた時になんとか彼の小屋を訪れて他愛も無い雑談をするくらいで、彼女にも彼の正体は見えていない。ただ、彼のことを不可思議な老爺だと思うことはあっても、不気味だと思うことはなかった。それが、彼女が変わり者と呼ばれる所以なのだろう。

「そうか……爺やなら、何か知ってるかもしれないわ」

カグワは口の中で呟くと、起きあがった。

「僕はここにもう四十年以上も住んでいる」というのは、何かとケニーの零す口癖であったが、それが真実であるという証拠はない。偽りであるという証拠も、また然りである。確かなのは、彼がこの後宮の中では一際面妖であること、そして他の誰より物知りであるということだけであった。

よしんば、彼が四十年以上此処にいるというのが嘘であったとしても、何も知らない聖女たちが集って憶測を働かせるよりは、彼に



話を聞いた方が良い。そう判断したカグワは、四阿を支える柱を伝って、地面に降り立った。彼女を追って、ユタヤも身軽に屋根より飛び降りる。彼は、二本の刀をそれぞれ腰と背に装い直すと、カグワの顔を覗いた。

「これから、最西端まで行かれるおつもりですか？」

「そのつもり。思い立った時に行かなきゃ」

「なら馬を用意しましょう」

「いいわ。歩いていく」

「これからですか？ 着く頃には夕方になってしまいますよ」

「平気。……だって、爺やのところには、ペグがいるでしょう？」

ペグというのは、ケニーの飼っている巨犬のことである。ケニー以外には懐かないというが、不思議なことにカグワには大人しい。だが、カグワの乗って来た馬には容赦なく襲いかかり、これまでも何度か彼女の馬が被害にあっていた。

「……ペグでもなんでも構いませんけども、結局、聖女様方の会合には欠席するおつもりですね？」

刺々しく口を挟んだのは、ロマーナだ。彼女の険しい表情に失笑しながら、カグワはおずおずと頷いた。それを受けて、ロマーナは深々と溜め息を吐く。

「……呆れた。正統なる聖女の会合を蹴ってまで、ならず者の老爺に会いに行くなんて……。まかり間違ってカグワ様が巫女にでもなられた暁には、国が傾くんじやないかしら」

「そうかもね」

「……認めないで否定して下さらないと困ります」

後宮に入ってから十二年、ロマーナとの付き合いも十二年だ。出会った頃はまだ、ロマーナが十四歳、カグワに至っては五歳にも満たなかったが、今では彼女の苦言にも慣れたものである。そしてロマーナはロマーナで、カグワに振り回されることにはすっかり慣れてしまったようで、

「仕方ありません。私が適当にはぐらかしておきますから、誰かに

見つかる前に早く行ってしまってくださいな」

「さすが。話が早いわね」

「どうせ、カグワ様は私の忠言なんぞ聞いて下さいませんもの。反抗するだけ無駄ですわ」

などと、身も蓋もないことを言う。カグワの後ろに控えたユタヤもまた、無言でその通りだと頷いていた。ロマーナは、背の高い彼をちらと見上げると、首を振って促す。

「馬が駄目ならユタヤ、貴方が足になりなさい」

それはつまり、獣の姿に変化しろということである。ユタヤは表情の薄い顔に戸惑いを浮かべて、口籠った。

「三の宮の外ではあまり獣として動かぬ方がいいのでは……」

「今はみんな、会合のためにそれぞれの宮で準備なさってるはずよ。誰もこんな外れの方なんて見てないわ」

ロマーナの言い分に、カグワも「そうよそうよ」と賛同する。ロマーナはそんな自らの主の姿を見て呆れた笑いを零すと、「とにかく」と念を押した。

「ささっと行ってささっと帰って来てくださいませね。カグワ様が奔放なのは昔からですし、まかり間違ってカグワ様付きの女官になった時からもう諦めておりますけれど」

「……本当に遠慮ないわね、ロマーナは」

「それでも貴女のことを案じておりますのよ。??ユタヤ、選定の儀を前にした聖女様に、くれぐれも危険のないように」

御意、と言ってユタヤが頭を下げた。

木漏れ日が地面にまだらの模様を描いている。もう少し時間が経てば、日が傾き始めるだろう。

## 2、最西端の変わり者

胴は巨大な熊のような形で全身を包む長い毛は黒く、四つ足に見える爪は人の顔ほどの長さもあり、人間の指と同じ役割をしている。頭は白骨に酷似しており、二本の雄牛のような角が生える。目は深く窪んだ穴のように見え、頭髮は白く長くなびいた。体は大きく、後ろ足で立ち上がると、大の男三人分ほどの高さがあった。二足歩行も出来るが、速さを重視する場合は四足で走る。??人形の変化を解いたユタヤは、その背に主を乗せて、馬より速く駆けていた。馬なら半日かかる道のりも、獣のユタヤの足ならば数刻かからない。そしてその速度で走りながらも、彼は抜群の安定感で決して主を背中から落とすような粗相はしなかった。

「久しぶりね、こうやってゆたやの背中に乗るのも」

全身で風を受けながら、カグワはのんびりと呟いた。すると、下の獣から洪い声が返ってくる。

「当然です。そうしょっちゅうあつては困ります」

カグワは首を竦めた。獣人であるユタヤ自身ですらあまり好ましく思っていないらしいこの獣の姿が、カグワは別段嫌いではなかった。他の聖女達は、いや聖女だけではなく多くの人間たちは、獣の姿に怯え、醜いと忌み嫌う。しかしカグワにはその感覚を理解することができない。見慣れてしまったというわけではない。カグワは、初めて彼の獣の姿を見たその時から、何故か一種の懐かしさや、仲間意識のようなものを抱いていた。

（化け物というのなら……だってむしろ、私の方が）

カグワはきゅっと、拳を握り締めた。

国王が崩御し、新国王が起って新しい巫女が選ばれると、巫女の予備軍として十人の聖女が選ばれる。そしてその聖女に選ばれる基準とは、巫力の強さだと言われていた。すなわちこの国で、最も巫力の強い十人の少女が聖女として選ばれる。その十人の中に選ばれ

たからには、カグワにもそれだけの素質があったというわけで、人々はそれを巫力と呼んで神聖なものと崇めるけれどもカグワには化け物の力のように思えてならなかった。巫力には様々な種類があり、例えば未来を予知する先見の技であったり、例えば他人の考えを知る読心の技であったり、他人を操る誘導の技であったりする。それら全てを使いこなすことができるのなら、それは化け物と呼んで間違いあるまい。それなのに、ただ獣の姿に変化することのできるだけの獣人を、化け物などと呼んでもいいのだろうか。

力あるものは力ゆえに孤独だ、とカグワは思っていた。聖女としてそうだ。聖女の周りの世話役たちは、聖女の言うことなら何でも聞くが、それだけでしかない。それではただの道具と同じだ。たった一人でいつか巫女になれるかもしれない未来を夢見て、延々と修行を続ける日々は、孤高の戦いであった。故に、聖女は孤独だ。

そして、それ以上に、獣人の孤独ははかりしれない。力を持つゆえに崇められて孤立する聖女と異なり、獣人は力ゆえにうとまれ、孤立する。それを聖女ごときの孤独と並べても良いのかどうかカグワには俄に判断し難いが、とにかく、初めてユタヤを見た時に、カグワは彼の孤独な眼差しに己を重ねて手を差し伸べずにはおれなかった。

「私はただ……傷を舐め合いたかっただけなのかもしれないわ」

ユタヤは己を救ってくれたカグワに恩義を感じ、一生の忠義を誓ったけれども、カグワは彼を救ったわけではなかった。カグワは、自分を救うために彼の命を利用したのだ。

「はい、なにか？」

カグワの言葉を聞き取れなかったユタヤが聞き返す。カグワは慌てて首を横に振った。

「なんでもないわ……あ、西の壁が見えてきた」

カグワは進む先、西の端を示してそう誤摩化した。

広大な聖女たちの住まう後宮は、広大でありながらしかし外の世界から遮断されていた。土地をぐるりと囲んでとても越えることの

できない巨大な壁が立ちはだかり、外に出ることはできない。それは、外の侵入から聖女たちを守るための物なのかもしれないし、聖女たちが外へ逃げ出すことのないように防ぐものなのかもしれないし、あるいはその両方かもしれない。そして変わり者と呼ばれ、聖女の規則など守らぬカグワでさえ、この壁を越えたことはなかった。

高くそびえ立つ灰色の壁の麓に、小さな小屋が見えた。最西端の変わり者、ケニーという老爺の住まう小屋だ。後宮の中は、新国王の即位に伴う後宮の総入れ替え制度により、皆が皆同じ時期に後宮に住み始めるため、後宮の中にいる者同士、互いに知らないことはない狭い世界だと言えよう。その中で、ケニーだけは謎の多い人物だった。誰も、彼の正体を知らない。もちろん、カグワとて知らぬ。

「……かぐわの君」

ユタヤが最西端の小屋をまっすぐ目指して走りながら、小さく呟いた。

「小屋の前に、ケニーの爺が立っております。……あやつ、かぐわ様が来られることを、予測しておりましたな」

「……まあ」

獣の姿になったユタヤは、人智を越える抜群の五感を持つ。故に、人間の目では見えない遠い景色も、その絶対的な視力でもって捉えた。カグワにはぼつんと小屋の影が見えるだけでその先に立つ人の姿など見えないが、ユタヤが言うからにはそうなのだろう。

「本当に不思議な人ね……もしかしたら聖女たちよりも先見の技に優れているんじゃないかしら」

「まさか」

「もしそうなら、次期巫女はケニーの爺やになるわね」

「ご冗談を」

即座に返される真面目な答えに思わず笑ってしまってから、カグワはまっすぐ最西端の矮屋を見つめた。姿は見えぬものの、確かに

その方角から人の視線を感じた。カグワはあと十日で後宮を出なくてはならない。かの謎の老爺から話を聞けるのもこれが最後かもしれないわけで、なにひとつ聞き逃すことのないようにと、カグワは気を引き締めた。

ユタヤの言った通り、小屋の入り口に腕組みをして立っていたケニーは、二人が来るなり小屋の中へと招き入れた。小屋の外にはペグがうずくまっており、変化をといて装衣を纏ったユタヤを見上げるなり威嚇したが、その後ろからカグワが顔を覗かせると途端に大人しくなった。ユタヤが「犬までもそそのかすとは」と軽口を叩いたので、「一番最初にそそのかされたのは、ゆたやよね」と軽口で答えた。ユタヤは反論しなかった。自分でもそう認めているらしい。

一階建て、部屋の二つしかない小さな小屋の中、暖炉の前に通されると、カグワはケニーに促されるまま火の付いていない暖炉脇の椅子に腰掛けた。ケニーは一人暮らしゆえに椅子がそうたくさんはない。老爺から椅子を奪うわけにはいかないとユタヤがカグワの座った椅子の脇にあぐらをかいて座り込むと、老爺は気にした素振りも見せずにカグワと向き合って揺り椅子に腰掛けた。窓の外からは、少しだけ西に傾き始めた太陽の光が差し込んでくる。ケニーは来訪者を歓迎するでもなく、「喉が乾いたら戸棚にあるコップに、その冷めた紅茶を注いで飲んでくれ」と言った。誰もが聖女に尽くすこの後宮の中で、あまりにも不躰な態度であるが、カグワは気にしない。この老爺がそういう人間なのだとは知っているユタヤも言及しなかった。ただ、黙ってすくっと立ち上がると、コップにカグワの分と老爺の分の紅茶を注いで小さなテーブルに乗せた。「相変わらず、恐ろしく気の利く仗身じゃ」とケニーが笑った。

「……で、今日は何をしにこのような西の果てまでおいでになったのか」

ユタヤの注いだ冷めた紅茶をすすりながら、先に問うたのはケニ

ーの方だった。カグワはユタヤが隣に腰を下ろしたのを確認してから、にこと口の端を持ち上げる。

「やぁね、知ってるくせに」

「知るものか。今代一の変わり者の聖女の君の考えなど、儂には想像もつかぬ」

「最西端の変わり者に言われたらおしまいね。でも大体予測はつくでしょう？」

「儂には、とんと」

「予想していたから小屋の入り口に立って待っていたんじゃないの？」

「いんや、なんとも後宮の中央の方が騒がしいから何ごとかと眺めていただけのこと。すると三の君が己の仗身に跨がり現れるものだから、ますます騒がしい」

あくまでとぼけるケニーであるが、今このエウリアの国で何が起こっているのか知らぬわけでもあるまい。

「……国王陛下が崩御されたそうじゃない」

「ふむ」

「次期陛下の即位に合わせて、十日の後には新しい巫女が選定されるそうよ」

「そうらしいのう。風の噂には聞いておるが」

ケニーは澄ました顔で頷いた。やっぱり知っているじゃないかとカグワは小さくむくれる。

「だったら、後宮が騒がしい理由もわかるでしょう？ 私がここにきた理由も」

「はて……。儂はここに住み着いてもう数えきれぬほどの歳月を越えてきたが、国王の崩御だからという理由でここを訪れた聖女の君など他におらんのでな」

儂に別れでも告げにきたか、と笑う老爺には前歯がない。ぽっかりと空いたその隙間から、暗い口の奥が覗いてかかかと軽快な笑い声を繰り出した。その間抜けな風体を前にして、カグワは脱力する。

まあ確かに考えてもみれば、国王が倒れたからと言ってケニーの元を訪れたところで何が変わるわけでもあるまい。他の聖女たちと顔合わせなどするよりずっと効果的だと思って飛び出してきたが、実際にはそう大差ないなと思ひ直した。

「まあ……そうね。そんなものかもね。ケニーの爺やと挨拶代わりに、くだらない雑談でもしようかと思つて来たのよ」

観念してカグワがそう告げると、ケニーは「そうか」と満足そうに微笑んだ。その暢気な笑顔に、ますます力が抜けていく。国王が崩御されたと後宮中が大騒ぎしていることを馬鹿馬鹿しいとさえ思つていたカグワであるが、ケニーと比べればまだまだ修行が足りない。人が必ずいつかは死ぬように、国王とていつかは崩御する。そんな当たり前のことに振り回される自分に嫌気が差した。

「……後宮は、巫女のためにあるものだから、仕方のないことなのかもしれないけど」

小さな声で言い訳して、カグワはコップを手にとつた。なんとも飾り気のないその質素なベージュ色のコップを撫でながら、ちらと対面に座っている老爺を見やる。

「外界はどうなの？ やっぱり……後宮ほどは騒いでいないのかしら」

外界、すなわち後宮の外？ 後宮の中の人間は下界とも呼ぶが、カグワはあまりこの呼称が好きではない？？に、ほとんど踏み出したことのないカグワには、外の世界に住まう人々の考え方など予想も付かなかつた。彼らは、己の国の王が倒れことを、どのように受け止めているのだろうか。

「ううん……確かに後宮ほどの騒ぎとはならなくとも、それなりに賑やかしようじゃ。新王の即位となれば、城下町は連日祭り続きだからのう」

「へえ……そういうものなんだ」

この外界から遮断された後宮という狭い世界の中で、何故かケニーはいつでも外の世界のことを朗々と語つた。その情報をどこから



仕入れているのかは決して教えてくれなかったし、ひょっとしたら全てケニーの虚言という可能性もあったが、カグワにはその真偽を調べる術がない。ゆえに残されたのは、二択だ。信じるか、信じないか？？カグワはこの変わり者の言葉を信じていた。故に彼女自身も、変わり者と呼ばれる。

「しかし、最も騒いでおるのは、宮廷内じゃな……国王がお亡くなりになった未明より、政殿が喧しい」

「政殿……やっぱり、国王が変わるとなると、政治の現場もがらりと変容するものなのかしら」

「いや……と、いうよりも、この国王の代替わりを利用しようとする勢力があつてな……三の君は、現在このエウリア君主国の国務参謀を誰が務めているかは存じておられるか」

「ええ、名前だけは……ワイズ・レヴィン国務参謀よね」

後宮にはほぼ外界の情報が流れてこない。が、しかし、皇室の仕組みや、政治の仕組みは別だ。将来巫女になるかもしれない聖女たちが、皇室や政治に昏いのでは困る。そのため、教養として誰が政権を握っているのか、誰がどの役職に就いているのか、名前だけは覚えさせられるのだ。

とは言え、ただ何十人もいる役職とその名前を暗記するのは辛い。カグワも全てを暗唱することはできない。それでもさりと国務参謀の名前を吐き出すことができたのは、それだけ彼の名が知れているためだ。ワイズ・レヴィン国務参謀？？参謀でありながら、ほとんどこの国の舵を握っているのはこの男であると、この外界から孤立した後宮の中でさえ、彼の名前は知れていた。

「そう、レヴィン国務参謀だ……あの冷徹な参謀は、頭が切れる。この国王崩御を好機と見た。国王の葬儀に、各国の要人を招待すると言いだしたのじゃ」

「各国……北国、東国、南国の全てから？」

「そう。全ての国の要人を、西国エウリアの国王の葬儀に参列させると言った」

「それは……なぜ？」

「一つは、他国の要人にエウリアの国王の死を悼ませることによってエウリアの国の地位を認識させるためだろう。そして、もう一つは……北国が要人として誰を寄越すのか、見ておきたいのじゃ」

「北国……ラウグリア帝国が？」

「そう。北ラウグリア帝国じゃ」

この世界には、東西南北四つの国が存在している。今、カグワたちが住まうのが、此处、西国エウリア君主国だ。そして、その北に位置する国が、北国ラウグリア帝国だった。エウリアと同じく皇室を持ち、王政を布く国であるが、ここ最近では東国と戦ばかりしていると聞いた。恐らく雪の降らない豊かな土地が欲しくて、東国を占領するのが目的なのだろうと語ってくれたのは??それもケニーであった。

「北ラウグリア帝国は形こそ王政を布いているが、その実態はほぼ軍政だと言う」

「軍政……軍隊が政治を仕切っている？」

「うむ。北国が東国に豊かな土地を求めて戦を仕掛けていたことは知っておるな？」

「ええ、もう十年も戦をしていると」

「それが最近では、すっかり東の国の北側の領地は北ラウグリア帝国の領土となってしまったらしい」

「えっ……? 北国が勝利したの？」

「そういうことになるのう。東を手に入れた北国が、次に思うこと……それは、なんだと思う？」

問われてカグワは少しだけ考えて俯き、すぐに口を開いた。

「……西の国も、占領下にしたい」

「その通り」

頷いたケニーは、ゆらゆらと自分の座っている揺り椅子を揺らす。空になったコップを机の上に戻して目を細め、不気味に皺の寄った目尻にますます深い皺を作る。

「レヴィン國務参謀は、北の出方を見たいのじゃ。要人を招待されて、しらばくれて皇室を寄越すのか、軍人を寄越すのか、あるいは、誰も寄越さず真っ向から対抗してきよるのか……」

「……なるほどね」

「しかし、参謀がいくら要人を招待しようと言っても、なかなか内大臣どもが領かんのが現状らしい」

「え、どうして？」

「各国の要人を呼ぶということは、東国の要人も呼ばなくてはならぬということじゃろう？ 内大臣らは、東の国を蔑んでおるからう。要人を招待などして東と西が同等であると見られるのが我慢ならんのだ」

「……なるほど」

カグワはしみじみと頷いた。

内大臣だけではない、この西国エウリアには、東国ヤンム帝国を後進国として貶める風潮があった。実際に東国ヤンムは、東西南北四カ国の中で最も文明が遅れている。故にそれを野蛮として、中には東国の住民を東蛮人と呼ぶ者もいるくらいだ。

「不思議ね……同じ人間なのに。隣に並ぶのも嫌だと言うのかしら」

カグワがぼつりと呟くと、ケニーは灰色に淀んだ瞳を大きく見開く。

「そういえば……三の君も東の出自であったか」

「ええ、そうよ。私は幼い頃に親に連れられて東西の国境を越えた、難民の一人だから」

ケニーの目には蔑みの色などない。カグワはにこりと笑って頷いた。

カグワの生まれは東国ヤンムだ。しかし、親に連れられ国境を越えた西国の東の端、難民の村の中にて幼少期を過ごした。そして、そのまだ片手で数えられる年の頃に、突如現れた王宮からの使いに連れられ、この後宮へと来たのだ。カグワには未だに聖女に選ばれ

る者の基準を計ることができないのだが、少なくとも生まれは問わないらしい。どの国の生まれであろうとも、聖女を選定する時期にこの西国の領土の中にいれば、その対象となるということなのだろう。

ほぼ全ての聖女たちが西の国の生まれである中で、東の出自であるカグワは一人異端であった。しかしそれは、決して出自によるものではなく、カグワの天性の気性ゆえであるはずなのに、後宮の者たちはこの異端な聖女のことを「東の君」と呼んだりする。この際の「東」には、「東蛮人」と同じく蔑みの意味が込められているとカグワとて知っていたが、それでもカグワはこの呼称が嫌いではなかった。カグワは己が東の出自であることに、何の後ろめたさも感じない。

「ゆたやも東の出自よ。ねえ？」

カグワが同意を求めると、それまで主の言葉に一切口を挟まんと貝のように黙っていた仗身が、こくりと頷いた。

「私もエウリアの東の果て、丁度東西の国境当たりの森に倒れていたところを、かぐわ様に拾われた身でありますゆえ」

??それは忘れもしない、今より十年以上も昔の話だ。

聖女として後宮入りをしてまだ間もないカグワには、仗身がいなかった。正確には、仗身がいなくなった。死んでしまったのだ。たった二年かそこの付き合いだった。まだカグワと同じ年の頃、幼い仗身の見習いは、たった五つの年の頃に主をかばって死んだ。カグワは正直言くと、その時のことをよく覚えていない。何故自分がこの危険から隔離された後宮内で命の危機に晒されていたのか、そして何故たった二年そこの付き合いでしかない仗身が、そしてまだ己の意思もはっきりしないたった五つの幼子が、主であるという理由だけでカグワのことを己の身を呈してまで守ったのか。ただ、その瞬間だけは泣きたくなるほど鮮明に、覚えていた。??自分を庇って死んでいくその仗身の姿を、忘れたくとも忘れられない。

そして仗身を亡くしたカグワは、新たな仗身を手に入れるために、

東国へ出かけることを許された。本来外界へ出ることを許されない聖女にこの異例な措置が下されたのは、それだけ事態が緊急であったためだと言えよう。仗身となりうる獣人の見分けは、普通の人間には付かない。何故なら幼い獣人は普通の人の子と全く同じ姿をしているためだ。聖女であれば、巫力でもって獣人と普通の人の子を見分けることが可能であった。故に、聖女自身が外に出て、獣人を探さなくてはならなかった。そして、四方国の中で最も獣人の多い東の国へとカグワは旅立つことになったのだ。

??その旅の途中で、彼と出会った。

何故、国境を越える前に馬車を下りたのか、理由は今でも定かではない。今にして思えば、己の中の巫力と呼ばれる第六感が働いて、自分を彼と引き合わせたのかもしれない。森の中に倒れていた彼は、とても孤独で、優しい目をしていて。その目に惹かれて、カグワは彼に手を差し伸べたのだ。??己の仗身になってくれ、と。

何とはなしにカグワが隣にあぐらをかいているユタヤを見つめると、すぐにその視線に気付いたユタヤが顔をあげた。そして、「なにか?」と言外に尋ねて首を傾げる。あれから十数年が経ち、二人の間には言葉などなくとも意思の疎通ができるほど、強力な絆が育まれた。「なにも」とカグワは首を横に振った。

そんな二人の無言のやりとりを興味深く見守っていたケニーが、老人特有の掠れた声色で呟く。

「ユタヤ、カグワと……東の発音は難しいのう。二人は上手に発音するが、儂にはなかなか真似できぬ」

「ゆたや、かぐわ、よ」

カグワはすらすらと東の発音をしてみせた。

「かぐわは、花や果物のように香りの良いこと、ゆたやは、作物の実りが良いこと。東の古語で、そういう意味よ」

言って、満足気に微笑む。そんなカグワとユタヤは、互いの名前を元の発音で呼び合っていた。これは、本来あるべきその音を忘れないようにというカグワのこだわりだ。しかし、東を好かぬ者にと

ってはこの東の発音自体も好ましくなく、二人が互いをそう呼び合うことを下品だと言った。??そもそも、仗身が主の名前を呼ぶこと自体、異常なのだという。

「珍しいことよのう。仗身が、主の名を呼ぶとは……中には仗身だけでなく、己の付き人共にさえ名前を呼ばれることを厭う聖女もあるというのに」

ケニーの言葉に、カグワはそうねと頷いた。聖女たちにとって名前とはとても高貴なものだ。同じ位である他の聖女に呼ばれるならまだしも、自分より下位の者に名前を呼ばれることなど言語道断という者も少なくない。故に、「一の君」「二の君」と、称号が存在するのだ。大抵の後宮仕えの官吏達は、この称号で聖女たちを呼び分ける。

「でも……折角私には名前があるんだから、呼んでほしいじゃない？」

親の付けてくれた名前だ。初めてこの世に生を受けた瞬間に自分を自分たらしめてくれた名前だ。幼い頃に親元から引き離されて、聖女様、三の君などと呼ばれて育ったカグワにとって、この名前が自分を自分たらしめてくれる唯一の存在だった。今でこそ後宮に住まう全ての人間と自分との関係を維持できるが、ただの称号だけを与えられて宮に入ったばかりの頃は、自分が自分ではなくなってしまうのではないかという恐怖があった。

そんなカグワの考えが通じたのかどうか、「ほう」と面白そうにこぼしたケニーは、肘置きに肘をたてて頬杖をつき、ゆらりゆらりとゆっくり揺り椅子を前後させた。

「三の君は実に趣深いことを言う」

「……そうかしら」

「名前とは呪縛である、という考え方があってな」

「え……?」

思いも寄らなかった切り返しに、カグワはきよんとする。ケニーはいよいよ楽しそうに目を細めた。

「まだ神々が地上におられた、昔のことじゃ。二人の神がおった。一人の神は己の名前を、下等な人間共にも気軽に唱えてよいとおっしゃった。一人の神は己の名前を下等な人間に教えることさえ渋られた。すると、天変地異の起きたある夜のことじゃ。名前を唱えさせた神の元には、大勢の人間共が集い、名前を教えもしなかった神の元には誰一人として人間が訪れなかった。大勢の人間に囲まれた神は、人間共と身を寄せ合い天変地異から身を守ることができ、一人取り残された神は誰に助けられることもなく地の底へと落ちていったそうだ。……ゆえに、名前は人を縛る呪いである」と

「呪縛……」

「しかしその呪縛をどう利用するかはその者しだいだがね。??三の君の生国、東ヤンム帝国に伝わる神話じゃよ」

カグワは思わず己の胸元を押さえ、きゅつと拳を握った。

ケニーは博識だ。後宮の中だけでなく、西国エウリアのことだけでなく、世界中のことを知っている。それに対して、カグワは何も知らない。

隣を一瞥すると、無言で控えるユタヤが、何を言うでもなく外を見つめていた。窓の外にはそろそろ日が西へと傾き、空の赤が見え始めている。そろそろ帰らなくてはカグワを夕餉の時間に間に合わせられないとでも考えているのだろう。彼の世界の中心にはいつでもカグワがいる。

名前とは呪縛である、ケニーは言った。だとするならば、カグワとユタヤを結ぶのは強い絆ではなく??呪縛だろうか。

国境を隔てた遠い北には戦をしかけてくるかもしれぬ敵がいて、東にはその貧しさゆえに難民の溢れる土地がある。広い世界の中で出会ったことそのものが、呪縛だったのかもしれないとカグワは思う。そして己が聖女として数奇な運命を辿ったことも、また、呪縛の一つだ、と。

### 3、不吉

国王が崩御し、新王の即位にあたって巫女の選定が十日後と聞いたその日から、めまぐるしく時は過ぎていった。今までのようにただ惰性的に修行を続けていた日々の中で感じる十日とは、まるで違う。選定の儀式の練習や、後宮を引き払うための準備、そしていつもよりも増強された巫力の修行が一日の中に詰め込まれて、あつという間に十日が過ぎた。住み慣れたこの後宮に別れを惜しむ間もない。己が巫女になるのかそれともただ人になってしまうのか、その二択の突きつけられるあまりにも重大な儀式は、あつというまに目前へと控えていた。

??そして、その日はすぐにやってきた。

ついに儀式当日とあって、後宮の中は前例を見ぬ騒がしさである。朝から禊のために叩き起こされ、冷水を浴びた後に儀式の衣装を着せられて、聖女たちは一カ所へと集められ、選定の儀式に関する詳細を聞かされた。それはとても不思議な空間で、後宮の中に住んで長い聖女たちの誰もが訪れたことのない、円形の間である。詳細を聞かされたと言っても、その詳細を語る相手の姿は見えず、頭の中へと直接語りかけてくる「感応の技」を利用しているものだった。ゆえに聖女たちには、誰がこの儀式を取り仕切っているのかわからない。が、総入れ替えの制度により現在この後宮の中にいるほとんどの者たちは儀式を経験すること自体が初めてなのだから、後宮内の人物ではないのだろうとカグワは予想した。

「一刻の後に、儀式が始まる」と締めくくられて、長い説教じみた儀式の説明はようやく終わった。円形の間から外に出ると、そこは見慣れた後宮の内殿の脇、渡り廊へと続いていた。嗚呼、ここに出るのか、と声に出さずに思う。この渡り廊は後宮の庭と繋がって



おり、カグワは何度もここを歩いたことがあるのだが、一体この廊下の先がどこへ続いているのかは、知らなかった。後宮を出なくてはならないというその日に、ようやく知った。これはあの不思議な円形の間へと続く道なのだ。

「あとたった一刻で運命を定められるなんて……心の準備が間に合わないわ」

ぽつりと呟いたのは、五の君、ダイアんだ。カグワの後ろを歩いて渡り廊を進んでいる。そしてその隣に並んでいるのが、六の君、アネットである。

「そうね……。むしろ、一刻なんて間に時間を置くくらいなら、あの場でそのまま儀式をしてくださったら良かったのに。この一刻の間に緊張してしまうわ」

アネットが言った。円形の間に聞かされた感応による説明によれば、「一刻の後、再びこの円形の間に集うように。儀式はここにて行う」という。その一刻の間に儀式の準備を行うためなのかどうか、聖女たちにはそれすら聞かされていないが、一刻という長くも短くもある時間を、外で悶々と過ごさなくてはならないのは確かに精神を削る作業であった。

「だってもし、これで、巫女に選ばれなかったら、選ばれた巫女の世話役として一生仕えなくてはならないのよ」

ダイアンが嘆くように言う。これも先ほど円形の間で聞かされたことだ。聖女たちの最も気になっていた、「巫女に選ばれなかった聖女はどうなるのか」という問いに対して、感応の声は淡々と告げた。「選ばれなかった他の聖女は、選ばれし巫女に一生を捧ぐ。この国を神の使いとして守る巫女を、一生支えていくことが役目となる」と。

「いやだわ、世話役なんて……！ どうして今更誰かに仕えなくてはならないの」

「本当に……。これでもし巫女がアネット以外だったらどうしましょう。アネット、貴女になら仕えてもいいけれど、他にはとてもと

ても」

「まあ、私もよ、ダイアン。もしも互いが巫女になったその時は、お互いを優遇しましょう」

どこまで本気かわからない、薄い契約を交わす二人の声が聞こえる。またいつものことか、とカグワは息を吐いた。アネットとダイアンはいつでもそうだ。本当は心の中では自分が一番でないと気が済まないくせに、言葉の上では互いを配慮して、そして裏では互いのことを貶めたりもする。互いが巫女になった場合は、相手を優遇しようなどという口約束も、果たして守られるのだろうか。??いや、無理だろう。

カグワはふと足を止めて、後ろを振り返った。後ろを歩いていたアネットとダイアンが、突然歩みを止めたカグワにぶつかりそうになり、迷惑そうに顔をしかめる。「きちんと歩いて下さない?」と厭味を飛ばす彼女たちに「ごめんなさい」と愛想笑いで答えてから、カグワは己の歩いて来た道を見つめた。

長い渡り廊である。その先は、やはり、見えなかった。

不思議なもので、確かにあの円形の間から退場してこの廊下に出て来たはずなのに、この道の先には円形の間が見えない。天上は高く、吹き抜けの窓のある巨大な建物だったのに、何故外から見るとはできないのだろうか。何かしら不思議な力が働いているのだろうか。とカグワはその方角を眺めて首を傾げた。

「???カグワの君、貴女も何か、感じるの?」

突然背後から声をかけられて、カグワは後ろを振り返った。そこに立っていたのは、浅黒い肌をした長い黒髪の美女である。いつもの見慣れた黒髪を下ろした姿ではなく、儀式のためにと高く結わえられたその姿がまたとても印象的だ。

「……ネイディーン」

ネイディーン??彼女は、一の君と呼ばれる。すなわち、ここにいる聖女たちの中では彼女の巫力が最も高い。もしも巫力のみにて巫女を選定するのであれば、間違いなく彼女が次期巫女だ。いや、

もしそれだけが基準ではないとしても、恐らく巫女になるのはネイディーンであろう。ネイディーンは美しくとも飾らず、聡明で柔和な人物だ。彼女をおいて他に国の頂点に立つ器の聖女はいないだろう、と、カグワは思っていた。

「あそこに控える円形の間……なんとも、不穏な空気を覚えるわ」

ネイディーンが小さく呟いた。カグワは目を見開く。

「……え？」

カグワは何も見えない、おそらく円形の間のあるであろう方向を見つめた。ぽっかりと空いた何もない空間の向こうに、雲一つない青空が広がっている。清々しいその蒼穹は確かに逆に不穏であると言われればそう感じ得ぬこともないが、カグワには気付けない。

「……さすがね、ネイディーン。私は、何も気付かなかった」

カグワが感心半分、己の力不足への嘆き半分に呟くと、今度はネイディーンが目を見開く。

「あら、なら、どうしてあちらを振り返ったの？ 何かを感じたのではなくて？」

「いいえ、なにも。ただ、この渡り廊からあの円形の間を眺めたいと思っただけよ。??何も見えなかったけど」

「……カグワの君、貴女はとても勘に優れているわ。それはそれで、間違いなく貴女的能力よ」

ネイディーンは、黒真珠のような瞳を細めて微笑んだ。何故だかその顔に影が生じる。カグワは自分より少し背の高い一の君を見上げ、小首を傾げた。上品な化粧で覆い隠してはいるが、疲弊しているようだ。

「……ネイディーン、貴女も選定の儀式を前にして、とても緊張しているのかしら？」

「え？」

「なんだかとても……疲れているみたい」

思った通りを告げると、ネイディーンは黒真珠を大きく開いて何度も瞬き、それから目を伏せるとふっと笑った。言い当てられた、

と言わんばかりである。

「……貴女は、とても勘がいいわ」

ネイディーンはさっきと同じ言葉を紡ぐが、今回のこれは勘というわけではない。カグワには、彼女の顔色があからさまに悪く見えた。

「珍しいわね……。何事にも動じない、ネイディーンが緊張だなんて。……まあ、巫女選定の一大事だから、仕方ないかしら」

言って、彼女の気を和らげようと笑うと、ネイディーンは困ったように微笑んで、首を横に傾げた。

「いいえ、そういうわけじゃないの……。私のこれは、緊張ではないわ……。自分への戒め、とでも言おうかしら」

「戒め？」

「ええ……。己の失態に、疲れてしまったの……。戒めなくてはならない、失態よ……。あら？」

途中まで言いかけて、ネイディーンの声色が変わった。カグワの方を見ていた彼女の視線が、渡り廊の外、後宮の庭先の方へと移る。遠くを眺めるその眼差しに、カグワもつられるように後ろを振り返った。

「あそこにいるのは、……カグワの君の仗身ではなくて？」

「え？」

ネイディーンに言われ、彼女の示す先を眺めて、カグワは瞠目した。確かに、その庭の茂みには、よく見慣れた装衣姿の男が、隠れていたのである。

「……ゆたや！」

ネイディーンの話を遮ってしまったことも忘れ、カグワは己の仗身の名を呼んだ。がさがさと茂みが揺れる。その気配をカグワが見紛うことはない。なにしろ十年も付き添った、仗身だ。

見つかってしまっただけに隠れているわけにもいかず、ひょっこり茂みから姿を現したその背の高い男は、それはもう気まずそうな顔をしていた。確かに、本来巫女選定の儀式を間近に控えた主の元へ、仗

身の身分で現れる者などいないだろうから、並大抵ではない引け目を感じているのだろう。が、そんなことを気にするカグワではないわけで。

「どうしたの？ こっちへいらっしゃいよ」

周囲の目も気にせずに彼のことを手招きすると、カグワを抜かして前を歩いていたダイアンとアネットがこそそこそと互いに何かを耳打ちした。その内容までは聞こえないが、おそらくカグワに対する悪口雑言を吐き合っているに違いない。また東の君が、とか、仗身をこんな時にまで連れて、とか、まあ、予想はつく。

「このような時に、このような場所まで来てしまい……申し訳ございません」

渡り廊の下までやってきたユタヤは、廊下にかかることはせずに、地面の上に膝を付いて深々と頭を下げた。

「一の君とご歓談のところを、お邪魔してしまったのではないでしようか」

ユタヤはカグワの隣にいるネイディーンの方を伺う。そこでようやく、ネイディーンの話の遮ってしまったことを思い出し、「あ」とカグワは口を押さえた。一方のネイディーンは「いいのよ」と柔らかに微笑んでいる。

「儀式まではあと一刻……何をしていともどこにいらとも指示されていけないわ。もちろん、仗身と会うなどとも言われていけないわけだから、私のことは気にせず」

「ごめんねネイディーン」

今更の謝罪をしてから、カグワは渡り廊の石畳の上に屈み込んだ。石畳はそこその高さがあり、地面に直接膝をついているユタヤよりも、若干カグワの目線の方が高い。

「ゆたや、なにかあった？」

それでもなんとか頭を垂れている彼の顔を覗き込もうと首を傾げると、ユタヤはようやく顔をあげた。

「いえ……何があったというわけでもなくて……本当に恐縮なので

すが……」

ユタヤは一度顔をあげてまっすぐカグワのことを見つめて、それから迷ったように目線を泳がせる。

「なんとも……不吉な予感に駆られまして……いてもたってもいられず、つい……」

「不吉な予感……?」

カグワは思わず、隣に立っているネイディーンの方を見上げた。先刻、彼女からも「不穏な空気を感じる」と聞いたばかりである。それに何か関係があるのだろうかと目線で問いかけると、ネイディーンは首を竦めた。

「主が主なら、仗身も仗身で勘が良いのね。??不吉な予感とは、具体的に?」

まさか一の君に問われるとは思っていなかったのだろうユタヤはすっかり恐縮しきったように身を縮こませる。

「いえ、聖女の君が感じになるような、高尚なものではございません……私はただ、三の君に何かあってはと、思っただけのことで」

ユタヤは他の聖女の前では体裁を気にしてカグワのことを名前では呼ばない。三の君、と呼ばれたカグワがきよとんとすると、代わりにネイディーンがくすと笑った。

「本当に、最後の最後まで献身的な仗身ね」

「最後……?」

「あら、そうよ、カグワの君。この後私たちは選定の儀式に入るのだから、これで仗身とは一生の別れとなるかもしれないのよ。巫女に選ばれば引き続き仗身は仗身のまま付いてくるでしょうけれど……そうでなければ、巫女の世話役になる者の仗身がどうなるのかの説明はなかったわ」

「……そういえば」

カグワは息を呑む。全く、気付いていなかった。まさか四六時中一緒にいた仗身と別れるかもしれないだなんて、頭の片隅にもない

考えだったのである。

「貴女の仗身も、別れを惜しみにきたのではなくて？」

からかうようにネイデーンが言う。「滅相もない」と慌てて首を横に振ったユタヤにはしかし、少しはそういう気があったのだろうと、付き合いの長いカグワには読み取れた。かぐわは、そうか、もし自分が巫女になれなければ、この仗身とも別れなくてはならないのかもしれないのだと、初めて気が付いた。

「私は、結果がどうなるうとも、私の役目を果たすまでですが……」

そうはつきりと言ってのけたユタヤの顔に、思わずカグワは手を伸ばす。少しでも自分より低い位置にいる彼の頬を撫でて、頭を撫でて、されるがままになっていくそれはもう献身的な自分の仗身に、どう言葉をかけていいのかわからない。それはそうだ。突然別離の道かもしれないと言われたところで、今までずっと傍にいたのだ。どうしてそんな未来を予想することができよう。

「……ネイデーン」

口をついて出て来た言葉は、

「もしも貴女が巫女になったら……私は貴女に世話役として一生尽くすし、なんでもするから……ゆたやのことも護衛として雇ってあげられないかしら」

先ほどダイアンとアネットが散々繰り返していた馬鹿馬鹿しい「もしも貴女が巫女だったら」の話よりも、遥かに上に行く虚言だ。何を言っているのだ、と己を諷める冷静な自分もどこかにいて、それが絵空事であることはわかっていのに、止められない。

「ほら、だって……やっぱり普通の人間よりは力もあるし、ネイデーンの仗身一人よりも二人いた方が……なにかと役に立つかもしれないし」

「そうねえ……でも、もしも私が巫女だったとしても、そういう役職のことは古くからのしきたりに従って決めなくてはならないだろうから、どうなることか」

ネイディーンの答えはとても落ち着いて沈着なものだ。カグワの絵空事を馬鹿にして笑うのでなく、現実的に答えてくれる。

「それに、もしも護衛にできたとして……彼は貴女以外の人間を、命を張ってまで守れるかしら？」

そう微笑するネイディーンの視線の先には、カグワの前に膝を付くユタヤの姿があった。姿勢一つ崩さずまっすぐカグワを見上げるそれは、絶対的な忠誠の証である。

「……そもそも、私が巫女になると決まったわけでもなし」

言っておどけてみせるネイディーンの優しさに心底感謝しながら、カグワは俯いた。

「ええ……そうね。おかしいこと言ってごめんなさい」

こちらを見上げるユタヤが、悲しげな目でこちらを見上げてくるのは、きつとカグワがそんな表情をしているためであろう。彼は時折カグワの感情に同調する。特に、悲哀の情には敏感だ。

そんな主従の目線のみでのやり取りを見て、感心したように呟いたのは、ネイディーンである。

「カグワの君……貴女は本当に、変わった人ね……。己の仗身にも、他の聖女にも同じように接する。同じように、一人の人間として接する」

「……それでよく、怒られるわ」

「そうかもしれないわね。だけど、私は……今だから言うわ。私は、とても嬉しかったわよ、カグワ」

私はとても嬉しかった、と再度繰り返したネイディーンのことを、カグワは見上げた。渡り廊の向こう側、きらきら差し込む日差しを背負い、彼女の長い髪を結わえた金色の簪が七色の光を帯びている。聖女一の巫力を持つ、一の君の顔は美しくとも、儂い。

「誰も彼もが私のことを一の君と呼んで、妬み、羨望、畏怖、尊信の眼差しを向ける。一の君としての私を見ても、誰もネイディーンという一人の女としては、見てくれなかったわ。その中で、貴女だけが、私と同等に接してくれた」



「……ネイディーン？」

「私は、とても嬉しかったわ」

さらに繰り返したネイディーンのどこか悟ったような顔に引かれて、カグワは立ち上がる。先刻はユタヤが現れたことにより彼女の言葉を遮ってしまったけれども、彼女は何やらとても思い詰めているようだった。彼女は「これは自分への戒めだ」と語った。だが、なにゆえ己を戒める必要があるのか、まだカグワはその理由を聞いていない。

「ネイディーン……なにか、あったの？」

彼女の顔を下から覗き込むようにして問いかけると、ネイディーンはゆるやかに首を横に振った。

「私は、……誘惑に勝てなかった。それだけのこと」

「……どういうこと？」

全く意味がわからない。首を傾げたカグワに、ネイディーンは淡々と無表情で説明する。

「聖女には、決して覗いてはいけないという禁忌があるわ。それはカグワの君も知っているでしょう？」

「禁忌……？」

「外界に出てはいけない、決して覗いてはいけない、決して見てはいけない」

それは、聖女に定められた禁忌の三大原則である。

確かに、聖女には覗いてはいけないと言われた間があり、見てはいけないと言われた書物がある、という話はカグワも聖女である以上は知っていた。しかしながら、その覗いてはいけない間がどこにあるのか、見ていけない書物がどこに置いてあるのか、カグワは知らない。ゆえに、その禁忌を犯す危険になど全く遭遇せずにごくまですべてきた。

「私は、その禁忌を破ってしまった……」

「一体それは……何？ どこにあるの？」

「言えないわ。禁忌だから」

ネイディーンはにこりと笑った。そして、渡り廊の続く道の向こう、円形の間の方を眺める。

「その所為かしら……とても不穏な空気を感じる」

「不穏な……空気？」

カグワも円形の間の方を見やったが、やはり何も感じられなかった。これが彼女と自分との巫力の差なのだろうか。

「私は自分を戒めなくてはならないわ。カグワの君……貴女は、自分の信じる道を行けばいい」

「……え？」

カグワは目をぱちくりさせた。不穏な空気の気配すら感じられないような自分に、ネイディーンは何故か助言を寄越す。それが一層不思議だ。

「巫女に選ばれようとも、選ばれなかつても……貴女がこの世界を左右するのもかもしれない。そんな気がするわ」

含蓄のありそうな言葉を残して、ネイディーンは踵を返した。彼女の纏う、清々しい青い装束が宙を舞う。きらきらと太陽の光を反射させながら、ネイディーンは渡り廊を歩いて去って行った。まだ、選定の儀式まではしばしの時間がある。

取り残されたカグワは、依然として地面の上に膝をついている己の仗身を見下ろして、ぽつりと問うた。

「……ゆたやも、不吉な予感がしたと言ったわよね？」

「……私にとっての不吉は、かぐわ様の御身に何事かが生じることのみです」

「……そう」

ネイディーンの示す不穏な空気と、己の感じた不吉とは種類が違うとユタヤは言うのだろう。しかし、カグワに至っては何も感じない。

とは言え、当然のように忠義を尽くしてくれるユタヤと離れなくてはならないのだと思えば、それこそが不吉の示すものなのかもしれないかとカグワは思った。選定の儀式まであと少し、今更ながら

惜別の時を過ごそうか。

そんなことを考えているカグワは、まだ未来を知らない。時は刻々と迫っていた。

#### 4、選定の儀

?? 貴方さえよければ、私の仗身になってくれないかしら？

そう言って舞い降りた天女に手を差し伸べられたのは、今からもう十年以上も前のことだ。だが、あの瞬間は色褪せることなく、今でも彼の頭の中に刻み込まれている。彼の心はあの頃から少しも変わらない。この天女を守るのだと誓ったあの日から、少し足りとも変化していなかった。

ついに巫女選定の儀式を間近に控えた己の主と、最後の別れを惜しんだユタヤはゆっくりと気の抜けた足取りで、三の君の内殿を指していた。住み慣れたこの三の宮も、選定の儀式が終われば去らなくてはならない。だが、今ではそれ以外に帰る場所のないユタヤはまっすぐそこを目指していた。もしこれでカグワの元を離れなくてはならなくなったなら??もう、帰る場所はない。

後宮の中には、中央にある祭殿を囲むようにして、一から十までの宮が広がっていた。三の宮は北西の側にある。日のあまり当たらずに静かなその宮は、その主には似ても似つかない。三の宮の主である、いや、主であった三の君はこの後宮の中で誰よりも賑やかしく、そして輝いている。と、ユタヤは思っていた。

三の宮までくると、その入り口となる門扉の横に、一人の女が立っていた。何事かを屋敷の方へ向かって叫んでいる。恐らく屋敷の中にある荷物の最後の整理を行っているのだろう。??彼女をローマーナという。多々いる三の君付きの女官たちをまとめる女官長である。すなわち、最も三の君に近い女官であった。ゆえに、ユタヤと彼女との距離も、近い。

「おかえりなさい、ユタヤ」

ロマーナはそこに長身の男の姿を見つけると、他の女官たちに荷物の運び出しの指示をするのをやめて、彼を見上げた。ユタヤも彼女の隣にて足を止める。

「荷物の運び出しか……重い物は俺がやる」

「言われなくともそうしてもらおうよ。??カグワ様は? どんな感じだった?」

ロマーナは、荷物の整理の大詰めというこの多忙な時に、突然行方を眩ましたユタヤがどこに行ったのか、ぴたりと言い当てた。ユタヤは彼女に行き先を告げていないが、彼が突然消えたとなれば、行く先は一つしかないと知っているのだろう。

「……特にいつもと変わった様子はなく、緊張してるふうでもなかった。ただ??ひよっとしたらこれで仗身とは二度と会わなくなるのかもしれないと知って、私との別れを惜しんでくださった」

ユタヤが突然屋敷から消え、儀式を目前に控えた主の元をわざわざ訪れた主な理由は、それだ。カグワがその事実を知らなかったように、ユタヤもそれを知らなかった。だが、儀式のために正装をしたカグワが屋敷を去り、空っぽになった屋敷を片付けているときに、なんとも不吉な予感に駆られて、気付いた。ひよっとしたら、これが永遠の別れになってしまっているのではないのかと。

「そう……」

小さく呟いたロマーナは、そんなユタヤの心情もいやというほどにわかってくれる。彼女はカグワが後宮入りした時からの専属の女官、すなわちユタヤがこの後宮に来たその幼い頃から、ずっと二人を見て来た。ユタヤにとっても、カグワにとっても、実の姉のような存在だった。

「もう気付けば早いもの……カグワ様も十五になって、貴方も十八ね。もしもこれで仗身をやめなくてはならなくなっても……十八の未来にはたくさんの希望があるわ」

ふざけているのでもなく、真面目な顔をして言うロマーナに、ユタヤは「まさか」と失笑する。そして自分の首にかけられた数珠玉

を撫でた。この数珠玉にはカグワの巫力がこめられており、ユタヤの獣の性を封印している。ゆえに、体だけは獣に変化できても、その心まで獣に食われてしまうことはないのだ。

「俺は、これのおかげでようやく人の世界に生きていられる……かぐわ様に生かされているようなものだ。かぐわの君の元を去らねばならぬのなら……それは死を意味する」

この数珠玉がなくなれば、ユタヤの人間としての心は消滅する。すなわちそれは人間ユタヤの死と同義だ。ユタヤは十八の青年である前に、獣人だった。成長とともに獣に心を食われてしまうことが、獣人の悲しきさだめであった。

それに関してロマーナは何も言わず、否、言えず、黙って門扉に寄りかかると腕を組んでまっすぐ祭殿の方を見上げた。その見つめる先の華やかな祭殿の中では、彼らの主が何を思っているのであろうか。

「……そろそろ、儀式の始まる頃合いね」

ロマーナがぼつりと呟く。ユタヤは黙って頷き、同じく祭殿の方を見つめた。見慣れた後宮の景色のはずなのに、なぜか胸の奥がざわめく。まるでその祭殿の立ち姿が、異世界への入り口であるかのように見慣れぬ物に思えた。

「……不吉な、予感がする」

ユタヤは小さな声で囁いた。それは今朝方、今日が儀式なのだと朝日を見上げたその瞬間から続いている妙な知らせである。

「不吉……ね。それは、カグワ様が巫女に選ばれないとか、そういうこと？」

ロマーナの直裁な問いに、ユタヤは黙って首を横に振った。最初は、このままカグワと離ればなれになってしまうのではないかという不安からくる胸騒ぎだろうと思っていたのだが、別れを惜しんだ後も尚続くとすると、この妙な切迫感のような感覚の正体がわからない。

「なんだろう、わからない……ただ、かぐわ様の身に、なにかがあ

るのではないかと……」

「なにかって？」

「それが、わからない……」

要領を得ないユタヤの答えに、ロマーナは首を竦める。「ロマーナ、この荷物はどうしたらいいかしら？」と屋敷の方から助けを求める他の女官の声がして、ロマーナはユタヤの相手をするのをやめて門扉をくぐり、屋敷の方へ戻ろうとした。ユタヤもいつまでも此処で祭殿を見つめているわけにはいくまいと、踵を返そうとした。

その、時である。

一瞬、祭殿の空が、歪んだ。

あれは一体なんだと目をこらした時にはすでに歪みは見えない。だが、確かに何かが祭殿で起こっているのだと確信した。そして？

??ゆたや！

ユタヤは目を見開いた。聞き違えるわけがない。確かに、カグワの声が聞こえた。この近くにいないはずのない、あの祭殿で儀式を行っているまさに最中であろう、カグワの声だ。悲鳴によく似た声だった。確かに、ユタヤの名を呼んでいた。

「ユタヤ？」

門扉をくぐり、荷物の手配をしていたロマーナが、ユタヤの異変に気付いてこちらに声をかける。

「……かぐわの君が、危ない」

「え？」

現状を飲み込めずに問いかけて来たロマーナに、詳細を説明してやる暇はない。暇があったところで、この感覚的な危機感をどのようにに伝えたらいいのかはわからない。とにかく、主が危ない。なに

があっても、命に変えても守るのだと決意した主が、危機に晒されている。

いてもたってもいられなくなって、ユタヤは地面を蹴り飛ばした。祭殿までの道のりは複雑ではない。が、祭殿を取り囲んで広がる十の宮から最短距離で祭殿に辿り着くためには殿を囲む塀を乗り越えるのが最も簡単だ。

「ユタヤ！」と背後から自分の名を叫ぶローマーナのことなど無視をして、ユタヤは塀に手をかけ飛び乗った。そして飛び降りるなり、祭殿の渡り廊にかけあがる。本来ならば、仗身が気軽に乗ってはならない場所であった。何故ならこの渡り廊は最も神聖なる、「円形の間」に続いている。

ユタヤは当然ながら、その円形の間への入り方など知らなかった。強い巫力を持つ聖女たちですら、この儀式の時までその円形の間に入ったことはおろか、その円形の間が存在さえ知らなかったのだ。だが、ユタヤの本能が、その場所を指せと叫んだ。主の悲鳴が聞こえる。その悲鳴が道しるべとなって、ユタヤを走らせた。

長い渡り廊の上を、ユタヤは全力で疾走した。走るたびに、背中に背負った大剣が、がしゅんがしゅんと重い金属音をたてた。そんな物いつでも背負って重いでしょうに、とかつて労ってくれたのは他でもないカグワだ。かぐわの君を守るためにならこんな物、重いうちに入りませんよとユタヤは答えた。が、今はこの重さが邪魔で仕方がない。これさえなければもっと早く走れるかもしれないのと歯痒く思っている間に、ユタヤは前方に二人の剣士が仁王立ちになっっているのを見つけた。

それはとても、不自然な光景であった。十年過ごしたために、顔見知りでない人間などこの後宮にはいない。それなのに、その後宮の中で、見たことのない顔をした剣士が二人、仁王立ちで立っていた。しかも、彼らの立つ奥には何もない。これがとても不思議だ。渡り廊の先であるのに、渡り廊もなければ、他の建物に続く扉もない。そして、庭のあるわけでもない。その先には、目を凝らしても



見えない「なにか」があるようなのだ。

（あれが、円形の間の入り口か）

ユタヤは直感で悟った。儀式は、祭殿の「円形の間」で行われるのだという。聖女すら知らないその空間は、きつと不思議な力で隠されているのだ。ゆえに、外にいるユタヤの目には映らない。

「何者か！」

剣士の一人が刀を構えてこちらに警戒の姿勢を見せた。彼らは儀式に余所者が入ることを防ぐ門番だ。

「私は、三の君付きの仗身だ！ 中で、何かが起こっている！ ……三の君が危ないんだ、通してくれ！」

ユタヤは切羽詰まって大した説明もできずに、剣士たちを押しつけてその場を通り抜けようとした。しかし、当然その程度の口上で門番がどうぞと彼を招き入れてくれるはずもなく、二人はユタヤに刀を向けた。

「仗身だと……？ 獣人ごときがこの神聖なる祭殿に足を踏み入れていいと思っているのか！」

獣人ごときが、と聞き慣れた侮蔑の言葉にも、今更腹など立たない。むしろ、その言葉の通り、この祭殿に仗身ごときが、獣人ごときが足を踏み入れていいなどとは露程も思っていなかった。だが、今は非常事態である。それどころではないのだ。

「違う、今は、それどころではないんだ……！ 頼む、中に、三の君の元へ、行かせてくれ！」

向けられた刀など物ともせず、二人の間を押し通ろうとすると、押しのけられたのではない方の男も抜刀し、刀をユタヤの首にあてた。

「わけのわからぬことを……これ以上進ませるわけにいかない。戻るか、死ぬかだ」

ユタヤの首に当てられた刀は綺麗に研がれた新刀で、いかにも切れ味の良さそうな銀の色に輝いていた。喉元に当てられた刃の部分は冷たく、今にも彼の首を取らんとしている。何人たりとも中にい

れるなど命ぜられているのであろう二人の剣士を言葉で説得するのは困難に思えた。??いかんせん、時間がない。

(……仕方がない!)

他に手段がないと判断し、ユタヤは首にかけられた数珠玉をきゅっと握った。この数珠玉は、ユタヤの獣の心を、そして獣の姿を封印している。数珠玉そのものが効力を失えば、ユタヤはただの獣と化してしまうが、数珠玉を緩めることによって彼は人の心を残したまま、姿のみを獣と変化させることができた。しかし、それは後宮内にて奨励されてはおらず、滅多なことのない限り、普通ならば封印は解かない。カグワなどは変わり者故にたびたびユタヤに封印を解かせたが、本来ならば、緊急時以外は人の姿でいるものだ。??そして、今こそ緊急時である。

人の姿に纏う装衣を脱ぎ捨て数珠玉を緩め、ユタヤは瞬時に獣の姿に変化した。途端、視界に映る剣士たちの体が縮んでいく。実際には、ユタヤの体が倍以上に拡張しているわけであるが。

ユタヤはまず、己の首に刀をあてていた剣士をなぎ倒した。渡廊の壁に叩き付けられた剣士は、ぐ、と声を詰まらせて、気を失う。もう一人の剣士は突如変化した獣人の姿に、目を丸くし凝固してしまっている。恐らく、獣人というものを初めて見たのだろう。化け物と呼ばれるこの獣の姿は、それはそれは恐ろしいものだ。

「……退いてくれ」

低い声で告げ、くぼんだ黒い目で剣士を見下ろすと、剣士は途端に腰を抜かしてその場に刀を投げ捨てると、がくがくと震えた。とても勝てないと思ったのだろう。しかし逃げることもできずに、その場にてただおののいている。

剣士に闘う意志のないことを確認すると、ユタヤは息を呑んでから、何もない空間に身を投じた。そこには結界の張つてある可能性があった。何人たりとも儀式には足を踏み入れてはならないはずだ。剣士二人で、入り口を守っているはずがなかった。ひょっとしたら結界に引っかかって入れないどころか、はじきだされて死に至るか、

全く知らない亜空間へと飛ばされてしまうかもしれないと、頭の隅に不安は過ったが、どのみちこれでカグワを救えないのなら、同じことである。例えこの身が滅びようとも、彼女の元へ辿り着こう。

ユタヤは、獣の巨体をその入り口へと投げた。

ぐわん、と、一瞬だけ空間が歪んだ。だが、それだけであつた。結界などなかったのかもしれないし、あるいはそれをはね除けてしまうくらいの力がユタヤにあつたのか、とにかくその真実を知ることが適わない。

目の前に、暗い世界と、一筋の光と、そして巻き起こる旋風が広がっていた。聖女たちの甲高い悲鳴が幾重にも折り重なって響き渡る。ユタヤは、その中から確実に己の主人の物だけを聞き取った。

「ゆたや！」

声は、頭上から。旋風の吐き出されている、不思議な一筋の光の彼方から。

「かぐわの君！」

ユタヤは彼女に少しでも近付くべく、冷たい石の床を蹴った。

時はさかのぼり、それはまだ、ユタヤが三の宮にてローマーナと話し込んでいた頃である。カグワは、他の聖女たちと共に定刻通りに円形の間へと集められていた。

外からはその建物の存在すらわからない円形の間は、渡り廊の突き当たりの目に見えぬ扉をくぐると確かに存在していた。巨大な円錐の形をした建物は、カグワの長年居住してきた三の宮の敷地全てほどの広さがあり、三階分ほどの高さがあつた。吹き抜けの高い天井には、十の天窓が設けられており、それぞれその窓から差し込む光が、石床の上に備え付けられた黒い十の椅子を照らしている。十の椅子は、円形の間の中央に置かれた巨大な水鏡をぐるりと囲んで中央を向く円形に設置されており、扉から見て真正面の椅子から順に、一の君、二の君、三の君、と並んで腰掛けることが望まれた。

一刻前に説明された通りに従い、聖女たちは無言で己の椅子を指す。カグワも掟に倣って、二の君と四の君の間、三の君のために用意された黒い艶のある座椅子に腰掛けた。

全ての聖女が椅子に座り、中央の水鏡を見つめていると、ややあって、何者かの力によって天窓が閉じられた。円形の間の中から、光源が消える。全てが漆黒の闇に包まれたかと思えば、今度は水鏡が自ら光を放ち始めた。きらきらと水面の揺れるたびに、天上にまだら模様が映る。

『選定の儀を始める??』

どこからともなく女の声が響いた。それは、この円形の間という空間自体に響き渡るのではなく、聖女たちの頭の中に直接語りかけてくる。カグワはちらと他の聖女たちを見やったが、他の聖女たちもはっとしたように目を泳がせたので、別段自分だけに聞こえているというわけではないのだろうと安堵した。

『聖女は瞑目し、先見の技を行使せよ??選定は、己らの見た未来の中から、行う』

先見の技??すなわちそれは、未来を予知する技である。どうやら巫女の選定は、聖女たちの見る予知夢の中で行われるらしい。

選定は、不思議な力の一存によって行われるのではないのか、とカグワは初めて知って吃驚した。聖女の見た未来の中から選定するというのは、未来の中に巫女として登場する聖女を探すということなのか、あるいは先見の技の最も鮮明に行えた聖女を巫女とするという意味なのか。

詳細はわからないまでも、やれと言われたからにはやるしかなく、カグワはそっと目を閉じた。今までも巫力の修行として先見の技を試みたことは何度もあったが、正直カグワのその技の成功率は決して高くない。十のうちに一度成功すれば良い方で、大概は何も見えなかった。が、しかし、その一度の成功で、未来を外したことがないというのが唯一の誉れである。

未来を見据えようと、カグワは意識を遠くへと飛ばした。魂が体

を抜けて、どこか遠い時空の彼方へと浮遊していくような感覚に陥る。ふわふわと体が軽い。優しい大気の流れに、身を任せる。

??ふと、どこからか、赤子の嗚咽するような声が聞こえた。おぎゃあおぎゃあと、乳飲み子の泣く声である。母を求めて嗚咽する赤子はやがて成長し、天へと昇った。不思議な力に召されていた。

すると、今度は荒地を抜けようとする大勢の難民が見えた。荒れた旅路の途中で、女子供が力つきて死んで行く。思わず目を背けたくなるような凄惨な光景であった。

凄惨な光景が消え、森の奥に燃え盛る建物が見える。炎の中から命からがら逃げ出す人間が二人。一人は男、もう一人も男、泣き叫ぶ男たちの声が森の中にこだまする。

かと思えばそこは凍てつく氷の国だった。一人の若い娘が、凍った街の中で、歌を歌う。その歌は輝く光となって、街の氷を溶かした。人々は春を迎えた街の中で、歓喜した。

次に見えたのは、巨大な神像だ。カグワもこれに酷似したものを、後宮の祭殿で目にすることがあった。しかし周囲の風景からして、此処は後宮ではない。どこか他の場所にある、神像である。かと思えば、その神像が突如爆風に巻かれ、粉塵と化した。炎があがる。神像は見るも無惨に、その場に崩れ落ちていった。

それから次に見えたのは、雪の降る景色だ。広い雪原の中に、矢が、石槍が、飛び交った。戦の光景である。人が倒れると、白銀の雪が黒に近い赤に染まった。たくさん人間が命を失った。命を落とした人間は、雪の下へと埋もれていった。

そして最後に見たのは、巨大な獣の姿であった。胴は熊のように黒く巨大で、頭は獣の頭蓋骨のような形をしている。伸ばした手には長い爪がはえ揃い、睨む目は闇のように暗い。誰かが、化け物、と叫んだ。化け物は暗い闇の目を悲しそうに歪めた。その暗い闇の目を持つ化け物を、カグワはよく知っている。

??ゆたやつ!?

カグワは思わず目を開いてしまった。遠い時空の彼方を彷徨っていたはずの意識が、円形の間に座る彼女の体の中へと舞い戻る。鮮明に、その場の景色が見えた。現実の目は例えどんなにその場が暗くとも、真実しか映さない。

円形の間の中央に備え付けられた水鏡の中から、金色に光る不思議な球体の物が垂直に上へと飛び出した。他の聖女たちも皆、先見の技を終えたらしく、呆氣に取られたようにその光る球体を眺めている。

光の玉は、ぷかぷかとしばらくその場に浮いた後、やがて少しだけ沈んだ。聖女たちの座る高さまで沈むと、ゆらゆら揺れる。かと思えば、なんとも頼りない足取りで、動き始めた。その向かう先は??なんと、カグワの座る三の君の御座だ。

どういうことだ、と驚いているカグワの前で光の玉は動きを止めた。他の聖女たちも皆、啞然とした顔でこちらを見ている。この光の玉が水鏡から現れたものならば、それは選定の儀式をとりしきる不思議な力の意味である。そしてその意思がまっすぐカグワの元を目指したというならば??それが、意思の下した決定ということだ。

(嘘でしょう……私が?)

他の聖女たちが、「そんな馬鹿な」と目を見開くのと同じくらいに、カグワも困惑していた。東の君と揶揄され、変わり者と笑われ、それでも厭わず自由気ままな振る舞いをしてきた。正直に言えば、巫女になりたいだなんて、思ったこともなかったのだ。最も、聖女らしからぬ聖女であったと思う。自分は最も、巫女の座からは遠かったと、そう思うのに。

しかし、間違いなく光の玉はカグワの前に頓挫した。これをどのように対処すればいいのかは、事前の説明で習っていない。カグワは戸惑いながらも、とりあえずその光の玉を両手のひらですくいあ

げるように包み込んだ。すると、その光の玉は、布が水にしみこんでいくように、カグワの体の中へと溶けて行った。

(これで……私が、巫女に……?)

果たして儀式はこれで終わりなのだろうか。この後一体自分はどうか。不思議な声もしない。これ以降の説明も何も受けていない。ただ、光の玉をすくいあげた両手を、持て余すばかりである。

カグワの当惑が頂点に達した、その時である。??事件は起こった。

俄然、円形の間の天上に、不思議な黒い固まりが降臨した。これも儀式の延長だろうかと上を見やって、しかしカグワは首を傾げる。暗褐色のその固まりからは、これまでの儀式に関係した全ての物とは異なり、神聖さのかけらも感じることができなかった。??むしろ、おどろおどろしい。

「……不穩の正体は、これか……」

一の君、ネイディーンがぼそりと呟いたのが聞こえた。カグワは再び天上を見上げる。確かにその暗褐色の固まりは、不穩であった。

と、次の瞬間、暗褐色の固まりの中から、一筋の強い光線が落ちた。光線は迷わず水鏡と衝突し、ぱりん、と音を立てて水鏡の入れ物ごと破壊する。そして、その次には光線を巻くようにして、竜巻のような強い風が拭き起こった。

途端、円形の間の中に、甲高い聖女たちの悲鳴が響き渡った。風は上へ上へ、暗褐色の固まりの中へと物を吸い上げて行く。割れた水鏡の破片が、暗褐色の中、暗闇の中へと吸い込まれて行った。

きゃあああ、と聖女たちの阿鼻叫喚。カグワも危うくその風の中へ吸い込まれていきそうになり、慌てて自分の座っていた御座にしがみついた。髪をまとめていた簪が解け落ち、暗闇の中へ消えて行

く。風の渦はまるでカグワを目指して舞い起こっているようにも感じられ、カグワは全身の力を込めて御座にしがみついても、今にも引き剥がされんとしていた。

なにがなんだかわからない。今は巫女選定の儀式の途中だ。なのにどうしてそんな神聖な場に、こんなにもおぞましい物が現れるのか。とてもではないが、これが儀式の一貫とは思えない。誰か？？誰か、助けて！ と、叫ぶ。

心の中で悲鳴を上げると同時に、外と繋がる円形の間の扉が、叩き割られるような勢いで開いた。その開いた扉の向こうから現れたのは、よく見慣れた姿。誰もが恐ろしいと顔を歪めた化け物と言われる所以であるが、一度だってカグワはそれを恐ろしいだなんて思ったことがない。

「ゆたや！」

名前を呼ぶと同時に、ついに御座にしがみついていられなくなったカグワは、旋風に巻かれて暗闇の中へと吸い込まれていった。

「かぐわの君！」

すぐに、彼の声が追いつく。

なにがなんでも、と、がむしゃらに手を伸ばすと、ぎりぎりのところで彼の長い爪のような獣の手に届いた。カグワがその爪の一本を右手でしっかりと握り締めると、今度はユタヤが手を伸ばし、その巨大な腕の中にカグワの体を抱き込む。ユタヤの獣の体の中へと押し込まれて、ひとまずは安心した。が、二人同時に闇の中へと吸い込まれていることに代わりはない。

風に飛ばされるがまま、上下左右、体は何度も回転を繰り返した。何も見えない暗闇の中で、どこが正しい上でどこが正しい左なのかもわからない。ただ、崖の上から転がり落ちて行く石のように、闇の中を転がっていく。

ゆたや、とぎゅっと固い毛皮を握り締めると、彼のカグワを抱く腕にも力が籠った。絶対に離さないようにと力強く、だがカグワを潰すことのないようにと優しく抱きしめてくれる。カグワは闇の中



でも、彼の腕に護られている。

そうしてどれくらい、闇の中を転がったのだろうか。三半規管が言うことを聞かなくなるくらいに振り回され続けて、ようやく闇の先に光が見えた。あれが、闇の出口だろうか、と思った刹那には、二人の体は放り出される。

どん、と鈍い音がした。ユタヤが闇の中から光の中へと放り出されて、どこかに着地したのだ。ユタヤが着地時の衝撃を全て吸い取ってくれたために、カグワは少しの痛みも感じることなく光の中へと到着することができた。

風はもう吹き荒れてはいなかった。それどころか、二人を包んでいた闇もなくなり、先ほどの恐ろしい光景が嘘みたいのに、静寂がその場を支配していた。

しかし、そこはどう見ても、彼女がそれまで選定を受けていた円形の間ではなかった。とてつもなく狭い空間で、獣の姿にと変化したユタヤに至っては、少しも身動きが取れない。?? 此処は一体、何処だ？

二人は、聖なる儀式の途中に突如不思議な闇の中へと吸い込まれて、全く知らない別世界へと、はじき飛ばされてしまったのである。

## 5、時空の狭間のその向こう

かつん、かつん、と遠くの方から人の足音が聞こえた。しかしそれは本当に遠い彼方から響き渡るもので、果たしてどこへ向かっているのかもわからない。静寂と暗さの支配する世界の中で、頼れるのは触覚ばかりだ。カグワは、最も身近にあるもの？？共に闇の中をぐりぬけてきた己の仗身の毛皮を掴んだ。

「……ゆたや」

おそろおそろその名を呼ぶと、すぐに応えた。

「はい、ここに」

即座に返されるその答えに、心底安堵する。此処がどこであるのか、一体何が起こったのか、自分の置かれている状況が何なのか、一切わからないことだらけであるが、確かにそこに慣れ親しんだ仗身がいるのだとわかればそれでいい。カグワは彼の毛皮から手を離して、わずかに暗い空間の中を進んだ。

「……ここは一体どこかしら」

言いながら二歩進むと、すぐに壁に当たった。どうやらとても狭い空間のようだ。

「さあ……あまり広い空間ではないようですが……私は身動き一つ取れません」

言いながらユタヤは獣の頭を僅かに持ち上げて、がしゅんとかかにぶつかった。「照明器具が……」とユタヤが情けない声をあげる。音からして硝子製の照明器具がぶらさがっているのか、とカグワは天上を仰いだ。カグワの触れた壁も上質な壁紙のような触感を感じていたし、二歩のみ歩いた床も絨毯が敷かれているようで柔らかい。どうやら此処は狭いながらも、人の住まうことのできる部屋のようにだった。

「此処が普通の部屋なら……どこかに出口があるはずだけど」

カグワが小さく呟いて壁を伝うと、ユタヤがわずかに身動きした。

「私の前方に……それらしき取手がありますが」

「本当？」

カグワはユタヤの腕を掴むと、彼の誘導に従ってそれらしき取手へと辿り着いた。部屋の中には明かりがなく、窓さえないため暗くてよく見えないものの、確かにそこには扉の握り手のようなものが存在していた。が、金属製のそれを握って押してみても、あるいは引いてみても、全く扉は動こうとしない。

「……駄目だわ。開かない。ゆたや、開けられる？」

力尽くで開けられるものなのかどうかは不明であったが、自分よりも数倍力のある仗身に託すと、彼は無言で扉を押した。が、やはり、びくともせず、長い爪をひっかけ扉を引こうにも、開こうとはしなかった。

「……どうやら何かしらの呪がかけられているようです」

「ゆたやの力でも開かないとなると……そうかもね」

どのような頑丈な錠がしてあったとしても、ユタヤが力尽くで臨んでびくともしないということは考えづらい。ということは、物理的ではない何かしらの力が働いているということになる。

カグワは扉を開くことを諦め、ふうと一息吐いた。とりあえず、此処が何処なのか、一体全体どうしてこういうことになったのか、わかるだけのことを推理してみなくてはならない。そのためにはまず、この暗闇から脱したいのであるが、照明器具に明かりは点くだろうか。

「ゆたや、天井の照明に火を灯したいんだけど……できそう？」

「火種、は……難しいかもしれません。なにしろ私の頭が当たってしまうので」

ユタヤの獣姿の長い白髪に炎が移ってしまうかもしれない、という懸念だろう。カグワは腰に手をあてて、考えた。そもそも、彼がこの部屋の大部分の空間を占拠してしまっているために、この部屋の全貌が見えない。

「人型に戻ってよ、ゆたや」

「いえ……円形の間の前の渡り廊に、装衣を置いてきてしまったゆえ……」

仗身の纏う装衣は、獣型にも人型にも自在になれるよう、着脱の便利な衣となっている。ゆえに獣型になった時には必ず装衣を持って移動しなくては人型に戻りたくとも戻れない。しかし、この非常事態の中では、それすら忘れてしまったようだった。

「もー……装衣なくなっちゃっていいわよ別に」

「さすがにそういうわけには……」

人型に戻って全裸に数珠玉を巻いたのみの格好というのは、さすがに気の知れた仲とは言えど、躊躇するらしい。その気持ちのわからないわけでもないの、カグワもそれ以上は言わなかった。

代わりに、閉じきった扉に寄りかかって、うーんと唸りをあげる。

「でも、どうしよう……一つの扉が呪で封じられているとなると、他にどうやって外に出たらいいのかしら……」

「そうですね、他に道を探して……ん、お待ち下さい、なにか、物音が……」

「え……?」

「……何者か、人間の足音が、こちらへと近付いております」

ユタヤはぴたりと動きを止めて、声を潜めた。つられてカグワもぴたりと身動きを止める。すると、確かに扉の向こう側から、かつかつと近付いてくる人の足音が聞こえた。

この部屋の外がどのような作りになっているのかなんて、皆目見当も付かないが、足音は上の方からだんだんとこの部屋の前へと近付いてくる。故に、階段か何かがあって、上階からこの部屋を目指して何者かが下りて来ているのではないかと予測できた。

「……かぐわ様、私の後ろへ」

小声でユタヤが囁いた。カグワは暗闇の中、鮮明には見えない彼の顔を不安げに見上げる。確かに仗身とは護衛のこと、カグワを護

ることこそ彼の仕事ではあるが、今まで平穏な後宮で過ごしてきた彼女たちに、このような不測の事態が起こったことは一度もなかった。ゆえに、不安だ。ただ一方的に護られる立場は、不安だ。

かつかつと、足音が近付いてくる。もう間もなくだ。階段を下りるような足音ではなくなった。今度は、固い床をまっすぐ歩くような足音に変わる。??カグワは目をつむり、巫女の技の一つ、「気感」の技を使った。これは唯一カグワが得意とする技で、近くにいる人間ならば、その気配から大体のその特徴を言い当てることができさる。

「男が……二人よ。顔はよくわからないけど……若い男が二人。帯刀しているみたいだから、兵士か何かかしら……」

「気感」の技を使ってできうる限り相手の特徴を探ると、彼女の力を絶対的に信じている仗身は二人の兵士が来るのだと身構えた。

「相手は敵かもわかりません……向こうが武器を持っているのなら、尚更私の後ろへ隠れてください」

かぐわの君、と再び囁かれて、致し方なくカグワは壁を這うようにしてユタヤの後ろへと隠れた。不安ではあるが、自分が前にいたとて何もできない。戦いの術ならば、ユタヤの方がずっと心得ている。

かつかつかつ、と近付いてくる二人分の足音が、ついに部屋の前で止まった。部屋の、扉の前で止まった。来るか、とユタヤが身構える。その後ろに控えたカグワは、彼の背の毛皮を無意識のうちに握り締めた。

そして、ついに、扉が外側から開けられる。あんなに固く閉じられていた扉は、やはり呪がかけられていたのであろう、外側からはいとも簡単に開いた。それはもう、腐った木戸を開けるがごとく容易に開いた。

きい、と音をたてて扉が開くと、途端、外からの光が部屋の中へと差し込んだ。そのあまりの眩しさに、一瞬にして目が眩む。本能的に瞑ろうとする目を必死に開くと、自ずと涙が溢れた。涙で霞む

視界の中に、二人分の男の影が映る。

「……うわああああ、なんだ、こいつはっ!!」

「ば、化け物……っ!!」

背中に光を背負って、影にしか見えない二人の男が、口々に悲鳴をあげた。そして、彼らが悲鳴をあげたその対象がなんであるかは、瞭然だ。部屋をその巨体で占拠する、獣の姿をしたユタヤのことであろう。

「ば、ばかな……! 部屋には、娘が一人、いるはずだ、と……!」

それなのに、何故、化け物が……!」

「わからん……! とにかく、殺せ!」

金属のこすれるような音がして、男たちが抜刀したことを知る。カグワははっと息を呑んだ。確かにユタヤは生身の人間よりも遥かに強いけれども、抜き身の刀二本を相手に勝つことなどできるのか。

そう思って緊張したカグワとは異なり、ユタヤは少しの怯えも見せなかった。強い警戒の意思を見せて、相手を睨みつけているのであろう覇気が、後ろからでも伺える。その覇気に押されて、「殺せ」と叫んだはずの男たちがひるんだ。刀を握り締めたまま、一歩踏み出すこともできない。

「は……はやく、殺せ!」

「でも、……でも!」

二人分、裏返った悲鳴のような喚きが聞こえる。と、思ったその時だ。

「???殺すだど? それは誰の許可を得てのことだ」

この場にそぐわぬほどに冷静な、男の声がした。

かつ、かつ、とその男の物であろう足音が近付いてくる。部屋の前にいる男共よりか幾分重みのある足音で、両者の間に地位の差があるのだとその足音だけで判別できた。

「あ……しかし、中に、化け物が……!」

刀を構えた男の一人が裏返った声で抗議する。すると、現れた男

は再び冷静な声で答えた。

「それは獣人だ。古来より、西の国の巫女は、獣人を護衛として侍らせるのだ。??これだから、何も知らない下級兵を寄越すことには反対したのに」

台詞の後半は独白であろう。何も知らない下級兵たちは、現れた男に「戻れ」と言われて、まだ怯えの消えないまま、抜き身の刀を鞘に戻すことさえ忘れて足早に去って行った。足のもつれそうな勢いで走り去って行くその足音は、いっそ哀れであった。

一方の残された男は、一人部屋の中を見つめていた。その部屋いっぱい警戒を解かぬ獣の姿を見て、ほう、と感心したように呟く。

「……しかし、立派な獣人だ……。まさか、あの時空の狭間に自ら飛び込んでくるとは」

男はユタヤを見上げてわずかに唸ると、それからその場に膝をついた。彼は深々と叩頭し、声を張り上げる。

「西の国の巫女??お迎えに参上致しました。危害は加えぬゆえ、そのお姿を拝見させて頂きたく存じます」

その殷懃な口調からは、生来の上品さが感じられた。恐らく、生まれながらにして貴い位を持っているのだろう。

カグワは決意した。逃げてでも隠れても仕方がない。西の国の巫女とは、間違いなく自分のことだ。まだ、選定の儀式を抜けて間もなく、その実感はないけれども、他に該当する者はいない。

「……私が西の国の巫女よ」

ゆえに、ユタヤの横をすり抜けて、彼の前に出た。「三の君!」とユタヤが咎めるように声をあげる。あえてここで名前を呼ばなかったのは、見知らぬ男にカグワの名前が知れてはいけないと配慮したためだろう。つくづく用心深い仗身だ。

部屋の前の広い廊下に膝をついた男は、癖のある茶色い毛を首の後ろで軽くくくっていた。暗色の絹の布でできた品の良い服を纏っているが、後宮育ちのカグワにはその格好から彼の位を予想するこ

とは難しい。

「西の国の巫女……手荒な方法で此処までお連れしてしまったことをまずはお詫び申し上げる」

「手荒……なんてものじゃなかったけど……此処は何処なの？」

「此処は西国エウリアの隣国、北国ラウグリアの宮殿でございます」

「北国……っ!？」

思わずカグワは声を荒げた。

聖女として後宮で大切に育てられたカグワは、西国エウリアはおろか、後宮の敷地の外にさえ、足を踏み出したことがほとんどない。当然、北国ラウグリアになど一度も足を踏み入れたことがなかった。故に、自分のいた西国の後宮から、この北国の宮殿までどの程度の距離があるのかわかる由もないが、少なくともこの短時間で移動できる距離ではあるまい。先刻この男は、「時空の狭間」とぼやいたが、それはきつと円形の間天井に現れた暗闇の固まりのことであろう。そしてそれを通り抜けることによって、カグワは一瞬にして西国の後宮からこの北国の宮殿まで飛ばされてしまったということだ。

「西国はこの頃、北国に要人を寄越すよう強く求めてきますので……ならばまずは、西国の要人をこちらへお招きして、話を聞こうではないかと」

男は深く頭を垂れているため、その顔を見ることはできない。しかし、その声色からは、なんとなく含みが感じられた。

……あの冷徹な参謀は、頭が切れる。この国王崩御を好機と見た。国王の葬儀に、各国の要人を招待すると言い出した。

……レヴィン國務参謀は、北の出兵を見たいのじゃ。要人を招待されて、しらばくれて皇室を寄越すのか、軍人を寄越すのか、あるいは、誰も寄越さず真っ向から対抗してきよるのか。



そう教えてくれたのは、後宮の最西端の変わり者、ケニー老翁である。そして彼は言った。北国ラウグリアは今やほぼ軍国になりつつあるのだと。そしてそのうち、隣国であるこの西国エウリアにも戦を仕掛けてくるであろう、と。

「しかし、なかなか西国の御仁が話し合いには応じてくださらぬゆえ、手荒ではありますが、こうして西の巫女を時空の狭間よりお招き致しました次第」

「時空の狭間……」

カグワは眉をひそめた。

それはすなわち、時間もなければ空間もない、不思議な扉を開くことによって遠い物を近くへと引き寄せる技である。巫力の修行をするにあたって、時や空間を操る技があることも、聞いてはいた。しかしながら、それはとてつもなく高尚で、他の技と比べてみても圧倒的に難易度が高い。今代一の巫力の持ち主であると言われた一の君ネイディーンでさえも、その技に挑戦することすらできなかった。??だが、北国にはその技を扱えるほどの強い巫力の持ち主がいるのだ。

「……北国には相当な、実力者がいるのね」

呟くと、長い癖っ毛の茶髪が「御意」と言って、揺れた。

「西国では、巫力と呼ぶらしき不思議な『力』。我が国には、随一の『力』を持つ御仁がおります。その御仁が、折角お招きしたのだから巫女に会いたいと仰せです」

「……誰？」

「北ラウグリア帝国の皇太子……シルディア殿下でございます」

「皇太子殿下……」

カグワは瞬きをした。「御仁」と呼ぶからにはそこその地位のある人間だとは思っていたが、まさか国を統べる皇室の人間であるとは思わなかった。『力』があるから皇太子になったのか、あるいは皇太子がたまたま『力』を持って生まれたのか。カグワは北の国の皇室の制度など知らなかったが、どちらにせよ国の頂点に立つ人

物がそれほどの強大な『力』を持っているのだという事実が、恐ろしく思えた。

「殿下は、巫女の到着を今か今かとお待ちです。どうぞ御足労下さい」

言って、男は初めて顔をあげた。怜悯な顔立ちをした若い男であった。二十かそこらだろうか。

「さあ」と男に促され、カグワは俄に迷ったが、いつまでもこの狭い部屋に閉じ込められていても仕方がないと判断して彼に従うことにした。彼の言葉がどこまで真実なのか、カグワには判別する術もないのだ。とりあえず動かないことには進めない。

そう決断したカグワが一步前へ踏み出すと、「三の君」と後ろの仗身が低い声をあげた。この見知らぬ場所でカグワを一人にすることを、案じているらしい。振り返って「私は大丈夫よ」と彼を安心させようとして、ふと気が付いた。確かに、カグワに身の危険の生ずることはないかもしれない。手荒い方法ではあったが、カグワのことを西の巫女と知っている以上、迂闊に手出しはしないだろう。??だが、ユタヤはどうだろう。

カグワの頭に、先ほどやってきた二人の下級兵士の姿が過った。ユタヤを見るなり「化け物だ」「殺せ」と彼らが喚いたように、北の国にとって巫女であるカグワは要人であろうとも、ユタヤはただの化け物でしかない。このまま彼を置いて行ったら、何をされるかわからない。

「待って」

気付いたカグワは、カグワをどこぞへ連れて行こうと踵を返した男の背に向かって声をかけた。

「ゆたやも……彼も一緒に連れていくわ」

「何……?」

前を歩く男が足を止めてこちらを振り返る。そしてカグワの後ろに控える獣の姿を見上げて、険しい顔をした。それが肯定なのか否定なのか、聞かなくともわかるほどに、険しい。カグワはそれでも

畳み掛けるように続けた。

「西の国の掟では、巫女の傍には必ず仗身が控えることになっているの。もしもその掟に従えないのなら……私が行けない」

きっぱりと言い放つと、男は眉根を寄せる。

「此処は西の国ではありません。北の国では北の国の掟に従うのが得策では？」

「勝手に招いておいて、従えと？ 折角此処まで来てあげたのだから、それくらいは譲歩するべきではなくて？」

実際には招かれたというよりも攫われたといった方が正しいほどの狼藉であったが、毅然と振る舞った。男は灰色の目を細め、口調を強める。

「北の国には獣人がおりません。宮殿の中を歩かせるわけにはいかぬのです」

負けじと、言い返した。

「なら、強制的に私を連れていきなさい」

背後の仗身が、獣の唸るような低い声で付け足す。

「巫女に手を出すようならば、その者を私が排除する」

主従の強い視線を受けて、男の目が揺らいだ。彼は眉間に皺を寄せたまま、「しかし」と困惑したように言いよどむ。

「再度申しますが、北国には獣人がおりません。宮殿の中に獣が現れたとなると、混乱を避けられぬ」

確かに、とカグワは下級兵士たちの反応を思い浮かべた。この姿のままのユタヤが歩くと、後宮の中でさえ嫌悪されるのだ。獣人を見たことのない場所では、どうなることか。彼の言葉には一理ある。

「なら……服を持って来て頂戴。彼は、人の形にもなれるから」

男は獣姿のユタヤを見上げて一驚したような顔をする。巫女には獣人が護衛として付くことを知りながら、彼が人にも獣にも変化できることは知らなかったらしい。

「それで問題はないでしょう？ よもや嫌とは言わないでしょうね

？」

強い口調で問うと、男はユタヤとカグワを見比べた後に、首を竦めて頷いた。

「しばし部屋の中でお待ちください。衣服を用意させましょう」  
カグワはほっと胸を撫で下ろした。これでユタヤと離ればなれにはならずすみそうだ。

部屋の中で、と言った男はカグワを再び部屋へ戻すと扉を閉めようとした。恐らく彼女たちが逃げることをないよう、再びこの扉に呪を施すつもりなのだろう。

閉じられていく扉を眺めながら、ふと、カグワは男の顔を見て問うた。

「ところで、そうだ……貴方は誰？ 軍人さん？」

最初にこの部屋を訪れたのは、二人の下級兵士であった。ほとんど軍に食われてしまっているという北の国で、権力を持っているのは軍人なのだろう。現状をよく把握している彼も、その一人なのだろうかと思って問うた。すると、彼は「いえ」と笑って首を振る。

「私は、皇太子殿下の世話役しております。位で言えば、侯爵と同位の権限を持ちますが……巫女君よりは下位でございますゆえ、何でもお申し付けくださいませ」

「そう……名前は？」

北国の貴族の階級制度など知らぬカグワには、彼の位などどうでも良かった。ただ、彼を呼ぶための名前が知りたい。

名前を問われた男は、茶色の癖っ毛を垂れ、軽く会釈した。

「オレーク・ナイザーと申します。オレークともナイザーとも、なんでもお呼びください」

## 6、封印

それから間もなくしてオレークがユタヤのために下級兵士の纏う物と同じ軍服を持って現れ、ユタヤは人の姿へと変化し、二人は狭い部屋を出ることを許された。

それまで二人の閉じ込められていた部屋は宮殿の地下に位置していたらしく、オレークに連れられて長い石の階段を上り続けて、ようやく地上階に出ることができた。

北国ラウグリアの宮殿は内側からでもわかるほど、恐ろしく頑丈な作りをしていた。何重にも重ねられた石造りの壁は分厚く、外の空気を頑なに遮断する。カグワは最初、それは敵襲に備えたものなのだろうと思ったが、ややあってそれだけが目的ではないことに気付いた。此処ラウグリアは、カグワの住む西国よりも遥かに北に位置している。冬はカグワの経験したことのないほどの極寒に見舞われるに違いない。この頑丈な壁は、冷たい外気を遮断するためのものなのだ。その証拠に、壁だけでなく窓も頑丈だ。二重に張られた硝子の窓は外気との温度差で結露していた。季節はまだ冬には遠いけれども、ここでは西の国のように気軽にひなたぼっこもできないのかもしれない。

宮殿の地上階へと出てから、オレークは王宮の敷地内の他の塔へと移動した。それまでいた塔には所々に警備を行う軍人がいたのに、何故か移動した先の塔の中には軍人の姿がない。時折すれ違うのは、小間使い風の男女のみだ。

「此処は、王宮内でも特に守られた場所……皇家の住まう、皇宮です」

前を歩くオレークがそう説明してくれた。おそらく皇宮内は、軍人は立ち入ってはならないことになっているのであろう。

皇宮に入ってから上へ上へと冷たい石段を上らされ、辿り着いたフロアはとても静かだった。荘厳であった。その階全体に、重い空

気が立ちこめていた。この階には皇家の中でも相当の権力者が住んでいるのだと、その空気からのみでもわかるほどである。赤い絨毯の布かれた道の途中に、金色の柱時計が置かれていた。一人の女中がその柱時計のゼンマイを巻いていたが、オレークとオレークに連れられたカグワたちの姿を見て、慌てて壁際に寄るなり頭を下げた。カグワには侯爵の位がどの程度のものなのかわかる術もないが、皇太子殿下の付き人である、オレークの地位もなかなか高いのであるう。

「こちらに??」

言ってオレークの示したのは宮殿の最奥、今まで通り過ぎて来たどの部屋の入り口よりも絢爛な姿をした扉であった。扉だけで、大した迫力である。カグワは思わずその扉を上から下まで眺めた。

縦に長いその扉の天辺は、遙か彼方二階分くらいの高さはある。

落ち着いた黒に近い緑を基礎に、金の装飾が幾重にも施されていた。オレークの握ったドアノブは、錆びない真鍮の色をしている。

「殿下、オレークです。西の国の巫女君をお連れしました」

オレークはその豪華絢爛な扉に頬を寄せて、部屋の中へと声をかけた。すると、間もなく、「入れ」と弱々しい少年の声が返ってくる。オレークは小さく「失礼致します」と礼をして、巨大な扉を押して開いた。

きい、と扉の軋む音がして、開いたその先は、見たこともない輝かしい空間であった。

カグワとて、聖女として後宮の中でそれはそれは大切に育てられて来たという自覚がある。聖女の住む宮も、豪華ではあった。だが、しかし、この部屋は遙かその上をいく。だだっ広く上品な空間に、白磁の風呂が置かれていたり、巨大な暖炉が控えていたり。そしてその部屋の中央に、紗幕のかけられた巨大なベッドが置かれていた。そのベッドの上に、一人の線の細い少年が、膝を立てて座っていた。

「オレーク」

紗幕の向こう側、ベッドの方から少年の声はするが、姿は見えない。暖炉の炎に照らされて線の細い体の影は見えども、その顔までは見えない。

「湯が湧いたと思うんだ。生姜の粉を溶かしてカップに注いでくれ」

少年の声に、「御意」と小さく頷いたオレークは、暖炉の方へと足早に駆けて行って火にかけられたポットを取り出す。そして小さなテーブルに乘せられたカップを乾拭きすると、言われた通りになにやら白い粉を取り出し調合しはじめた。

オレークに続いて部屋に入ったものの、居場所のないカグワはきよろきよろ部屋の中を観察する。天井が高いなどどうでもいいことを思っていると、紗幕の向こう側から声をかけられた。

「君が西の巫女だね。こっち来て、座りなよ」

当然、西の巫女とはカグワのことだ。「座りなよ」と指示を受けたカグワは、しかしながら彼の言う「こっち」がどこなのかわからずに、戸惑いながら後ろを向いた。後ろには、カグワから一步離れたところにユタヤが立っている。彼は部屋の中をひとしきり眺めて特に危険のないことを確認すると、豪華絢爛な扉の脇にひっそりと控えた。仗身である自分があまりでしゃばってはいけなかったのだろう。

「ほら、何をきよろきよろしてるんだ。こっちだよ、こっち」

紗幕の向こう側の声にせつつかれて、カグワは当惑しつつもベッドの傍へと近付いた。

大の大人が五人くらいは横になって眠られそうなほどの巨大な寝台の横にぐるりと回ると、なるほど、そこには緑色のクッションの敷かれた長椅子が置かれていた。他に座れるような場所もないので、きっと彼の言う「こっち」とはこの椅子のことなのだろうと結論づけて、カグワはゆっくりとそれに腰を下ろす。と、同時に、カップに生姜湯を注ぎ終わったオレークが、カグワの座った長椅子の脇の机にカップを置いた。

「殿下、こちらに??」

「ああ、うん。ありがとう」

簡単な礼を述べた後に、声の主が紗幕を内側から開く。初めて、その少年が姿を見せた。カグワは長椅子に座ったまま、まじまじとその素顔を見つめた。

とても線が細く、色素の薄い少年であった。年の頃は若く、カグワと同じ年かあるいは年下であろうか。流れるような白に近い金髪には癖がなく、肌も透き通るように白い。瞳は水晶のように青く、睫毛が弱々しく震えていた。

少年はゆっくりと置かれたカップを手にとると、上品な仕草で口へと運ぶ。一口飲んで彼はわずかに眉をひそめると、寝間着らしき白い服の袖で口を押さえた。

「……甘い」

オレークは、彼の小さな呟きも聞き逃さない。

「砂糖を投じましたゆえ……」

「今日はそんな気分じゃない」

「では作り直します」

「……いいよ。めんどくさい」

彼は、付き人だというオレークのことを放って、ベッドの端へと座り直した。開かれた紗幕の間から覗くその青い瞳が、まっすぐカグワのことを捕えて離さない。

「……名前は?」

とてつもなく単純で、短い問いかけであった。カグワは彼の作り出すなんとも妖艶な空気に飲み込まれないようにと気を張りながら、答える。

「かぐわ、よ」

「カグワ……姓はないの?」

「巫女には、必要ないから……あったのかもしれないけど、忘れてしまったわ」

「へえ、羨ましいな……俺も姓なんて必要ないと思うんだけど、恐



ろしいくらい長い姓があつて」

にこ、と微笑んだその笑みに、息を吞んだ。綺麗な花には刺がある。彼の笑みには毒がある。

「長い、姓……？」

「覚えられないだろうから教えない。人は皆、シルディア皇太子殿下と呼ぶから、それだけ覚えておいて」

「シルディア……」

言われた通りにその名を繰り返すと、ぴくと青年の表情が反応した。彼の顔から毒気が消える。

「……俺、よくわからないんだけど……西の国では皇室と、巫女と。どちらの方が上位なの？」

その詰め寄るような強い口調に、カグワは困惑した。どちら、と問われても、まだ本当に自分が巫女になったのかどうかも怪しい、儀式の途中で抜け出して来たような身で、定かなことは答えられない。なので、通説により今まで教えられて来た通りに答えた。

「西国エウリアでは、皇室と巫女が連立しているの。国政の頂点が皇室なら、信仰の頂点が巫女よ。どちらもが国の象徴で、上下関係はないとされてるわ」

「ふうん……じゃあ、俺とも同等なのかな」

「さあ……それはわからないけど」

「そう……いいね、悪くない」

皇太子シルディアは楽しそうに笑った。再び彼の顔に毒気が戻る。

「シルディア、なんて、久しぶりに呼ばれたよ……いつぶりだろう。もう覚えてないや。……うん、でも、悪くない」

北国ラウグリアは、今やほぼ軍に食われてしまっている。と、教えてくれたのはやはり、最西端の変わり者、ケニー老翁であった。彼いわく、今や政治の権限はほぼ軍が持っているというが、それでもまだかつての帝政を崩してはいないのだという。ゆえに、長年に渡って国を治めてきた皇室よりも地位の高い人間は、このラウグリ

アにはいないのだろう。皇太子である彼のことを、シルディアなどと呼ぶ無作法者などいないに違いない。

「シルディア、じゃあ、今度は私から質問させてもらうけど」

カグワは青年の持つ毒にあてられないよう毅然として、彼の名を呼んだ。カグワにとっては、相手が上位であるとか下位であるとか、そんなことはどうでもいいのだ。そんなことより、現状の説明が欲しい。

「私を、西の国から此処まで呼び寄せたのは、貴方の力なの？」

長椅子から身を乗り出すようにして問うと、シルディアは顔を傾けて、微笑んだ。金色の髪がさらりと揺れる。

「そうだよ。巫女は、西の国で最も『力』の強い存在だと聞いていたけど……大したことはなかったね」

カグワは大きくその目を見開いた。

カグワが思うに、もしもカグワが巫女であるなら、巫女は西の国で最も力の強い存在ではない。例えば一の君ネイディーンの方が巫力は強いはずだし、ひょっとしたら國中搜索すればもっと強い力を持つ人間がいるのかもしれない。しかしながら、今日の前にいるこの青年よりも強い力を持つ人間がいるとは思えなかった。時と空間を同時に操り、遠い他国にいる人間を呼び寄せるほどの『力』など、想像も付かない。？？人間業とは思えない。

「……一体、何が目的なの？」

カグワのことを巫女であると知りながら、巫女が西の国では最も強い力を持っていると判断して、その巫女をわざわざ呼び寄せる。宮殿の地下にて、オレークは、「西国がなかなか話し合いに応じてくれないから、強引に呼び寄せた」と言った。しかし本当に話し合いをしたいのなら、政治のことなどこれっぽっちもわからない巫女なんぞより、国務参謀や内大臣を呼び寄せればいい。なのに、わざわざ巫女を選んで呼び寄せた意図は？？何だ？

「さあね……俺にはわからないよ」

シルディアはあっけらかんと答えた。彼は「甘い」と切り捨てた

生姜湯を、すでに飲み干してしまっている。

「そういう難しいことは軍に聞いてくれ」

「私を呼んだのは、貴方でしょう？」

「軍に呼べと言われたからね。??今や皇室はね、木偶なんだよ。自分の意思でなんか動かない。全部軍の言いなりさ」

言って彼が空になったコップを差し出すと、無言でオレークがそれを取りにきた。オレークはなんとも複雑な表情を浮かべながら、コップを片付けた。どうやら、北国ラウグリアが軍に飲み込まれてしまっているというのは、事実らしい。

「だから、その軍の意思に沿って、俺、あんたの力を封じ込めなきゃいけないんだ」

「私の、『力』を……？」

そう、と頷く彼の微笑みは不気味だ。毒気がある。??この毒気は、恐らく彼の持つ『力』だ。相手を自分のペースに巻き込まんとする。

「俺にとっては君の『力』なんてどうってことない。でも、ほとんどの人間は『力』を持たないから、君に勝てない。『力』を利用して君に逃げられては困るらしいんだ」

だから、と言って彼はベッドの上を這うように移動した。そして床の上に降り立って、カグワの前に立つ。線は細いが、すらりと背の高い少年であった。彼はカグワの顔を撫でて、その顎を掴むとくいと上を向けさせた。カグワは自然と彼を見上げる格好となる。

「君の力を封印する。今までできたことができなくなるかもしれないけど、恐れる必要はない。封印を解けば元通りになるし、何より、『力』なんてなくなったら人は生きて行けるんだから」

力、すなわち巫力が使えなくなるということだ。カグワは思わず装束の襟元をきゅっと握り締めた。今までできたこと??先見の技であったり、読心の技であったり、そういった巫力の修行により身につけた技が使えなくなる。とは言え、彼の言うようにそんな力などなくとも、カグワは満足に生きて行けるだろう。だが、しかし。

ふとカグワは目線を逸らして、扉の脇に立つ己の仗身を見つめた。もしも、巫力を封印されたら、彼はどうなるのだろう。彼の獣の心は、カグワの『力』によって封じられている。

「待って！」

今にもカグワの『力』を封印せんと片手を持ち上げたシルディアを、カグワは慌てて制止した。首を横に振って、カグワは「ゆたやが！」と叫ぶ。

「ゆたやが……私の仗身は、私の『力』で獣の性を封じているわ」  
「獣……？」

「彼は、獣人なの。だから、私の『力』を封印してしまったら、ゆたやが……」

「ふうん……？」

完全ではないカグワの言葉を聞いただけで、その意味を理解したらしいシルディアは、カグワから手を離すとゆっくりと今度は扉脇のユタヤの方へと向かって行つた。ユタヤは己に近付いてくるシルディアを見て僅かな驚きを見せたが、それだけだった。微動だにせず、置物のようにその場に立ち尽くす。

何の感情も反映しないその形相を見上げて面白そうに笑ったシルディアは、彼の首に下げられている数珠玉を強く握った。これが彼の獣を封じていると気付いたらしい。ぐいぐいと数珠玉を引くと、ユタヤは怪訝そうな顔をしたが、何も言わなかった。シルディアは「なるほどね」と呟く。

「こうやって封じているわけか……なら、大丈夫。彼の獣も俺の力で封じる」

「え？」

どういうこと、とカグワがその言葉の真意を問うより先に、シルディアの体が動いた。彼は両手のひらでユタヤの数珠玉を握り締めると、くつと何やら力を込める。端から見れば、ただシルディアがユタヤの数珠を軽く引っ張ったとしか思えなかったろう。??しかし、かつてその数珠玉に巫力を込めたカグワにはわかった。数

珠玉が揺れる。そこに込められた己の巫力が解放されていく。そして代わりに、シルディアの『力』で満たされて行くのが、鮮明なほどにわかった。

「うん……これで、問題はない」

ユタヤの数珠玉から手を離れたシルディアはそう呟いて、こちらを振り返った。背筋が粟立つ。彼の絶大な『力』を前に、戦慄が走った。

にっこり微笑んだ彼はゆらゆらとカグワの元へ戻って来て、今度こそとばかりに、彼女の顎を持ち上げ額に手のひらを当てる。もう、抗う術はなかった。抗おうにも抗えない。彼の『力』は、強すぎる。

ぐ、と一瞬額からの圧力を感じた後、それはすぐに終わった。シルディアがふうと息を吐いて、すぐに自分のベッドへと戻る。彼はクッションの上に片手を付くと大きく深呼吸した。たったこれだけの動作で、カグワの『力』は封印されてしまったらしい。

恐る恐る、彼の手のひらの当てられた額を撫でてみたが、体の外側からではよくわからなかった。ただ、なんとなく全身が重い。倦怠感のようなものに覆われていた。

「……これで、もう、君は『力』を使えない」

ベッドの上から、掠れた声がする。彼の方を見やると、それまでも線の細い少年だとは思っていたものの、さらに弱々しく、まるで病人のような顔色をしていた。強大な力の持ち主ではあるが、さすがに二人分の『力』を封じるのは楽ではないらしい。

「その獣人……ユタヤと言ったか。お前もだ。……自由に獣にはなれない」

言われて初めて気付いたように、ユタヤは目を丸くした。彼は己を縛る数珠を握り締めて、それから悲哀に満ちた目でカグワの方を見る。これではカグワのことを護れない、と、彼の考えていることはその目を見ただけで読み取れた。カグワはすでに巫力の技は使えないが、そんなものなくとも、彼の心の内は読み取れた。大丈夫よ、

と彼を安心させるために首を横に振って伝え、ユタヤは目を伏せる。彼も技など使えないが、カグワの心を面白いくらいに読み取ってくれる。

二人のその無言のやり取りを眺めていたシルディアは小首を傾げ、覇気のない目でちらりとユタヤの方を睥睨した。

「あの男は……仗身だと言っていたね。つまり、何、護衛なのか？」

ユタヤを睨んだ瞳で今度はまっすぐとカグワを見つめる。全く覇気のない瞳なのに、不思議な威圧感を感じた。

「そうよ……巫女には必ず護衛として仗身が付くの。そしてそれは獣人と決まっている」

「それで、巫女は獣の性を封じるのか……」

なるほど、と呟いた彼は首の裏をかいて、ころりとベッドの上に横になった。どうやら体は疲弊しきっているようだ。

「俺にとつてのオレークみたいなものかと思ったけど、違うみたいだね。オレークは付き人だからなんでもやってくれるけど……ただの付き人だから縛られることもない」

縛られる、というその言葉の響きが気になった。カグワは彼の獣を封じているだけで縛っているつもりなど毛頭なかったが、結果的には束縛しているようなものなのかもしれない。

「……殿下、今日は、もう」

今までユタヤ同様貝のように押し黙っていたオレークが、此処で初めて口を開いた。彼は疲弊しきったシルディアを案ずるように「これ以上は」という。するとシルディアもそれに反発することなく、ベッドの上に転がったまま頷いた。

「そうだな……さすがに疲れた。??二人を部屋へ案内して」

「はい」

オレークはシルディアのいる寝台に向かって軽く頭を下げて、それから出口の扉へと向かった。巨大な扉を引いて、今度はカグワの方へと頭を下げる。もう部屋を出なくてはならないのだと悟って、

カグワは立ち上がった。ベッドを囲む紗幕が閉じられ、もうシルデ  
ィアの姿は見えない。

「ああ、そうだ、それと、一つ」

部屋から出ようと出口に向かうカグワの背に、紗幕の向こう側か  
ら声がする。弱々しいが、はつきりと響く声だった。

「本当は巫女一人を呼ぶ予定だったから、部屋は一つしか用意して  
いない。欲しいようならもう一部屋用意させるけど、皇室と連立す  
るほど高位な巫女と、その護衛を並べて部屋を用意させることはで  
きない。必然的に距離が離れてしまうけど、どうだろう？」

カグワは眉間に皺を寄せる。何故か、試されているような気がし  
た。

「??部屋は一つでいいわ。西の国では同じ屋根の下にいたから」  
西の国、エウリアの後宮では、確かに二人は同じ三の宮の屋根の  
下にいた。しかし、当然ながらカグワには聖女の部屋があり、ユタ  
ヤには仗身の部屋があったわけで、同じ部屋に共存していたわけ  
ではない。だが、この見知らぬ北の地で離ればなれになるには不安が  
多すぎた。故に、部屋は一つでいいと言い切った。

そんなカグワの決断を知ってか知らずか、「そう」とシルディア  
は端的に答えた。それきり、何も言わなかった。

こちらへ、とオレークがカグワを外へと誘導する。カグワは去り  
際にちらりと皇太子殿下の寝ているであろう寝台を一瞥した。が、  
紗幕に遮られ、何も見えない。カグワはそれきり彼のことを振り返  
らなかった。生まれて初めて巫力を封じられ、倦怠感のみが残った。

## 7、北国の朝食

空を見上げる。雲行きが怪しい。今にも崩れ落ちそうな曇天の下、歩く人間は寒そうに肩を震わせる。

暦でいうと、今はまだ秋である。西国エウリアの後宮では、秋とは涼しく心地の良い季節であった。作物が実り、新鮮な食物に溢れる。甘い果実を口に運びながらひなたぼっこのできる、そんな季節であった。

しかしながら、此処、北国ラウグリアにはそのような心地の良い秋が来ない。王宮の二重に仕切られた窓ガラスは、外から流れ込む寒気を防ぐためのものだという。今はまだ秋だから良いが、これから訪れる長い冬は、分厚い外套を纏ったとて凍え死ぬ。守られた王宮の中は良いが、毎年貧しい民の中からは雪に埋もれて凍死する被害が続出するのだそうだ。

「……だから、北の民は軍人になるのかしら」

冷えきった硝子製の窓に手のひらを乗せて、カグワはぽつりと呟いた。暖炉脇に座っていた仗身が顔をあげて、「はい？」と聞き返してくる。カグワは「大したことじゃないから」と首を振って窓を離れた。自分の触れていたところにくつきりと手形が残った。

カグワとユタヤが時空の狭間を抜けてこの北国に来てから、今日で五日が経とうとしていた。

二人に与えられた部屋は皇太子シルディアの物ほどではないが、恐ろしく絢爛であり広く、女中や小間使いが度々現れ身の回りの世話は全て行ってくれた。「逃げられては困る」という理由で巫力を封じられたにも関わらず、皇家のために造られたというこの皇宮の中であれば自由に動くことを許されており、初めて北国に来た時のように扉に呪いがかけられていることもなかった。

暖炉の火で暖を取り、美味な北の料理をもてなされ、何をしてもいいと許容される。何一つ不自由のない生活であったが、未だにカ



グワは最初にシルディアと出会って少し話をした以外に、一人の北の要人とも話をしていない。「西の国と話し合いをするためにお呼びした」と言ったのはオレークだ。だが、ならばどうして、此処に来て五日も経った今でも、軍人の一人も現れないのだろう。

こんこん、と扉を叩く音がして、続いて「失礼します」と若い少年の声がした。「どうぞ」とカグワの告げた後に部屋に入ってきたのは、小間使いの少年だ。どうやら彼はカグワの世話全般を担当しているらしく、何かとカグワたちの部屋に来ては食事の用意や掃除、その他何でも行ってくれた。

「朝食の用意ができましたので」

少年はそう告げて、銀色のワゴンに積んで来た食事を机に並べ始めた。空は一面曇天であるが、そろそろ朝日も高く昇って行く頃だ。

カグワは小間使いに「ありがとう」と短い謝礼を述べると、彼の作業の邪魔にならないようにと部屋の端に避ける。同じく部屋の端、暖炉の傍にどっかり腰掛けていたユタヤの隣にちょこんと座ると、膝を抱え、慣れた仕草で彼の肩に寄りかかった。ユタヤもユタヤで慣れたもので、今更カグワが全体重をかけてきたとて何も言わない。どっしりとあぐらをかいたまま、小間使いが忙しく働くのを見つめていた。

「……もう、此処にきて、五日になるわね」

体重をユタヤに預けたままの体勢で呟くと、彼は「はい」と小さく頷く。

「エウリアは……西の国は、今頃どうなっているのかしら」

続けて呟いたカグワの言葉に、ユタヤは何も答えなかった。答えられなかったのだろう。なにしろこの皇宮から出られない閉鎖的な状況で、今の二人には情報源がない。

エウリアからこの北の国まで飛ばされたあの日、カグワは巫女選定の儀式の中にいた。儀式は最中であった。まだ終わってはいない。カグワのいなくなった儀式の間は、あの後どうなったのだろうか。

カグワが儀式の中で最後に見たのは、水鏡の中から浮かび上がった謎の光の玉であった。それがカグワの手の中へと落ちて、その次の瞬間にはこの北の国まで飛ばされてしまった。ゆえに、カグワが巫女であるという確証はまだない。本当はあの後まだ別の選定の儀式があつて、今頃カグワのいない西の国では別の聖女が巫女として選ばれているのかもしれない。だとしたら、北の国は西の巫女を呼び出したつもりで何の変哲もないただの少女を呼び出したということになる。西の国では今頃新しい王が起ち、新しい巫女も決まり、祝祭が催されているのかもしれない。誰も、カグワのことなど気にも留めていないのかもしれない。

??それならそれでもいい、とカグワは思った。

カグワがいなくなったことで西の国が混乱に陥っているよりは、ずっといい。変わり者の聖女だとずっと言われて育ったが、他人に迷惑をかけたいと思ひそうしていたわけではなかった。変わり者は自分だけでいい。誰にも迷惑などかけずに自由に生きるのだと。

「??準備が整いましたので、冷めないうちに」

机上に料理を並べ終えた小間使いが言った。物思いにふけっていたカグワは我に返ってユタヤに預けていた体重を起こして立ち上がる。一人で使うには大きすぎる広い机の上に、やはり一人で食べるには多すぎる量の料理が並べられていた。

「ありがとう」

謝礼を言うと、言われた小間使いは照れたように笑った。??彼は普段、皇室の世話をしているのだという。しかし、北ラウグリアの皇室の人間は、小間使いに礼など言わない。ゆえに初めてカグワに謝礼を言われた時にはぼかんとしていた。「ありがとうなんてお礼を頂けたのは初めてです」と。

小間使いの引いてくれた椅子に座ってユタヤの方を見やると、彼も無言で暖炉の脇から立ち上がった。それは、一緒に食べようという合図だ。ユタヤは無言のまま、カグワと対面する椅子に座った。

初めて小間使いがこの部屋に来た時、彼は大層驚いていたもので

あった。なんでも、上からは「部屋には西の巫女が一人いらっしやる」としか伝えられていなかったらしい。そのため彼は、巫女らしき少女の傍に、謎の数珠玉をかけた男が控えていたことに愕然としていた。そして恐らくそれは、皇太子シルディアの配慮だろう。

シルディアは、カグワをこの部屋に案内するに当たって、言った。「本当は巫女一人を呼ぶ予定だったから、部屋は一つしか用意していない」。もしもユタヤに部屋を用意するとなると、位の低い仗身ゆえに巫女や皇室の住まう皇宮には置けないがそれでも良いか、と。しかしカグワはこの見知らぬ場所で彼と離ればなれになることを不安に感じ、部屋は一つでいいと答えた。シルディアはそれを承諾した。??シルディアは、ユタヤのことを他に伝えなかったのだろう。もし伝えてしまったら、皇室のしきたりに倣ってユタヤは部屋から追い出されてしまうから。

なので、今のところカグワの部屋にユタヤがいることは、カグワとシルディアと付き人のオレーク、そしてこの小間使いしか知らない。それでもきちんと二人分以上の料理を持って来てくれるのは、この小間使いの心配りだ。

「お食事が終わりましたら、また食器を片付けに参りますので」  
小間使いは言って、頭を下げた。そして慣例通り去っていくとする彼に、カグワは「待って」と言って声をかける。「はい？」と振り返ったその顔はとても純朴だ。??カグワはまだ出会って五日しか経っていないこの若い小間使いをとてども気に入っていた。彼は屈託なくいろいろなことを話してくれる。だが、皇室のしきたりを遵守して、仕事が終わるとすぐに帰ってしまうのでとても残念に思っていたのだ。

ゆえに、

「せっかくなら、一緒に朝食をとっていかない？」

少しでも話をしようではないかと思い、誘ってみた。すると、小間使いの目がみるみるうちに見開かれていく。彼は慌てて首を横に振った。

「……め、滅相もございません！ わたくしごとき小間使いが、巫女様と同座するなど……！」

これも、北ラウグリア国の皇室での慣習なのだろう。皇室の人間と小間使いの間には確かな位の差があって、それは同席すら許されないほど過大なものなのである。

とは言え、考えてもみれば西エウリア国でも、聖女たちとその女中たちは決して同じ席で食事などしなかった。しないことが慣例とされていた。それは女中だけでなく当然仗身にも言えることで、カグワの他に、気軽に自分の仗身や女中と食事をしたり会話をしたり、身分を越えた接し方をする聖女はいなかった。なので、カグワが異端なのだと言ってしまうえばそれだけのことである。此処がエウリアであれば無理を通して同席させるのであるが、生憎此処は他国だ。あまり無理強いはいくれないなと思い直して、カグワは俯いた。

「そう……残念だわ」

身分など気にせずに、多勢で囲む食卓の方が幾分にも楽しいと、カグワはそう思っているのだが。カグワが楽しくとも、気を遣いながらとる食事は彼らにとっては美味しくないのかもしれない。ならば、やはり無理強いしても仕方がない。

「わたくしどもは、朝早くから仕事がありますから、その前に朝食を取っておりますし」

カグワの残念そうな顔を見て、小間使いは困ったように付け足した。カグワは「そっか」と言っただけで笑う。あまり困らせてしまったらそれはそれで可哀想だ。

まあしょうがないなと考え直して「おかしなことを言ってごめんなさい」とカグワは小間使いに謝ろうとすると、彼女が口を開くより先に、その言葉を遮ったのは対角に座る仗身であった。

「……？ 食事は取らずとも、一緒に茶くらい飲んで行けばいいだろう」

その低い声色に、小間使いは驚いたように身を震わせる。そういえば、小間使いのいる前でユタヤがこうもすっかり口を開いたのは

初めてであった。ユタヤはカグワと二人きりの時こそ積極的に声を発するが、そうでない時は発言を控えて、必要な時以外は口を出さない。

「身分がどうか言うのなら、私がこうして巫女君と同席していることも妙だ。??折角、巫女君が会食をご所望なのだ。仕事がたてこんでいるならまだしも、我々が食べ終わるのを待つだけなら座っていい」

「はあ……」

小間使いは目をぱちくりさせた。謎の「仗身」と名乗る男が突然口を開いたかと思えば随分と強引な誘いをしてくるのだから、驚いて当然だろう。

そしてそこまで言われたら断るわけにもいかない小間使いは、空いていた椅子をひいてちょこんと座ると、「では、お言葉に甘えて」と戸惑うように笑った。その様子を見て、カグワは思わず噴き出す。

「そんな無理矢理付き合わせたら可哀想よ、ゆたやあ。彼もひよつとしたら休みたいかもしれないし」

もとはと言えば自分が誘ったわけであるが、ユタヤの強引さに思わず同情した。「ねえ?」と声をかけると小間使いは「いえ、大丈夫です」と首を振る。向かいに座るユタヤは「しかし……」と言いよどんでしゅんとした。彼としてはカグワを思っていたことだったのだろう。昔からカグワが出会った全ての人々と親しくしたがることは彼もよく知っている。

そんなユタヤと笑っているカグワを見比べて、小間使いは両者を気遣うように「まあ」と口を開いた。

「私のお仕事は、巫女君をおもてなしすることですから、私などが同座してご気分を害されることがないのであれば、むしろ本望です。??どうぞ、料理の冷めぬうちに召し上がってくださいまし」

少年は、とても大人びた配慮をする。カグワは「そうね」と笑った。せつかく彼の用意してくれた料理が冷たくなってしまっ

つたいない。

カグワは銀のフォークを握り締めて皇室の物と同じだという豪勢な料理を食べ始めた。それを見て、ユタヤもほっとしたようにフォークを手取る。にこと笑った小間使いの少年は、二人の邪魔にならないようにとユタヤに言われた通り自分の分のお茶を入れた。そういう細やかな気遣いから、さすがに皇室の小間使いだと思う。

「ところで、貴方の名前を聞いてなかったわね。お名前は？」

今まで彼とは本当に最低限の世間話しかしなかったために、まだ名前すら聞いていなかった。聞かれた少年は、嬉しそうに微笑んだ。

「ユーリ・マルコフと申します。よろしくおねがいします」

ユーリはカグワやユタヤの食事の速さに合わせてゆっくりとカッパを傾けながら、カグワの話に付き合ってくれた。西の国の後宮の中で囲われて育ったカグワにはわからないこと、聞きたいことが山のようにあった。恐らく外の世界で育ったユーリにとってはあまりにも当たり前すぎて、答えるのも面倒な質問ばかりであったに違いない。しかしユーリは嫌な顔一つせずに、カグワの会話に付き合ってくれた。

「ユーリはいつからこの宮殿で働いているの？」

「生まれた時から……生まれた時より働いていたわけではありませんが、私は生まれた時から皇家のお世話をするために育てられました。ラウグリアでは、皇室付きの小間使いは代々世襲と決まっているのです。ですので、私の父もそのまた父も、ずっと小間使いをしております」

「ふうん……じゃあ宮殿の中にはユーリみたいな小間使いがたくさんいるのね」

「そうですね……ですが、皇家の小間使いと一口に言いまして、

その役割は様々です。例えば私は、カグワ様のような皇家の賓客をもてなすことが役割です。他にも食事をつくるために厨房にいる者もおりますし、宮殿の掃除を専門にする者もおります。そして出世すれば、皇家の付き人になることも」

「付き人……？　じゃあ、オレークは出世したっていうこと？」

カグワは皇太子シルディアの付き人をしているという青年を思い浮かべた。まだ若いように見えたが、皇太子の付き人をしているということはかなりの出世頭なのではないだろうか。

「はい。オレーク・ナイザーはまさに一番の出世頭ですね。もともとは私と同じ賓客のおもてなしをしていたんです」

「へえ。なら、オレークとは知り合い？」

「知り合いも何も、私にとっては兄貴分でした。突然の出世に驚愕していたことを、今でもよく覚えております」

ふうん、と呟いてカグワは白いロールパンを口に含んだ。だから、ユーリが自分の小間使いとして選ばれたのかもしれないと、カグワはぼんやり思った。皇太子の付き人であるオレークの弟分ということだ。例えばカグワが部屋に自分の仗身を隠して置いておいたとしても、目を瞑ってくれるわけである。

「皇太子殿下の付き人だものね……皇太子殿下は、皇家の中でもやつぱり、地位の高い方なのでしょう？」

「それはもちろん。……本来は皇帝陛下が君主としてこの国を統治するわけですが、現在ラウグリアの皇帝陛下は病に臥せておりますから……実際、統治しておられるのはその第一子であるシルディア殿下です」

「まあ、そうなの？　じゃあ、私はシルディアと話し合いをすればいいのかしら？」

「話し合い？」

「ええ、そう。突然私がラウグリアに呼ばれたのは、西国の要人と話し合いがしたいからだって、聞いたから……今、実権を握ってい

るのはシルディアなんでしょう？」

「ああ、なるほど……。では恐らくそれは、殿下ではなく、將軍ではないかと」

「將軍？」

「はい。確かに国土を統治するのは皇室の役目ですが、今ラウグリアの国政の実権を握っているのは軍です。その長となるのが、將軍ですから」

ふわふわに焼かれた卵を食べながら、カグワは西国でケニー老翁に聞いた話を思い出した。??ラウグリアは今や、軍隊に食われてしまっている。

「聞いたことがあるわ……。昔、ラウグリアは貴族の支配する国だったんだって。今は軍人の支配下だけれど」

「そうですね。今から二十年近く昔のことです。軍が力を持ち出し、それから、ラウグリアはずっと戦を続けております。東の国を占拠せんとして」

「戦……」

カグワは一度も戦というものを実際に目で見たことがない。ただ、それはたくさん罪のない人々の命を奪うそれはそれは凄惨な行為なのだ、知識のみで知っていた。もしも聖女に選ばれることがなく、もしも難民として西の国へ国境を越えることもなく、もしも今尚東の国にいたならば、カグワもまた、その戦の業火に焼かれていたのかもしれない。カグワは遠い東の地を想った。??それから、今やカグワにとって紛いなき故郷である西の国を想う。

「やっぱり……北ラウグリアは、西エウリア国とも戦をするつもりなのかしら」

とても不吉な予感が走った。

カグワが突然時空の狭間を突き抜けてこの北の国へ呼ばれた真意は、一体何なのだろう。本当に巫女と話し合いをしたかったというだけならば、その旨を西国に伝えればいい。わざわざこのような強引な手段を取る必要などなかったのではないか。それに、話し合い



をしたいと言いながら、カグワはこの五日間この部屋から出ることを  
さえないではないか。??北国の意図がわからない。

そんなカグワの心を読み取ったのか、ユーリは困り果てたように  
目線を伏せた。

「軍の考えることは……私にはわかって術ありません。ただ……」

少年は一度言葉を切って、やがて強い眼差しで窓の外を睨みつけ  
た。その目の先には外の景色ではない、何か別のものが映っている。

「軍は軍のみの力ではなにも成し遂げることができません。やつら  
は、皇太子殿下の『力』を利用しているのです。??やつらは、殿  
下がいなければ、何もできない」

『力』、とカグワは小さく繰り返した。

確かに、シルディアの『力』は絶大であった。カグワを西の地か  
ら此処まで召還したこともそうだ。カグワの巫力や、ユタヤの獣の  
心を同時に封印していることもそうだ。ここまで圧倒的な『力』の  
強さを見せつけられると、今まで自分が何年も行ってきた巫力の修  
行とは一体何だったのだろうかと思ってしまう。きっとこれから一  
生巫力の修行を続けたとて、彼には到底追いつけまい。

そんなことを思いながらカグワがフルーツにフォークを伸ばした  
のと、金の装飾の施された立派な扉が外側からこんこんとノックさ  
れたのは、ほぼ同時であった。

「??オレークです。巫女君、失礼してもよろしいでしょうか」

噂をすればなんとやら、である。シルディアと会ったのも五日前  
のあの一度きりならば、彼の付き人であるオレークとも五日ぶりで  
あった。

さほど昔のことではないけれども、久しぶりだなと思いながらカ  
グワは「どうぞ」と軽く声をかけた。隣に座っていたユーリが何故  
だかとても焦っている。オレークは兄貴分だとその親しさを告白し  
たわりに、どうして彼に怯えるような素振りを見せるのだろうかと

カグワが不思議に思った時にはすでに、「失礼します」という声とともにオレークが扉を開いて中に入って来ていた。

相変わらずの茶色の癖っ毛を持つ彼は、「巫女君」とまずカグワに声をかけてから、そこにいるユーリに気付いたように目を丸くした。

「ユーリ、お前……何をしている？」

「え、あ、の、これは、その……」

オレークを見上げたまま言葉に困窮しているユーリと、そんなユーリを険しい顔で睨みつけるオレークを見て、カグワはようやく理解した。??ここ北ラウグリアでは、皇家の人間と小間使いが同じ机に付くことなど有り得ないのだ。そして巫女は皇家と同位なのである。

「違うのよ、オレーク。私が一緒にお茶でもどう？　って誘ったの」

こんなことでユーリが叱られてはあまりにも可哀想だと、カグワは彼のことを庇った。それでも「しかし」と険しい顔をするオレークは、生粋の皇室に使える小間使いなのだろう。小間使いは世襲だと言うからには、オレークも生まれた時から身分をわきまえろと叩き込まれて育ったに違いない。カグワは重い空気を払拭するために肩を竦めた。

「ユーリは断ったのよ。でもゆたやがね、巫女と食べる朝食はまずいともいえるのか無礼者って脅すから、仕方なく座ってるの。許してあげて？」

「……私はそこまで申ししておりません」

人前では滅多にカグワの言葉に口を挟まないユタヤが、ぶすつとした顔でぼやいた。堪らず、ユーリが嘔き出す。オレークはますます険しい顔で「ユーリ」と諫めた。カグワはこの場を和ませようと思ったのだが、逆効果だったようである。

「オレーク、ごめんなさいってば」

ここは素直に謝っておこうとユーリの兄貴分だというその青年に

向かって手のひらを組んでみせると、オレークはたちまち困惑した表情を浮かべた。おそらく北国の皇家には、目下の人間に対してこもぎつくばらんに話す者などいないのだろう。

「……まあ、西には西の文化がありましょう。少々北のしきたりにこだわらずでいたようです。私の方こそ取り乱してしまい申し訳ございません」

オレークはカグワのぎつくばらんさを西の文化と理解したらしく、軽く頭を下げた。これで食事の席に同座したユーリも叱られることはあるまい。実のところは西の国でもカグワ以外の聖女であれば小間使いが同座など考えられないのであるが、まあそれは黙っておこう。

「話が逸れてしまった……。巫女君、本題でございますが」

オレークは思い出したようにきりと姿勢をただと、食卓に座っているカグワの傍に膝をついて頭を下げた。徹底して礼儀を尽くす男である。

「シルディア殿下が巫女君とお話をしたいと申しております。今すぐというわけではございませんが、今日中にお時間を頂ければと思います」

「そんなの、いつでも構わないけど……」

と、言うよりも、他にやることもない。毎日部屋の中でぼんやりと西の国を想っているだけなのだから、時間などいくらでも有り余っているというものだ。

「では、お食事が終わりました、準備が整いましたら、そのユーリを使って私めにご連絡ください」

お食事中に失礼致しました、と深々頭を下げて、オレークは要件だけ告げると早々に部屋を出て行った。カグワはその後ろ姿を目で追う。彼はこれから主である皇太子シルディアの元へ戻るのだろうか。その行き先はわからない。

なんにせよ、これedyやく「話し合い」とやらができる少々安堵した。ユーリは「話し合いを求めているのは皇太子殿下ではな

く將軍だ」と言っただけでも、カグワは今のところ將軍はおろか軍人の一人にも会っていない。会うのは皇室の人間とその小間使いばかりだ。

早く用事を済ませて西の国に帰ることができれば良い。西の国がどうなっているのか、途中で抜け出してしまった巫女選定の儀式がどうなったのか、気になることは山ほどあった。

少女は依然、自分の置かれた状況が緊迫していることに、気付いていない。

## 8、人質の巫女

食事が終わると、ユーリが机の上を綺麗に片付け銀のトレーを使って食器類を全て持ち帰ってくれた。

「お話できて楽しかったです」と社交辞令かもしれない感想を述べてにこりと笑った彼が部屋を去り、オレークに連絡をしてくれたかなと思う頃になって、数人の女中が部屋へやってきた。なんでも皇太子殿下に謁見するからということで、正装のドレスを用意してくれたらしい。北国の正装服は、西国のそれと比べて分厚く暖かったが、とても重かった。

その後再びユーリが戻って来て、きちんとカグワの準備が整ったことを確認すると、ようやくオレークが現れた。そして、シルディア殿下に会いに行くという。皇太子殿下に謁見するには、本来なかなか面倒な準備が必要らしい。

オレークに連れられ、カグワとユタヤはひたすら階段を下った。もともと二人にあてがわれた部屋は最上階にあったため、どこに行くにしても下らなくてはならない。

冷たい石塔の階段をひたすら下った後、二人は中庭を通り抜ける外の通路へと案内された。

「一瞬ですが外へ出ますゆえ……寒気にお気をつけて」

静かなオレークの忠告通り、外の空気は本当に冷たかった。西国で味わう真冬と同等の寒さではないかと思う。思わずカグワが身を震わせると、ユタヤが気遣うように己の羽織っていたマントを差し出した。「一瞬だから大丈夫」と断るが、彼は無言でカグワにそのマントを被せた。

そんな二人のやり取りを見て、くすと笑ったのは前を歩くオレークである。彼は霜柱の立った地面をしゃりしゃりと踏みしめながら、前を向いた。

「今はまだ秋ですから、さほど大した寒さではありません。……こ

れから訪れる冬は、こんなものではないですよ」

そう言って前を歩くオレークは、大した装備もしていないのに毅然として、寒さを感じさせない。この程度の寒さなどということもないと言わんばかりに、堂々としている。カグワはユタヤのくれたマントの前をたぐりよせてしつかりと防寒しながら、冷たく灰色に染まった空を見上げた。

「……北国ならではの苦労があるわね」

「……いかにも」

「だから、気候の暖かい東国と戦をしたの？」

直裁すぎる問いかけをすると、オレークは俄には何も答えなかった。カグワも返答を期待して投げかけたわけではない。ただ、この冷たい空気の中に晒されて、戦火にも晒される民を哀れに思っただけのことである。

オレークはそんなカグワの内情を知ってか知らずか、しばらくその問いかけについて考え込んだ後、小さく呟いた。

「私どもには……軍の考えることはわかりかねます」

それは先ほど朝食の席でユーリと話をしていた際にも聞いた言葉だ。彼らは揃って言葉を濁す。皇室の中には軍の意図など本当に読めないのかもしれないし、読めても本望ではないのかもしれない。あるいは、単に言葉を濁しているのか、カグワには判断し難いところであるが。

「今、この国は軍が仕切っているのだものね。……私、てっきり謁見するなら将軍が相手なのだと思っていたわ」

「将軍が？」

「さっきユーリに聞いたの。西国に話し合いを求めたのは皇室ではなくて軍だろう、って。だから謁見するならシルディアじゃなくて将軍が相手だって」

「……ユーリはそんなことまで話したのですか」

言ってオレークが渋い顔をする。それを見て、しまった、とカグワは口を押さえた。ひょっとしてこれは聞いてはいけないことだっ

たのだろうか。少女は「私が聞いたのよ」と慌てて付け足そうと口を開いたが、それより先にオレークが口を開いたために言葉を飲み込む。

「恐らく……ユーリの言う通りでしょう」

「え？」

飲み込んだ言葉の代わりに、間の抜けた声が出た。前を歩く男は振り返らないため、その表情が見えない。ただ淡々と寒空の下を進み、中庭を通り抜けた先にある石造りの建物の扉を開いた。きい、と錆びた金属の音がする。

「シルディア殿下とのご面会という口実で、巫女君をお呼びしましたが……謁見の場には、将軍も列席するものと思われます」

「……そうなの？」

どうぞ、と開いた扉を押さえてオレークが建物の中へと誘導してくれるので、石段を上がって中へと足を踏み入れた。途端、温かな空気に包まれる。室内外の温度差が激しい。

「巫女君をこうして北国まで呼びしたこと自体そもそも殿下のお考えではない。軍からの要望ですから……巫女君にお話があるのも、殿下ではなく、軍の方でしょう」

「なら、最初から将軍の謁見だと言えばいいのに。どうしてシルディアを挟むのよ」

「それは、巫女君の御力を恐れてのことではないかと」

「私の、力……？」

「西国では巫力と呼ぶのでしたか……将軍も微力ながら『力』の持ち主ではあります。が、巫女君には及ぶべくもない。そこで、巫女様の『力』の干渉を防ぐために、間に殿下を置いて面会するつもりではないかと」

「将軍も『力』を持っているの？」

「ええ……。ここ北ラウグリアでは、軍の司令部のほとんどは多かれ少なかれ『力』を保持しています」

「へえ……。だったら軍の司令部だけで面会すればいいのにね。だ

って私は今、巫力を封じられているんだもの。どう考えたって、司令部全員で来られたら勝てっこないわよ」

「それは……どうでしょう。巫女君は今、『力』を封じられているとは言え、それはすなわち『力』を発揮して使えない状態にしているだけのこと。保持していることに変わりはありません。強大な『力』を持つ人間は、『力』ゆえに周囲に影響を及ぼす。……周りの凡人どもは、『力』にあてられてしまうのです」

「あてられる？ 毒みたいな言い方をするのね」

「あながち間違いではないでしょう。……かくいう私も、殿下の力にあてられっぱなしだ」

言って、オレークはふんと自嘲するように笑う。シルディアの顔を思い浮かべて、カグワもなんとなく「『力』にあてられる」という意味がわかったような気がした。

シルディアと出会って話をした時、カグワは何度も背筋がぞつとするような、妙な「毒気」を覚えた。彼が喋るたび、彼が表情を変えらるたび、ぞつとする。なのに目が離せず、言葉に聞き入ってしまうのだ。カグワは毅然と姿勢を正してその毒気に太刀打ちせんと気張ったが、これで全く巫力を持たない凡人であったなら、気張ることもできずに飲み込まれていたのかもしれない。とは言え、シルディアと同じく『力』を持つカグワにも、あんな「毒気」があるとはとても思えないのだが。

カグワは前を歩くすらりと背の高いその長身を見上げた。まっすぐと上品なその姿勢にも現れているように、この男は礼儀正しく律儀だ。シルディア殿下の付き人に任命されてから、ずっと彼に尽くしてきたのだろう。『力』にあてられても致し方ないというやつだ。

「オレークは……」

「はい」

「何年くらい、シルディアの付き人をしているの？」

「……は」



「最初からずっとシルディアの付き人をしていたわけじゃないんでしょう？ 殿下の付き人に任命された時はそれはそれは驚愕していたって、ユーリが……」

「ユーリが？」

あ、とカグワは口を噤む。また余計なことを言ってしまっただろうか。

「私が根掘り葉掘り聞いたから。ユーリも無視するわけにはいかないからって教えてくれただけで……！」

カグワが慌てて補足し彼のことを庇うと、オレークはわずかにこちらを振り向いて、柔らかい微笑みを浮かべた。くす、とまるで子供を慈しむような笑いである。

「別段……ユーリを怒っているわけではありませんよ。どうぞご安心を」

「そうなの……？」

「ええ……ただ、巫女君は変わっておられるなと」

「……よく言われるわ」

変わり者の聖女、とは後宮でのカグワの呼び名であった。自身では変わっているつもりはなくとも、周囲はそう言う。西国でもそうなら、北国でも同じだ。

「私はかれこれ三年ほど、殿下の付き人、すなわち世話役をしています。短くとも長い月日を殿下とともに過ごしてまいりました。

西国一の『力』の使い手、巫女がくると聞いて……私は、てっきり殿下のような御仁が来られるのだと思っておりました。ですが……」

言いながら、オレークは白磁の階段をのぼる。きらびやかな内装の先に、巨大な扉が見えた。扉の脇には兵士が二人、その中を警備するように立っている。?? 恐らくは、あの先が謁見の間だ。

「ですが、巫女君の『力』は、毒というよりも……まるで日光のようだ。眩しさに目がくらみ、その暖かさに油断して服もなにもかも脱ぎ捨てて裸になってしまおうような……実のところは、毒よりも恐

ろしいかもしれない、不思議な『力』であります」

「……」

ありがたいと喜ばいいのか、心外だと怒ればいいのか、どうしているのかわからず、カグワは口を閉ざした。

そうこうしている間に、謁見の間の入り口と思われる扉の前へと辿り着き、オレークがくるとこちらを振り返って深々と頭を下げた。

「こちらに??殿下がお待ちです」

言われて足を止め、カグワはその高い扉を見上げた。重々しい風体のその先に、シルディアと将軍がいる。自分が今、西の国を背負っているのだと思うと、緊張よりも寒気がした。それがこの北国の冷気が原因でないことは、明確である。

「巫女以外は中に入る事は許可されておりません」とオレークに言われ、入り口の扉の前でユタヤとは分かれた。この知らぬ土地で彼を一人にすることをカグワは恐れていたが、オレークと一緒に待機するなら大丈夫だろうと根拠もなく安心した。最初にユタヤがカグワの仗身であると、獣人であると気付いたのはオレークだ。彼なら、ユタヤを獣人であるという理由で差別し害することもないだろうと思った。ユタヤはユタヤでカグワを一人にすることを案じているようであったが、「私は大丈夫よ」と微笑んで、彼に借りたマントを返すと、さすがに謁見の間にまで着いていくことは憚られたのか、頷いた。彼と分かれて開いたその扉の先は、外観からの期待を裏切らず、豪勢なものであった。

広く縦に長いこの部屋は、普段はダンスホールにでも使われているのだろうかというほどに天井が高く、音が反響する。天窓からきらりと冬の日差しが差し込み、白い床を照らした。その白い床の続く先に、一段高い場所がある。??玉座だ。金色に光る巨大な玉座に、一人の少年が腰掛けていた。

「エウリア君主国の巫女君……どうぞ玉座の前へ」

そう言ったのは、少年の横、玉座の横に控えた中年の男である。玉座の隣にいたためであろう、帯刀はしていないが、そのがっしりとした体格から軍人であることが予想できた。恐らくきつとこの中年の男が、將軍だ。

カグワは將軍と思われる男の言葉に従って、長く玉座へと続く白の床の上を、まっすぐ歩いて行った。一歩歩くたびに、履いている靴が床とぶつかりコツコツ音を立てる。音は高い天井へと反響し、謁見の間に響き渡った。

しかし言われた通りに玉座の前までやってきて、そこに座る少年と、控える將軍らしき男の顔を見て、カグワは次に何をすればいいのかわからなかった。巫女の予備軍として育てられた聖女たちには、他国の君主に対する礼儀作法など教えられなかったのである。巫女はエウリアの中では最も神に近い存在だ。誰かに謁見されることはあっても、誰かに謁見することなどない。

そんなカグワの動揺を見抜いて、「作法などよい」と言ったのは、玉座に座った少年であった。

「余と巫女は同位じゃ。本来、玉座から見下ろすものでもない。が、今回はこれしか用意できなかった。非礼を許してほしい」

カグワは大きく目を見開いて、その少年を見つめた。

これが、あのベッドの上に寝転がっていた色素の薄いシルディアだろうか。あの時は寝間着を着ていて、今は正装をしているから、風体からして雰囲気が違うのかもしれない。だが、それにしてもあまりにも違う。別人のようだ。

「余は、ラウグリア帝国の君主である、セベプ・ラウグリア・オグロミニイ・エルヴァ・ダル・ラプソディアの第一子、シルディアという」

その長過ぎる名前にカグワは目をぱちくりさせる。そういえば初めて会った時、シルディアは「長過ぎて覚えられないだろうから名乗らない」と言った。確かに名乗られたところで、到底覚えられそ

うにはなかった。

「そして、そこに控えるのが我が国の兵卒をまとめる、スターリン將軍じゃ」

脇に控えていた中年の男は、やはり將軍であつた。彼は膝をついたままカグワの方を向いて、深々と叩頭した。

「今回の要件は、全てスターリンの方から説明する。??スターリン」

叩頭したまま、「は」と短く答えて顔をあげたその男は、いかにも武將らしい屈強な体と、屈強な体に見合つた厳つい顔をしていた。しかし、それでもシルディアほどの覇氣が感じられないのは、保有する『力』の差なのだろう。シルディアはまだ二十にも満たない若い少年でありながら、武將になど負けない強い覇氣を放っていた。

「??まずは、巫女君においては、このような極寒の北の地まではるばる御足労頂いたことに御礼申し上げます」

スターリン將軍は渋い声で言い放ち、再び頭を下げた。カグワはそれを見下ろして首を竦める。

「御足労っていうか……ほとんど強制連行だったけれどもね」

カグワには北国行きを引き受けた覚えなどない。天災かなにかと混乱の生じる中で旋風に乗って飛ばされてきたただけだ。

「手荒な手段を取ったことは誠に申し訳なく存じております。ですが、こうでもしなくては、エウリアの国とは対等に話もできそうになかったのです」

「それは一体……どういうこと？」

西の国と話し合いがたくてカグワを呼んだ、と、カグワは此処に来てから何度も聞かされた。しかし、では一体何を話し合えばいいのか、具体的な内容については何も聞かされていない。それどころか、カグワはどうして北の国が西エウリアと話し合いをしたがつているのかさえ知らないのだ。自国、西エウリア君主国で何が起きているのか、カグワは自国の国情さえ知らない。それなのに何を話し合えばいいのだろう。

「巫女君は、西エウリアから北ラウグリアへ、一通の文書が届けられたことはご存知ですか？」

將軍に尋ねられ、カグワは首を傾げた。カグワの知っている後宮の外の情報は、最西端の変わり者、ケニー老翁から仕入れたもののみだ。その中に、文書の話はなかった。

「先月末のことです。西エウリア国の君主が身まかったと、その文書には書いてありました」

「ええ、そうね……先月末、確かに国王がお亡くなりになったわ」カグワは日にちを数えて遡り、まだ後宮の中にいた平和だった頃のことを思い起こした。

その知らせは突然であった。国王が崩御したという知らせとともに、後宮に走り巡ったのは、「次期王の即位に合わせて、次期巫女が選定される」という知らせである。聖女たちにとっては、己の国がどうなっているのかわからないけれどもよかったのだ。彼女たちにとっては己の国事など二の次であり、己こそが巫女に選ばれんとして奔走するばかりの日々であった。

「さらに文書には、こうありました。エウリアの国主の葬儀を大々的に行うから、各国から国の要人を参列させるようにと。この各国とは、北国、東国、南国のそれぞれ三つのことを指すようです」

「ええ……そうね」

「しかしながら、東国はすでに我がラウグリア国の支配下にありません。そこで我らは文書を西へ返しました。東国はすでに我が国の領土である。ゆえに国の要人を参列させるなら、北と東は一つの国としてまとめ、要人も一人で良いのではないのかと」

「支配下……」

カグワはそう呟いて、眉根を寄せた。

北ラウグリア国が、東国の領土を占領するために十年もの戦を続けているという話は、後宮の中にいるカグワでも知っていた。そして最近、北国が戦に勝利し、その領土を手に入れたのだと、ケニー老翁から聞いたばかりだ。

「だが、西国はそれに対して、まだ西国としては東国を北ラウグリア帝国の一部とは認めていないと返事をされた」

「だって……領土は支配下に置いたとしても、まだ東国には国家があるでしょう。それとも東国の国家は滅亡してしまったの？」

「確かに、国家は滅亡してはおりません。しかし、それは北ラウグリア国の君主の温情によって生かされているようなものです。すなわち、国家権力機能としては死んだも同然。従って、今現在東の領土を統治しているのは北ラウグリア国であるといえます」

カグワはますます眉根を寄せた。カグワは戦を経験したことがないためよくわからないが、戦において勝利国は、領土を食らうのみでなくその国の権力も何もかも奪ってしまうらしい。もとより難民に溢れていた東国を思うと、ますます哀れであった。

「文書のやり取りのみでは、この事実を上手く西国へ伝えることができない。そこで、西国の要人にお越し頂こうと我々は考えました」

「……それで、私が北国に呼び出されたわけね」

「その通りでございます」

「じゃあ、私はそのことを事実として受け止めて、西国に戻って新王と政府に伝えればいいのかしら？　それで私のお役目は終わり？」

「そう事を急ぎなさいますな……まだ巫女君にお帰り頂くわけにはまいりません」

「……どうして？」

「今、西の国に新しい文書を届けている最中でありませう。？？西国の新しい巫女君は今、北国にいる。西国から良い返事があれば、お返しすると」

「……なんですって？」

カグワは瞠目した。

良い返事があれば、お返しする。それはすなわち、西の国が「承知」と言わなければ、巫女がどうなっても知らないぞという脅し文

句である。カグワはようやく、自分がこの場所に巫力さえ奪われ拘束されている意味を知った。

「?? 私は、人質なのね」

「滅相もない。西国の要人として大切にお預かりしております」

「この北の地まで招いたのではなくて、誘拐したのでしょ? わざわざ巫女選定の儀が終わるのを待つて? 巫女が選定されたその瞬間、最も警備の薄いその瞬間を狙って、さらったのよ。西国において巫女がどれだけ重要視されているのか知りながら」

西国は君主国でありながら、宗教国家であった。政治の頂点に立つのが国王なら、宗教の頂点に立つのが巫女だ。巫女は神の代弁者であった。政治の力では解決できない心の救いを、西の民は巫女に求めている。

カグワは納得した。何故、国政もなにもわからない巫女になったばかりの自分などを談合にと招待したのか。国政などわからない方が都合良いのだ。余計な知恵を働かせない、だが国家の重要人物である人間が必要だった。

「そう、息を巻かれますな」

巫力も持たぬ、仗身も傍にいないカグワには、何の力もない。スターリン將軍は少しの恐れも見せずに、堂々としていた。

「巫女君には何の不自由もないよう計りますゆえ……なにかあれば、皇室付きの小間使いどもにお声をおかけください。彼らはよく訓練されておりますから、巫女君の要望をなんでも叶えてさしあげるでしょう」

「そんなの……いらないわ。宮殿の敷地からは一步も出さなくせに、なにが不自由もないように計られます、よ」

「宮殿の外は危険です。中におられることが最も御身のためかと存じ上げます」

「危険かどうかは私が自分で判断するわ」

カグワは憤慨した。今ここで、スターリン將軍に怒りをぶつけたとて何の解決策にもならないことは理解している。しかしそんな冷

静な自分がどこかにいる一方で、押さえきれない怒りを抱える自分がいることも事実である。

息巻くカグワと、強気な將軍の両者を見比べて、静かに声を発したのは、玉座に座る皇太子殿下であった。

「???スターリン、話はそれで終わりか?」

皇太子シルディアの声は明瞭としていてよく通る。広い謁見の間中に響き渡った。

「はい、以上であります」

將軍が頭を下げると、うん、とシルディアは頷く。そして、まっすぐカグワを見つめた。

「ならば、もうこれで終わりにしよう。???余は少々疲れた」

まだ話は終わっていない、と彼に反論しようとして、カグワは開いた口を中途半端に止めた。???突然、頭の中に、シルディアの声が反響したのである。

???あとで、俺の部屋に来てくれ。

え、とカグワは一瞬呆気に取られた。

空気を伝わって声が耳に届くのではない。直接頭の中へと語りかけるこの技を、カグワもよく知っている。感応の技、と言うのだ。他の誰にも聞かれぬように、特定の誰かにのみ言葉を伝えたい時に使う。巫力の修行の中で、カグワも何度か挑戦したことがあった。

しかし、何故今自分は巫力を封印されているのに、彼の声を聞き取ることができたのだろうかと考えて、すぐに釈然とする。カグワの巫力を封じているのは他でもないシルディアだ。シルディアの声なら聞き取れるだろう。

わざわざ感応の技を使って声を伝えて来たシルディアは、なにごともしなかったかのように平然としていた。きっと、將軍に聞かれてはまずいことなのだろうと判断し、カグワも平然を装う。

「精々見てらっしゃい……貴方たちのやったことは、ただの人さら



いなんだから！」

負け惜しみとも取れる非難の声を浴びせて、カグワは踵を返した。

謁見というから身構えて来たものの、話はあっというまに終わってしまった。要は、カグワは人質だから西から返事があるまで大人しくしている、というそれだけの話である。改まってするような話でもないように思えた。

縦に長い謁見の間をまっすぐ歩いて来た時とは逆に出口を目指して進み、振り返らない。玉座の方を振り返ることは決してしなかったが、扉を開いて謁見の間を去ろうとする間際に、再び感応の技による声が頭の中に響いた。

??? 一度君もきたことがあったと思う。俺の寝室だ。あそこなら、軍の警備はいないから、ユーリかオレークに言って、来てくれ。

巫力を封印された状態で、彼へ言葉を送ることは難しく思えたので、カグワは大きな音をたてて扉をしめることで、彼に了承の意を伝えた。

## 9、北国の皇太子シルディア

結局、カグワが皇太子シルディアの部屋を訪れたのは、その日の夕方頃になってからのことであつた。

謁見の間を出た後、再びオレークに連れられてもといいた皇宮の入り口までは案内してもらつたのであるが、そこに至るまでは軍人がそこら中を徘徊していたため、迂闊に「シルディアの部屋に連れて行って」とは言えなかつた。シルディアは、「軍の目のない場所で」カグワと会うことを望んでいた。

そんなわけで、自分に与えられた部屋へと戻つたカグワは、しばしベッドの上で膝を抱えてぼんやりと虚空を見つめていた。謁見を通じて、ようやく己の置かれている立場がわかつたものの、わかつただけで何一つ解決策は見つけられなかつた。

まず、カグワは間違いなく、西エウリア国の巫女であること。選定の儀式の途中でこちらへ飛ばされてきてしまつたから、ひよつとしたら自分が巫女に選ばれたなんて単なる勘違いなのではないかと思つていた。しかし、北国は、カグワを誘拐したわけではない。「西の国の巫女」を誘拐したのだ。確信犯であつた。わざわざ選定の儀が行われるのを待って、選ばれた巫女をその瞬間に時空の狭間へと吸い上げたのである。カグワは、十人の聖女の中から選ばれた、新しき巫女であつた。

そして、北国がそうまでして巫女を誘拐した動機である。北国は、西国が「東は北の一部である」と認めることを条件に、巫女を誘拐した。認めれば巫女は返す、という脅し文句を送つたのだという。しかし、もしも西がそれを認めなかつた場合は、どうするつもりなのだろう。北国は、人質である巫女を殺してしまうかもしれない。殺さないまでも、このまま緩い監禁を続けることはなくなるだろう。そして、もしも巫女が殺されたら、その次はどうなる。西国にとつ

て、巫女は神の代弁者だ。神の遣いである。自分たちの神が虐げられたと知ったら、西国とて黙ってはおるまい。??戦が起きる。

（どうしよう……私の所為で、たくさんの人が死ぬ）

カグワは、ぎゅっと膝を抱える力を強めた。

別にカグワは、巫女になることを熱望していたわけではなかった。巫女には一の君ネイディーンがなるのだと思っていたし、別に巫女になんてならなくても良かった。だが、それでも巫女に選ばれたのが自分なのだとしたら、自分は巫女として民に救いの手を差し伸べなくてはならない。希望を、幸福を与えなくてはならない。だというのに、実際はどうだろう。人質として囚われ、多大な迷惑をかけている。そしてひょっとしたら、戦争の引き金をひいてしまうかもしれない。

どうしよう、と、抱えた膝に顔を埋めると、不意に隣に気配を感じた。顔をあげれば、心配そうな表情をした仗身がこちらを見下ろしている。

彼は謁見の間にはいなかったから、当然、事の仔細など知らない。だが、カグワが悩んでいることは一目瞭然であったし、その悩みの深さがどの程度のものか、説明されずとも感じ取ったのだろう。

彼は大丈夫か、とも、何があったのか、とも何も問わない。ただ黙って、カグワのうずくまるベッドの脇に膝をつく。

「ゆたや……」

カグワが弱々しい声で告げると、「はい」と穏やかすぎる声で返事をした。

「私……巫女に選ばれてしまったらしいの」

「ええ……」

「だから、ここに囚われているんだわ」

「……ええ」

「どうして、私なんかが……巫女に選ばれてしまったのかしら」  
「……」

ユタヤは顔をあげ、カグワの表情を見上げた後、首を傾げた。巫

女に選ばれたカグワにもその選定の理由がわからないのだ。仗身にわかるわけもない。

彼は静かに瞑目し、「私は存じませんが」と応えた。

「何故カグワ様が巫女なのか、何故巫女がここに囚われるのか、私には明確な答えを出すことができません……。私は、巫女であろうと聖女であろうと只人であろうと、貴女を護るだけです」

カグワは彼を見下ろして、その真摯な瞳に言葉を失った。

ユタヤは他の聖女たちの仗身と比べてみても、恐ろしいほどに猥身的であった。あの時空の狭間に吸い込まれそうになった時にも、いの一番に駆けつけたのは彼だ。聖女以外は立ち入ってはならぬと言われたあの場所に、少しの戸惑いも見せずに飛び込んだ。

何が彼をそこに至らせるのか、カグワは知らない。ただ、この従順さが今は恐ろしく思えた。??もしも、西国が色好い返事をせず、北国が怒り、西の巫女を虐げることになった場合。彼は、どうするのだろう……？

それから長時間、カグワはずっとベッドの上でうずくまり続けた。ユタヤは黙ってベッドの下に寄り添った。

そうこうしているうちに時間が経って、夕刻頃。「夕食の準備をいたします」とカグワの部屋付きの小間使いであるユーリが現れた。

カグワは「そんなことよりも」とユーリに食事の準備をやめさせて、皇太子シルディアの部屋に呼ばれているからオレークに繋いでくれと頼んだ。ユーリはそれは大変と快諾し、すぐにオレークを呼んでカグワを皇太子の部屋へと案内してくれた。

今回、呼ばれたのはカグワだけである。カグワが人質であるならば、当面の間はカグワにも、その従者にも危害の加えられることはないだろうと判断し、ユタヤは部屋に置いて行くことにした。ユタヤもそろそろ皇室ばかり集うこの宮殿には危険がなさそうだとわか

つてきたらしく、皇太子の部屋にまで同伴することは遠慮した。

「夕食は、殿下の部屋に二人分用意させておきました。どうぞごゆるりと」

カグワを皇太子の部屋の前まで連れてきたオレークは、そうとだけ告げて頭を下げた。今回は部屋の中までは着いてこないらしい。シルディアが内々にカグワを呼んだためであろう。

一人皇太子の部屋の豪勢すぎる入り口の前に取り残されたカグワは、ふう、と一度息を吐いた。皇太子に会うのはこれが初めてではないし、彼の部屋を訪れるのだって初めてではない。しかし、また、あの得体の知れない「毒気」を味わわなくてはならないのだと思うと、自然と体が力んだ。ともかくにもいつまでも此処に立ち尽くしているわけにはいかない??。カグワは扉をノックして、「かぐわです。入ります」と端的に告げるなり、扉を開いた。

開いた扉の先には、数日前此処を訪れた時と何ら変わらぬ風景が広がっていた。だだっ広い空間の中に、遊戯場や食卓、風呂場もある。そして部屋の中央には大人五人は眠れるであろう巨大なベッドが置かれていた。ベッドには天蓋、薄い紗幕がかけられている。

「あつ」

ベッドの方から若い娘の声がした。なんだろうと思って中央に置かれたそのベッドの方を見やると、紗幕を揺らして中から一人の若い娘が飛び出してきた。愛らしい容貌をしているが、その資格好からみるに、女中のようだ。皇太子の部屋を掃除したり片付けたりすることが役目なのだろう。

「待ってたよ、カグワ」

紗幕の内側から、今度は若い男の声がする。こちらには聞き覚えがあった。皇太子シルディアのものだ。

「君はもういいよ。行って」

シルディアの声は冷たい。行って、と言われた女中はそれでも少しも気分を害した様子はなく、何故か少しだけ着崩れた服を直しながら、「失礼いたしました」と頭を下げて部屋を出て行った。すれ

違い様にちらりと見やった彼女の頬は、ほんのり赤く染まっている。カグワはきょとんと首を傾げた。

「?? 謁見は午前中だったのに、遅いじゃないか」

言いながら紗幕を持ち上げ、ベッドの端に座ったシルディアは、謁見の間で会った時とはやはり違う。重そうな正装服も纏っていないし、皇室の人間らしい重圧感のある喋り方もしなかった。

「一人で考えたいことがたくさんあったから」

そう答えると、「まあそうだろうね」と言って彼はベッドの横に置かれた長椅子を示した。座れ、ということらしい。

「シルディアは、あの後すぐに部屋に戻ったの?」

「君を待つ以外にやることもなかったからね。暇つぶしにメイドと遊んでた」

さつき追い出された女中のことだろう。カグワは、「ああ」と頷いて、長椅子に座った。すると、シルディアはくすと笑う。前にベッドの上に寝転んでいた時は顔色も悪く病人のような風体をしていたが、今日はすこぶる気分が良いようだ。

「君、全然意味わかってないだろ」

「なにを?」

「あ、もしかして巫女は純潔じゃなくちゃいけないの?」

「は?」

カグワがぼかんと口を開くと、「まあいいよ」とシルディアは足を組んで机の上に置かれたマグカップを手を取った。おそらく今しがた出て行った女中が淹れたのであろう紅茶はまだ湯気をたてていた。

まあいいや、とカグワも思い直し、長椅子の上に深々と座る。今日のシルディアからは以前訪れた時のような毒気が感じられなかった。今回は前と違って彼が『力』を発揮しようとしていないためだろう。

「で、今日は一体何の用?」

軍に聞かれることを恐れてわざわざ感応の技を使ってまで呼び出

したのだ。それなりの用事があるのだろう。そう思ってカグワは身構えて来たのだが。

「別に？　これと言って用事はないけど？」

シルディアはあっけらかんと言う。ますます呆氣にとられるカグワの顔を見て、シルディアは自分の白金の髪をいじりながら続けた。

「用事がなきゃ呼び出せないほど君は高いのか」

仮にも巫女だから安くはなからうが、と思いながらも、そんなことを言うわけにもいかず、「そういうわけじゃないけど」と首を横に振る。

「じゃあいいだろ。？？初めてなんだよ。俺と同位の相手っていうのに会うのがさ。シルディア、なんて呼び捨てにされたことも今までなかったし……」

「これからも誰かに許可なんて取らなくていいから好きな時に俺の部屋来てよ」などと言うシルディアが、子供のように笑うものだから、今度は首を縦に振ることしかできなかった。それに、自分の前にへりくだらない相手と話がしたいというその気持ち、カグワにもわからないわけではない。

本当に他に用事のあったわけではないらしく、それからシルディアは紅茶を飲みながら他愛もない話を始めた。カグワもそれならばと幾分気を楽にして、彼の話に付き合った。

「カグワは今いくつ？」

「今年十五になったところよ」

「へえ。俺よりは年下か」

「そうなの？」

「うん。あいつは？　えーっと……ユタヤだっけ？」

「ゆたやは……十八よ」

「へっ、俺と一つしか違わないの。もっと年上かと思った」

「獣人だから……普通の人間よりも体の作りが大きいしね」

「へえ。そういうものなんだ。俺、獣人って見たことないからなあ」

「北国にはいないらしいものね。……シルディアはいくつなの？」

「俺？ 十七。もっと若く見えるでしょ」

「……同い年か年下かと思ってた」

「俺痩せ形だからなあ……」

一国の皇太子とは思えない、あまりにも凡庸な会話に安堵する。

『力』を使わなければ、彼も普通の少年なのだと、今更ながら悟った。カグワ自身も巫女という肩書きさえなければ、何の変哲もない少女でしかない。??彼と自分の立場は至極似ていると、思った。

「カグワは最近巫女になったばかりなんだろう？ 巫女になる前は何してたんだ？」

「巫女に選ばれるのは、巫女予備軍の聖女という集団からのみなのよ。だから私も、聖女の一人だったわ」

「それは、世襲なの？ 君は生まれた時から聖女なのか？」

「いいえ。聖女はその時代の巫女が国の全ての少女の中から選ぶの。私の場合、三つの時に選ばれて聖女となったわ」

「ふうん……なら、俺とは違うんだな」

「シルディアは現皇帝の第一子だって……さっき謁見の間で言っていたものね」

皇位は、世襲だ。西エウリア国でも王は世襲と決まっている。シルディアもまた、生まれながらにして王位を継ぐ皇太子だったのだろう。

「カグワには家族はいるの？ 家族がいる場合は、聖女と一緒に家族も巫女予備軍になるのか？」

「まさか。家族とは離されて、大抵一生そのまま会うこともないんじゃないよね。私にもお母さんが一人いたけど……聖女になるために後宮に入ってそれきり、一度も会っていないわ」

「そっか……今でも母親のことは思い出す？」

「いいえ。残念ながら、忘れちゃった！ だって私は後宮に入ったのは三歳の頃よ。思い出そうと思えば思い出せないこともないけど



……もうほとんど想像の産物」

「ふうん。そんなものか……」

素っ気ない、その相槌に何やら含みを感じて、カグワは問いかける。

「シルディアは？ お父上の皇帝陛下は病に臥せっておられると聞いたけど……お母上はお元気？」

「死んだよ。俺を産んですぐに」

一瞬言葉を飲み込む。が、シルディアが特に気にした風でもないのでカグワも平然を装い会話を紡いだ。

「……。……難産、だったのかしら？」

「いや、そういうんじゃない……毒殺されたんだよ。実の姉にさ」

姉、とカグワは目を丸くする。後宮で囲われ、大切に育てられたカグワには無縁の話であった。

「俺を産んだ母親は、正妃じゃなかったからね。正妃は姉の方だ。俺も産まれたばかりの頃の事なんて、誰にも教えてもらってないけど。……まあ、皇室の中でいざこざがあったってことだ」

さらりと言い放って、シルディアは微笑む。その微笑みに、毒気が浮かぶ。しかし不思議と、初めて彼と話した時に感じたような怖気は覚えなかった。ただ、これ以上は深く掘り下げないほうがいいと、本能が訴える。

カグワは慌てて話題の転換を試みた。

「シルディアはいつから巫力……えーと、『力』を使うようになったの？ 貴方はすごい『力』の持ち主だから、きっと小さな頃から訓練してきたのでしょうかね」

「訓練？ 訓練なんかしてないよ」

きよとん、とするシルディアの顔から、毒気が消える。彼の顔が、普通の少年の顔に戻った。

「俺もよくわかんないんだけどさ、『力』を持ってる奴っていうのには、二種類いるんだって。生まれつき『力』を持ってる奴と、『力』の素質を持っている奴。『力』の素質を持ってる奴は訓練する

ことで『力』を開花させて増強できるけど、『力』そのものを持って生まれた奴は訓練する必要もない。訓練したところで増えることもないし、何もしなくなったら減ることもない」

そう軍の奴に教えてもらった、と言った皇太子は、生まれつき『力』そのものを持っていたということなのだろう。カグワは瞬きをする。初めて聞く話であった。

「『力』そのものを持って生まれた人なんていうのが、いるのね……初めて聞いたわ」

「西国にはいないの？」

「わからないけど……少なくとも、聖女の中にはいなかったわ。だって後宮に入ってからというものの、皆で十年以上もかけてずっと巫力を鍛える修行をし続けてきたんだもの」

カグワは今は遠い、西の地を想った。十数年、あの狭い後宮の世界の中だけで生きて来た。やることといえば一つだけ、巫力を高める修行のみである。まさか、生まれながらにこんなにも強大な『力』を持っている人間がいるだなんて、知る由もなかった。十数年の年月をかけて磨いたカグワの巫力では、今日の前に座っているか細い皇太子に適うべくもない。

「修行かぁ……具体的には何するの？」

訓練の一つも必要なかったという皇太子は、興味津々の状態で身を乗り出してくる。カグワは苦笑した。

「ひたすら実践あるのみよ。……例えば、さっき貴方がやったみたいに、感応の技を試してみたり」

「感応の技？」

「ほら、さっき、謁見の間で……私の頭の中に直接語りかけてきたじゃない」

「ああ、あれか。あれ、感応の技っていうのか」

「私たちはそう呼んでるけど」

「他には？ 他にはどんな技があるんだ？」

「たくさんあるけど……未来の出来事を予知する先見の技とか。人

の心を読む読心の技とか……」

「カグワが一番得意なのは？」

「得意っていうほどじゃないけど……気感の技かしら。近付いて来た相手の気配を察知して相手を予測するっていう」

「へえー。そんな名前がついてんのか」

「逆に聞くけど、技に名前もなくて、どうやって使い分けてるの？」

「別に？ 使い分けるっていう感覚もないし……その時々、必要なことを必要のようにやるだけだよ」

至極当然のことのように彼は言う。生まれながらに『力』を持っていた彼にとっては、それは歩いたり走ったり、息をしたり笑ったりするのと同じように、自然にできることなのだろう。訓練することでは『力』を扱えないカグワには全く理解できない感覚だ。

「私は修行をして、ようやくできる技もいくつか会得したくらいのものだけど……貴方には、なんでもできてしまうのね。そのための能力が生まれつき備わっているんだもの」

感心したように思わず呟くと、「いや」と彼は俯いた。その顔に影が、毒気とはまた異なる暗い影が落ちる。

「確かに俺は、訓練なんかしなくても『力』を発揮できる。けど、自分の『力』を制御することはできない」

「制御……？」

うん、と頷いた彼は前髪をゆっくりかきあげた。細い金髪がさらさらと指の間からこぼれおちていく。

「見たくないのに見てしまう。聞きたくないのに聞いてしまう。やりたくないことをやってしまっ、それを止めることができない。……『力』が暴発するんだ」

そんな経験ある？ と尋ねられてカグワは激しく首を横に振る。やれと言われた技ができずに落胆することはあっても、力が勝手に働いて己でそれを止められなくなることなんて、一度も経験したことがなかった。ゆえに、想像もつかない。

「そういう時は……どうするの？」

「どうすることもできない。俺自身に止められないのに、誰かに止められるわけもない。だから、時が経って収まるのを、待つ」

発作みたいなもんだよ、と言って、彼はいつのまに飲み干したのやら空っぽになったマグカップを片手に立ち上がった。広すぎる部屋を歩いて、暖炉脇に置かれたポットを取りに行く。その足取りは、やけに軽快だ。

「??君が、此処まで連れ去られてしまったことは巫女である君にとって、あるいは西国にとっても不幸なことかもしれないけど……俺にとっては幸運だったな」

「どうして？」

「こんな話を聞いてくれる奴、この国の中にはいないからさ」

「『力』を持っている人が、周りにいないから？」

「いるさ。軍の中にはごまんという。奴らは『力』を戦に利用するからな。でも、奴らは『力』の持つ得体の知らない恐怖を知っている。だから、誰も俺に近付こうとしないんだ」

ポットから紅茶をカップに注ぐその背中はやけに小さく見えた。

振り返ると、何故だか満面に笑みを浮かべている。

「でもカグワは、いいね。服従して仕方なく答えるんじゃない、興味を持って尋ねてくれる。俺を怖がることもない」

「……。……全く怖くないと言ったら嘘になるわ。最初に貴方に会った時、やっぱり得体の知れない怖気を感じたもの」

「そうだったの？　ぐいぐいいろんなことを尋ねてくるから、初めて俺を怖がらない人に会ったと思ったのに」

「それは……。……突然知らない所に飛ばされて、わけもわからず貴方に会ったんだもの。尋ねたいことは山ほどあったわよ」

「そうかあ……。じゃあ、今も、俺が怖い？」

マグカップに紅茶をなみなみ注いだまま、悄然とうなだれる彼を見上げ、カグワは口をへの字に結んだ。彼はカグワよりも二つ年上だと言ったけれども、そんなことも疑わしいくらい、幼く見える。

背丈は断然カグワよりも高いし、顔つきもよく見れば大人っぽいのであるが、醸し出す雰囲気の所為だろうか。

「今は……怖くないわ。シルディアがどういう人なのか、わかったからかな」

そう答えると、シルディアの顔がみるみるうちに喜色一色に染まった。彼はマグカップを机の上に置いて、軽やかにベッドに腰掛け、カグワと向き合う。

「シルディアって、俺のことをそう呼ぶのもカグワだけだ。みんな皇太子様とか、殿下とか、シルディア様とか、そんなふうにか呼ばないのに。対等な感じがして、いいな」

嬉しそうな彼の言葉を受けて、カグワはふと記憶を思い起こしていた。西の国にて、巫女選定の儀の執り行われたあの日に、似たようなことを言われたことがある。

「??一の君としての私を見ても、誰もネイディーンという一人の女としては、見てくれなかったわ。その中で、貴女だけが、私と同等に接してくれた。私は、とても嬉しかった。」

そう語ったあの玲瓏とした美女は今、西の国で何をしているだろう。本当なら、カグワなどよりも彼女が巫女になるべきだった。彼女が巫女ならば、と思う。巫力も強く、頭も良く、何でも出来る彼女なら、こんな風に北の国に囚われることもなく、よしんば囚われたとしても、なす術もなく戸惑うこともなかったらうに。

「なあ、カグワ……。お前、ずっと北の国にいろよ。難しい国の政治のことなんか放っておいてさ。この皇宮にいれば、何も不自由しないよ」

「……そういうわけにいかないわ。私は、西の国に帰らなくちゃ」

「どうして? 君が巫女だから?」

「そうね……。それに、西の国に帰って、話をしたい人がたくさんいるから」

カグワはそう答えて、静かに瞑目した。

目を瞑れば脳裏に浮かぶ、西の国の人の顔。巫力を封じられた身で遠くの地を察知したり、あるいは遠くの声聞き取ることこそできないが、思いを馳せることならできる。

最西端の変わり者と呼ばれたケニー老翁に会って、話がしたい。巫女となった今、カグワはどうするべきなのか。

一の君、ネイディーンにも会いたい。貴女ならこういう時どうする、と問うて、助言を乞いたい。

他の聖女たちにも会って、話がしたい。聖女として今まで培ったこの力を封じられた時、私たちには何ができるのかしら。巫力の修行のみを課された彼女たちに、提起をしたい。

幼い頃からずっと身の回りの世話をしてくれたロマーナにも会いたい。会って話をするでもなんでもなく、あの後宮の中の日常を過ごしたい。彼女はカグワにとって母代わりであり姉代わりであった。

そして、ユタヤに??。

カグワは、西の国にはいない、共に北の地へと飛ばされてきた従順な仗身のことを思った。部屋に帰ったら、ユタヤと話をしよう。文脈がまとまってなくとも、何が言いたいのかわからない支離滅裂なことでも、ユタヤは真摯に耳を傾けてくれる。ただ黙って耳を傾けて、時折相槌も打って、カグワの心の中の不安を落ち着けてくれるに違いない。

黙って瞑想し、西の地を想うカグワを見て、シルディアは特に声をかけるでもなく静かに温かな紅茶を啜っていた。孤独な少年には、目を瞑ったところで瞑想する相手もないのだ。少年の目には、カグワが眩しく映っている。

カグワはまだ、彼の持つ底知れぬ心の闇には気付いていなかった。

## 10、無償の愛

仗身の心得？？いかなる時にも主の傍を離れず、主の危機を逸早く察知し、己の身を捨てても主を護るべし。

その心得を胸に刻んでもう幾年の月日が過ぎたことだろう。まだ一桁の年の頃から、主を護ることを心に誓って今まで生きて来たが？？青年は今、誰もいないがらんだうの部屋の中に一人取り残されている。

ユタヤは、主のために用意された広くて落ち着かない部屋の隅、窓際にあぐらをかいて座ったまま、ぼんやりと外の景色を見つめていた。

カグワを追って時空の狭間に飛び込み、共にこの北の地へ投げ出されてから、そろそろ十五日が経とうとしていた。

カグワが皇太子や将軍と謁見をしたあの日からも数日過ぎて、カグワは人質としてここに囚われていることを逆手に取り始めていた。少女は、人質であるからには危害を加えられることはないだろう、と踏んで、自由気ままに皇宮の中を徘徊する。それでも初めのうちは、何かあるかわからないから、と彼女の勝手な行動を案じていたユタヤであるが、あまりにも彼女が奔放なものだから、最近では案ずることすら馬鹿らしく思えるようになった。

まるで、あの後宮にいた頃と何も変わらない。カグワの君は自由だ。

そして今日も取り残されたユタヤは一人、部屋の窓辺に佇んでいた。日は高いが、窓ガラスを一枚隔てた向こう側は恐ろしく寒い。秋も深まり、この北の地では昼間でも気温はそこまで上がらないという。夕方になってもまだ戻らぬようなら、彼女を探しに行こうと



決めて、しばらくは窓辺で休むことにしていた。彼女には彼女の思惑があるのだろうから、あまり無闇にそれを邪魔してもいけない、と思う。

なにがなんでも主を護ろうと、時空の狭間に飛び込みここまでやってきたが、獣を封印された自分は今とても、無力であった。武器となる刀たちも、西の国で変化した際に全て置いて来てしまった。

北の地はなにもかもが『力』によって統一されていた。実際にはどうかかわらないが、ユタヤはそういう印象を受けていた。故に、ユタヤにとってはこの皇宮の廊下を歩くことでさえ恐ろしい。『力』とは見えない圧倒的な何かである。見えない何かを恐れるのは、生き物としての本能だ。

そんな中で、カグワは強かった。カグワ自身も巫力を封印されてしまっているはずなのに、カグワは見えない何かを恐れない。そんな状況下で、カグワのことを自分が護ってやるのだと思うこと自体がおこがましくも思えるくらいに、彼女は強かった。

カグワを護るのだと、それだけを目的に生きて来たユタヤはその任務から解放されてしまうと他にやることもなかった。仕方なく、ぼんやりと外を眺めている。寒さから逃れるために二重に張られた窓の外、それまで高く昇っていた太陽が、雲によって覆われた。天気がくずれそうだ。ひょっとしたら雪が降るのではないか。

ユタヤに近い部分だけ、窓が結露していた。ユタヤの体温で暖まっている所為だろう。その白く曇った硝子をなんとはなしに服の袖で拭おうとした、その時、不意にトントんと扉がノックされた。

こんな時間に誰だろう、と思う。カグワの面倒を見てくれている小間使いのユーリなら、今カグワが部屋にいないことは知っているはずだ。他の誰が来たにしろ、当然用事はユタヤではなくカグワにあるはずで、今此処にカグワはいないのに、と困惑していると、扉は無遠慮に開かれた。

「あれっ？ カグワ、いないの？」

大雑把な仕草で開かれた扉の向こうから現れたのは、なんと、この国の皇太子であった。

何故こんなところまで、とユタヤは面食らう。今までにも何度かカグワが彼の部屋へと呼び出されたことはあったけれども、彼が自らわざわざ此処まで足を運んで来たことは、一度もなかった。

「申し訳ございません、殿下……今、かぐわの君は皇宮内を散策中でして」

ユタヤは慌てて窓際から彼の方角を向いて膝をつく。皇太子シルディアは今しがた自室から出て来たのか、皇太子とは思えないような軽装をしていたが、それでも放つ気迫は皇太子以外の何者でもない。

「散策中？ 一人で？」

「はい」

「護衛も連れず？」

「ええ」

「不用心だな……人質だから滅多なことがない限り害されることもないだろうとでも思っているのかな」

「いかにも……」

「まあ、事実、そうだろうけどね……特にこの皇宮内には軍人もいないし、安全だ」

そう呟いたシルディアは、カグワのいないことを知って諦めて部屋を出て行くかと思えば、ずかずかと部屋の中央までやってくると、食卓の椅子を引いてどかりと座った。彼は堂々と足を組んで、頬杖をつく。

「カグワが出て行ってからどれくらい経つの？」

「……朝食を取ってすぐ後ですから……そろそろ二刻は過ぎるか」と

「へえ。じゃあそろそろ帰ってくるかな」

「さあ……それは私にも存ぜぬところでありますが」

「まあいいや。ちょっと此処で待つよ。何か暖かい飲み物はない？」

「……今すぐに」

まさか皇太子ともあろう身分の人間が、こうも安易に居座ろうとするとは思いもしなかったため、内心動揺しながらもひた隠し、ユタヤは立ち上がった。今朝ユーリが置いて行った茶の葉と、暖炉にかけられた湯がまだ残っている。主の身を護るのが仗身の本業とは言え、茶をいれることくらいなら満足にできた。

食卓に座ったまま興味深そうにきょろきょろと部屋を見回しているシルディアは、この部屋の内装を見るのは初めてのようだった。皇太子とは言え、さすがに皇宮に無数にある部屋一つ一つの内装までは知らないのだろう。

「……思ったほどは、広くないんだな」

ぼつりと皇太子は呟くが、とんでもないことであった。もともとカグワの住んでいた後宮の三の宮にさえ、此処まで広い部屋はなかった。

「此処に二人でいるのは狭くない？」

「……西国ではこれほど広い部屋はいくら巫女の君と言えどお持ちではありませんでしたゆえ……狭いと感じたことなどございません」

「そう？ でもベッド一つしかないじゃない。二人で寝てんの？」

「まさか。私には床の上で十分でございます」

「ふうん」

どこことなくつまらなさそうに答えた彼の前に、注いだ紅茶を差し出す。これでユタヤの役目は終わりだ。カグワを待つという皇太子の邪魔にならないようにと部屋の端に控えようと身を引くと、「待てよ」と皇太子本人に止められた。

「ちよっと、お前とも話してみたかったんだよね」

「私と、ですか……？」

「おう。だって俺、獣人って見たことなかったからさ」

北国には、全く獣人がいないのだという。ユタヤも知識としては

知っていた。

「ちょこつと話をしようよ。向い側、そこ、座れよ」

言ってシルディアの差した先は、彼の座っている食卓の向い側だ。皇太子と対面することになる。ユタヤは慌てて首を横に振った。

「滅相もございません……私は後ろに控えておりますゆえ、気になることがあれば何でもお申し付けください」

「まあ、玉座に座っているならそれでもいいんだけどさ……此処、ただの食卓だろ。後ろに控えられると茶が飲み難くて仕方ない。誰も見てないんだし、いいじゃないか。そっち座れよ」

まるでかぐわ様のようなことをおっしゃる、と思いながら、ユタヤは仕方なくその言葉に従った。とは言え、ユタヤの主はあの奔放なカグワである。このような高貴な身分からの異例な指図にはすっかり慣れていた。

「名前は確か、ユタヤ、だったよな」

「私なぞの名前までも覚えておいでですか……恐縮であります」

「覚えてるよ。カグワの口からしょっちゅう聞くからね」

「……勿体ない」

「随分とへりくだるじゃないか。俺、よくわからないんだけど、仗身っていうのはそんなに下役なのか？」

「仗身が、というよりも、我々巫女の仗身は獣人と決まっておりますから。獣人は、本来高貴な御仁と話せるような身分ではございません」

「へえ、不思議だ。獣人は差別されるわけだ」

「……我々は、人でありながら、畜生類の性根も持っておりますゆえ」

「あー、聞いたことがある。西国では獣人を蔑んで人畜と呼ぶこともあるとか」

「……」

ユタヤはシルディアの対面に座ったまま、表情の一つも変えずにそっと目を伏せた。初めて獣人の獣の姿を見た人間は大概それを「

化け物」と呼ぶ。ゆえにだろうか、獣人そのものを人畜と呼ぶ人間もいるらしい。が、幸か不幸か、まだユタヤは直接それを言われたことはない。

「俺からすれば、『力』を持つ人間も獣人も等しく化け物だと思うけれどね。人智を越えたなにかを『力』と呼ぶのなら、獣人のそれだって同じ『力』だろうと」

しれっと言うシルディアは、確かに化け物並みの『力』を所持していた。だが、だからと言って彼の『力』と獣人を並列にしても良いものか。

「我々の『獣』は、いわゆる『力』とは異なり、自意識で操れるものではありません。今でこそ殿下や巫女君の術によって「獣」を制御しておりますが、術さえ解けてしまえばただの獣と同じ」

「あはは。それこそ俺と一緒にじゃないか。俺もたまに自分の『力』が制御できなくなって困ることがあるよ。そのたびに犠牲者がでる」

「……私には殿下のお持ちのような『力』のことはよくわかりませんが……それでも殿下が人であられることには変わりありますまい」

「なるほど。確かに俺の『力』は暴発しても、俺が俺であることに変わりはないな」

シルディアは頬杖をついたまま、面白そうに笑った。その『力』を含んだ強い眼差しにはまっすぐとユタヤの姿が捕えられている。

「一つ疑問なんだけど、獣人っていうのは結局人なの？ 獣なの？」

「……そのどちらとも言い難い存在です。どちらにもなり得ると」

「まあ、そうだよなあ……今でこそ姿は完璧に人だけど、獣にもなれるわけだし。人にしては力が強すぎるってカグワも言ってたし、でも考える脳は人のものだろう」

「……はい」

「でも、基本的には、人の姿をしている時は機能は人と同じってい

うことだよな？」

「はあ、基本的には……」

シルディアの質問の意図が読めず、ユタヤはひとまず頷いた。確かに人型の時には、二足歩行であり、人と同じ物を食べ、同じように喋る。基本的には人間と同じ機能をしていると思う。

そして、次のシルディアの質問に、瞠目した。

「ってことは、生殖機能はどうなるんだ？ 人型だと、人間の男と同じなのか？」

「……は？」

全く予想していなかった問いかけに、口が縦に開く。獣人に関して興味を持って尋ねてくる人間は、主であるカグワを筆頭に、山といたが、それを尋ねられたのは初めてだった。

「お前、人で言えば十八なんだろう？ 人間の男なら、悶々とすることもあるじゃないか」

「な、にを……」

「それともそこは獣の性なのか？ 繁殖期に同種の雌を見ないことには特に反応することもない、と」

「……」

言葉を失う。そんなわけないじゃないかと言いたい気持ちもあるが、獣人を知らない相手に怒っても仕方がない。ユタヤは一つ溜め息を落としてから、冷静に答えた。

「……恐らく、人間の男と同じではないかと。少なくとも獣の性ではありません」

「ああ、そうなの。じゃあカグワと同じ部屋は辛くない？ それとも一人の時にこっそりなんとかしてるとか」

「……」

再び言葉を失った。何と答えて良いやら全くわからない。というよりも、どうしてそんなことを聞かれているのだらうと思う。よりによって皇太子殿下が、何故そのようなことを問うてくるのか。

その訝るような表情から、ユタヤの心を読み取ったように、シル

ディアは笑った。彼はカップの紅茶を飲みながら顔を傾けて、さらにその金髪をなびかせる。

「皇太子ともあろう者が、下世話な話を、とでも言いたげだね。そうか、聖女の園だったという後宮では、こんな話をすることもなかったんだろな」

「……御意」

「でもね、皇太子だからこそ詳しいのさ。俺は幼い頃から性交について下世話なものではなく、神聖なものとして教わった。皇室の人間として、次期王として、俺の最も重要な役割は遜色のない跡継ぎを作ることだからね」

言われてみれば、至極当然のことであつた。世襲でない巫女の世界では縁のない話であるが、皇室のように世襲の制度が布かれているならば、それは時代を創るための一大行事でもあろう。

「軍は、俺に『力』を発揮しろという。この国のためだ、『力』を使えという。皇室は皇室で、俺に子宝を作れという。この国のために立派な世継ぎを作れという。??そのどちらも、シルディアという一人の人間としての俺は見えないんだろな」

同情を誘うようなその口ぶりに、些か困惑する。皇太子はそんなユタヤの様子など少しも配慮せず、「でも」と笑った。

「でも、カグワは俺のことを見てくれる。面白いことにね。誰も彼もが皇太子である俺を恐れるのに、カグワは少しも恐れない。普通の人間に戻ったみたいなのがする。いや、俺も普通の人間なんだなって気付かされる??な? お前もそう思うんだろな?」

同意を求められて、今度は迷うことなくしつかりと頷いた。

カグワは、獣人であるユタヤにも普通の人間と同じように接した。彼女を護らなくてはならない、自分は彼女の仗身だと強く自分に言い聞かせる一方で、彼女と一緒にいると自分が獣人であることなど忘れてしまいそうになることがある。自分は普通の人間なのではないかと??だがしかし、ユタヤの場合は、錯覚だ。

「しかし、私の場合は、普通の人間ではありませんから」

「だからこそ、感動も一入だろう。そういうところに惚れ込んで、彼女の仗身なんぞやってるんだろ？」

「確かに彼女の人柄には惚れ込んでおりますが、仗身である理由ではありません。むしろ、仗身であるからこそ人柄に惚れ込んでいるというだけのことです」

「人柄に、とかそういうことを言ってるんじゃない。不思議に思ってたんだよ。どうして、お前はあんなちっぽけな女に対してそんなにも献身的になれるのかなど。でもよくわかったよ。彼女は確かに魅力的だと思う。??そういうことなんだろう？」

ユタヤは大きく目を見開く。どういふことだ、としらばっくれることも出来たのに、それをしなかったのは生来の生真面目な性格ゆえであろう。というよりも、彼は何を言っているんだ、と思う。

「私がかぐわ様の仗身となったのは、まだ年端もいかぬ幼子の頃です。その頃より、私はかぐわ様をお護りするために生きるのだと誓ってきたのです」

「それは、彼女が巫力でお前の『獣』を封印していたからだろう？ 一種の呪縛みたいなものじゃないか。その呪縛から解き放たれた今、何故お前は彼女に尽くす？」

「何故、って……」

「今お前の『獣』を封印しているのは俺だ。正確に言うならば、お前の主は今、俺じゃないか」

「それは……」

ユタヤは言葉に詰まった。考えたこともなかった。

確かに、巫女と仗身との誓約は、その『獣』の性を封じる事によって成立している。しかし、この北の国に来てカグワの『力』が封じられ、自分の『獣』までもこの皇太子によって封じられた時、一番最初に思ったことは、「このような状態で、どうやって巫女をお護りしたらいいのだろう」という不安でしかなかった。よもや、これで主が変わったのだなんて、思うはずもなかったのである。

ユタヤはしばし逡巡し、やがて静かに首を横に振った。『力』如



何の問題ではないのだ。この胸に刻まれた誓約は、そうそう簡単に書き換えられるものではない。

「……それでも、私の主はかぐわの君です」

「それが妙だと言っている。あの女に惚れてる以外に、何の理由があつてそうまで尽くす？」

「幼心に誓った、忠義です。ある意味では、それを愛と言い換えることもできましょう。ですが、それは殿下のおっしゃるような、男女間に芽生える愛ではありません。この方のためなら命を差し出してもいいと思える、忠義に基づいた無償の愛です」

「無償の愛……？」

シルディアの顔が、険しく歪められた。彼は肩肘をついたまま、己の頭髮をもてあそぶ。

「愛だとか、忠義だとか……そんなものが本当にこの世に存在することは、ないよ」

突如、彼の口調が静まり返る。その静かすぎる口調に、本能的な恐怖を覚えた。目の前に座っている少年は、どこを見ているともわからない虚ろな眼差しで、何かを捕えている。

「そういった飾り立てられた美麗句はね、必ず何かを覆い隠すための言い逃れでしかないんだ。忠義は、利己の益を隠し……愛は、性の欲求を隠す……。それはただの言い訳だ」

背筋がぞくと震えた。そして、気付く。皇太子は今、ユタヤを直接見ているわけではない。ユタヤを通して別の誰かを見ているのだ。ユタヤには彼の置かれている状況はわからない。だが、恐らく、彼は幾度も忠義を利己の益のために裏切られ、愛を性の欲求でしか味わったことがないのだ。故に、ユタヤの忠義を信じない。

「それでも私は、忠義と愛を巫女の君に尽くします」

負けるものかと強い口調できっぱり答えると、俯いていたシルディアがゆっくりと顔をあげた。彼は薄く笑って、「しつこいな」と言う。

「それが利己の益でないと、それが性の欲求でないと、どうして言

える？」

「私が獣人であり、かぐわの君が巫女であるからです。獣人に利己の益などありません。何故なら我々の性根は利益など考えぬ獣と同じだから。そして巫女の君に対して性の欲求を覚えることもありません。彼女は最も神に近い、神の代弁者だ。俗世とは切り離された存在なのです」

「ほう。なるほどね」

答えて、シルディアは口元を歪ませた。よかったこれで納得してくれたか、とユタヤが安堵したのも束の間、シルディアの笑みが蔑むような表情へとみるみるうちに変化していった。その変化に、慄く。

「だけどね、ユタヤ。それは差別と言うんだよ。さっき俺は、西国では獣人は人畜と呼ばれて差別されているんだねと言ったけれども、最も己らを蔑視しているのは、お前ら自身じゃないか。自分を獣と言う奴が、獣以上になれるはずもない。その上、お前は主だと言ったカグワのことまで差別するのか。巫女だから神の代弁者だからと言って、彼女を普通の女と捉えないのは獣人を普通の人と捉えないのに匹敵する差別だよ。彼女とてただの人間だと、どうしてお前は言わない？」

「……そういうつもりでは」

「では、どういうつもりなんだ」

責めるような口調で問いかけられて、答えに窮す。口をぱくぱくと開閉させているユタヤを前に、シルディアはにっこりと笑った。

「不愉快だよ、ユタヤ。実に、不愉快だ」

その笑みに、他人を拒絶するような覇気を感じる。この場から逃げ出したいくなるくらいの、威圧感を覚えた。

「出てけよ」

ゆっくりと発されるその言葉に、目を丸くする。皇太子は再びゆっくりと、続けた。

「この部屋から、出て行け」

この部屋はそもそもカグワのために与えられたものであり、そこにいていいとユタヤに言ってくれたのはカグワであるはずで、そこにやってきた皇太子は部屋の主を待っていた身で、何故ユタヤを追いつ出すのか。などと様々な疑問の繰り広げられる理性と、しかしながらもとは言えばこの皇宮自体が皇太子の物だと論ず心もあり、思考が複雑に絡み合う。

だが、頭の中こそ混乱すれど、目の前の男に「出て行け」と恐ろしいほどの覇気を含んで言われると、本能的にそれに従わざるを得なかった。逃げ出したくなるような思いで??いや、ユタヤは部屋から逃げ出した。

失礼いたします、と最低限の礼儀作法だけは徹底し、頭を下げて部屋の外へと飛び出す。当然、行く宛などない。

心臓が壊れるのではないかと不安になるほど、激しい音をたてていた。

??殺されるかと思った。

そんなわけがない。そんなわけがないとはわかっている。だが、あの皇太子の目で睨みつけられた時、そんなわけがないのに、命の危機を感じた。

武器など何も持たずとも、あの男はその目線だけで、人を殺めることができるのではないだろうか。

ユタヤはひとまず部屋から離れようと、夢中で足を動かした。彼の他には誰もいないだっぴろい赤絨毯の敷かれた廊下に、彼一人分の足音が響いた。心臓の音は、鳴り止まない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9892x/>

---

西国の巫女

2011年11月1日09時32分発行